

靈界物語 第二九卷 海洋萬里 辰の卷

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第二九卷』愛善世界社

1999(平成11)年02月03日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

～
～
～
～
～
～
～
～
～
～

目次

序

總説そうせつ

端書はしがき

第一篇

玉石混來ぎよくせきこんらい

第一章

アリナの瀧たき（八二三）

第二章 懸橋御殿（八二四）

第三章 白楊樹（八二五）

第四章 野邊の訓戒（八二六）

第二篇 石心放告

第五章 引懸戻し（八二七）

第六章 玉の行衛（八二八）

第七章 牛童丸（八二九）

第八章 高姫摺伏（八三〇）

第九章 俄狂言（八三一）

第一〇章 國治の國（八三二）

第三篇 神鬼一轉

第一章 日出姫ひのでひめ〔八三三〕

第二章 悔悟くわいごの幕まく〔八三四〕

第三章 愛流川あいるがは〔八三五〕

第四章 カーリン丸まる〔八三六〕

第五章 ヨブにふしんの入信〔八三七〕

第六章 波なみの響ひびき〔八三八〕

第四篇 海うみから山やまへ

第十七章 途上とじやうの邂逅かいこう〔八三九〕

第十八章 天祥山てんしゃざん〔八四〇〕

第十九章 生靈いきりやうの頼たのみ〔八四一〕

第二十章 道みちすがら〔八四二〕

〔 〕

序

本卷は前巻と共に、伊豆湯ヶ島の湯本館に於て、筆記者松村眞澄氏一人を相手に口述したものであります。同氏の健腕は一日に五百頁以上を、口述其儘原稿紙に淨寫されても、尚餘裕綽々たるには感じ入りました。本卷は二日と、少しく三日目に掛けて編み上げられました。私の息さへ續かば、二日間に容易に同氏の筆に寫す事が出来ると云ふ経験を得ました。炎熱しき折柄、伊豆の温泉旅館安藤唯夫氏方にてしるす。

大正十一年八月十三日

總説

黒姫が保管せし黄金の神寶紛失の爲、高姫に放逐されて、鷹依姫、龍國別、テリスタン、カーリンスの四人が種々苦辛して、南洋諸島に出没し、玉の所在を捜

索し、遂に南米高砂島に渡り、アリナの瀧にて一策を案出し、種々の玉を蒐集し、最後に黄金の玉を得て鏡の池を立去り、アルゼンチンの大原野にて神の訓戒を受け改心なし、それよりアマゾン河を遡り、玉の森林に迷ひ込みし物語と、高姫が言依別命、國依別の後を追ひて高砂島に、常彦、春彦と共に渡り來り、是又同原野に於て神の訓戒を受け、悔悟の花を心に咲かし、玉の森に迷ふ鷹依姫を救はむと、天祥山を越え進み行く、面白き改心物語であります。

大正十一年八月 於伊豆湯ヶ島

王仁識

端書
はしがき

靈界物語 『海洋萬里』 (辰の巻) より末の巻に至り、南米太古の物語を口述しておきました。今日は人文大いに開けたる結果、國を建つるもの十數ヶ國になつて居ります。中にも南米第一の富源を擁して居るにも拘はらず、國民は遊惰にし

て何時も外國の厄介にばかりなつてゐるのは祕露の國であります。故に英米人は此國を評して『黄金の床に寝て居る乞食の國』と謂つて居ります。この文章は現今南米諸國の状況を示したもので、決して三十餘萬年前の太古の事では有りませぬ。只物語の参考として茲に引用した迄であります。

祕露はこの物語にはヒルの國と稱してあります。此國に無盡藏の富源を抱いて居ること、其の北隣なるコロンビヤ（物語にはカル）と共に第一に置かれて居ります。このヒルの國は現今でこそ南米中の二等國に沈淪したものの、昔インカ帝國としての全盛時代は、その文明の程度は上代の希臘、羅馬の隆盛なりし折に比すべきもので、現今の智利（物語にはテル）エクアドル、ボリビヤ等の諸國は皆『太陽の子』インカ王の配下にあつたもので、今を距る四百年前、彼の西班牙の奸雄ピサロが、アタワルバを殺害して國を奪ひ、西班牙の植民地と爲してから三百年間は、西班牙は戦慄すべき暴政を行つたので、國土が荒廢し文化は退歩したのであります。ピサロがアタワルバ王家から奪つた金塊でも、現今の價格で十億圓のものであると言はれた程に、此國は貴重な礦物を澤山に包藏して居ります。

この國を地理的に區別すると、南北に縦走するアンデス大山脈にて海岸、山嶽、森林の三地帯に區分されますが、海岸地帯は無雨地帯と稱せられ（物語参照）、時々霏雨は降りますが、雨らしい雨は無いから土地が砂漠的に見えますが、其間にはアンデス山（高照山）より發する五十餘の河川があり、その流域には數十の沃野があつて、良質の綿や、甘蔗の耕作が盛に行はれて居ります。此地域は昔インカ帝國時代には現在の數倍も耕作されて居たもので、今日も猶壯大なる昔時の灌漑工事の跡が方々に残つて居るのです。

此地帯は一見した所不毛の土地でありますが、水さへ引けば忽ち青々たる草野に變り、地味は非常に肥沃であります。また此地帯に於ける農業の特色は、異常な確實性を有し、害蟲は殆ど無く、又風水の害も絶無でありますから、その收穫も安全を期待されて居ます。一萬人餘を計上されて居る日本移民の大部分は皆この地帯の耕耘に従事して居るのです。

氣候は又一年中、日本内地の五六月の氣候で實に理想的であります。目下白人は約十萬町歩を耕して居りますが、灌漑に堪ゆる土地が尚二十萬町歩は殘存して

居ります。山嶽地帯は一名礦山地帯とも云はれ、礦産は無類無量であります。バナデウムは世界第一位、金と銀とは同第四位、銅と鉛とは同第六位で、石炭も到る處に埋藏されて居りますが、何分不便の爲に發掘量が少いのです。

次に特記すべき事は森林地帯で是が所謂極樂郷であります。この地帯はアンデス山脈の東方で長さ南北約一千哩、幅は二百哩乃至七百哩を出入する廣い地面で、海拔は二三千尺から一百尺の低地に及んで居る。祕露の行政區劃上、この地帯は八縣に分たれて居ますが、實に全國の三分の二の地積を占め、アマゾン河本流及び其支流の上流を爲す大小數千の河川は、皆この地帯に發して東走するのでありますから、將來に於て河川を利用する交通機關を起すには地勢上甚だ便利があるのです。この地帯の氣候はコロンビヤ、ボリビヤ、ブラジル（物語にはハルの國）國境近くは熱帶の暑熱で年中華氏九十度位の平均であるが、アンデス山系の斜面地及び海拔二千尺以上の地域は亞熱帶や温帶の氣候で、伊太利の南部に似て居るのです。旅行するものは實に良好な氣持を感じるものです。其フツクリとして柔かな何とも言へない身は、まつたく植物の吐く香氣に埋れた温室の中でソヨソヨ

と微涼に吹かれる様な具合で、古來この地帯を通過した人は凡て極樂の氣候だと感ずるものであります。

雨量は豊で一年を二期に區別し、十一月から翌年四月が最も多く（冬季）、五月より次第に少くなり、十月には最も少ない（夏季）。而して、地味の肥沃なることは無比である。

この地帯に足を入れた人の先づ驚嘆するのは、植物の發育の旺盛な情態であります。天を摩する巨木は到る所に見出され、香高き蘭科植物の多種なること、人間が乘れさうな巨大なる花、大蛇の如き大蔓草、人間の頭ほどある種々の美味なる果物、日本の如うな貧弱な植物界を見馴れた眼には膽を奪はれる位であります。又エボニー、マホガニー等の貴重なる材は到る所に見出され、藥草の豊富なることも、世界一と言はれて居ります。其の他染料、纖維、香料、ゴム樹等も頗る多く、一哩平方の地面に、植物の種類、凡そ一百万種に近い位で、實に植物の豊富なるには驚くの外は無いのであります。

次に此地帯に棲む動物も頗る多種類で、アマゾン河中に在る魚貝のみでも地中

海に棲むものの種類に匹敵するのであります。

最近この地帯の河川、湖沼で蒐集された珍奇なる魚介の種類は、一萬五千餘種に及び、その中八百餘種は全く新しい發見に係るものである。又アマゾン河の上流ワヤガ河附近には、握り拳ほどの大蝸牛や團扇程の蝶が居る。現今では猛獸毒蛇は少く虎と豹などが棲んで居るが、姿は却て小さく、左程怖るるに足らない。この森林地帯にも埋藏の礦物は極めて多量であれども、交通不便の爲に發掘されて居ないので。元來この地帯は地質上カルの國からボリビヤに至る石油及び黄金の大地脈であつて、英米の専門家は近年來熱心に調査を進めて居るのである。既に英國の石油業者はこの地帯のバチラヤ、ワヤガ河、サクラメントバンバ附近まで五百萬町歩、マドレチオス河附近で一千萬町歩、マラニヨン河附近で五百町歩に亘る石油コンセツションを獲得せむと、祕露政府に交渉して居るのであります。現に加奈陀人のロバートダンスミールと云ふのが、祕露政府との間に、同國の森林地帯を貫通さす二千四百哩の一大鐵道建設の契約を結び、四十五ヶ年間の經營權を握つたのも、實に此地帯の礦物運搬が主なる目的であるとさへ見られて

居る位であります。そして其目的は貴金屬よりも發掘の容易なる石油にあるのは當然でせう。此國の石油は七八百年前インカ帝國時代に發見されて採取利用され
たが、歐洲人の來るに及び、小規模乍らも各所で採掘事業が營まれた。將來は世
界一の石油産地として著明になるであります。

又ヒル（祕露）、カル（古倫比亞）との間に聳立せる日暮山（アンデス山）山
脈は海拔二萬五千尺もあり、其頂上には一大湖水があり、山の中腹には今も猶
邪氣の籠もれる死線と云ふものが横たはり、知らずに登るものは水腫病を起し、
直に死亡するといふ危険な箇所があります。概して此地方は藥草の多い所で又年
中降雨の無いのが特徴となつてをります。

大正十一年八月十三日

第一篇 玉石混來ぎよくせきこんらい

第一章 アリナの瀧たき（八二三）

千早ちはや振ふる遠とほき神代かみよの其昔そのむかし 支那チヤイナ、西藏チベット、印度ツッキの國くに

三國みくにに跨またがる青雲せいうんの山やまに鎮しづまる八王神やつわうがみ

神かみの心こころも澄すみ渡わたる 神澄彦かむずみひこや八頭やつがしら

吾妻彦あづまのひこの神司かむつかさ 黄金こがねの玉たまを黄金わうごんの

宮みやに納をさめて玉守彦たまもりひこの神かみの司つかさに守まもらせし

神世かみよを造つくる珍寶つづたから ウラルの彦ひこに狙ねらはれて

遂つひに危あやふふくなりければ 玉守彦たまもりひこを始はじめとし

朝日輝あさひかがやく吾妻彦あづまのひこ 玉たまを御輿みこしに納をさめつつ

黄金山下に現れませる
埴安彦や三葉彦

埴安姫の御許に
送り來りて暫くは

寶の倉に納めつつ
時の至るを待つ間に

黄金の玉は何時しかに
唸りを立てて龍門の

玉と釜とに別れつつ
頻りに不思議のありければ

埴安彦は神勅を
伺ひまつり桶伏の

山に再び埋藏し
朝な夕なに村肝の

心を配り守り居る
時しもあれやバラモンの

神の司の蜈蚣姫
いろいろ雑多と計略

めぐらし遂に黄金の
珍の寶を盗み出し

三國ヶ嶽の岩窟に
納めたるを三五の

神の司の國依別や
玉治別の一行に

玉の所在を嗅出され
再び玉は桶伏の

山の麓に千木高く
築きあがりし綾錦

貴の都に納まりて

あななひけう
三五教の神司

高山彦の妻として

つかまつ
仕へ奉りし黒姫に

玉の保管を命じつつ

ことよりわけ
言依別の大教主

神の教を遠近に

つた
傳へるませる時もあれ

日の出神の生宮と

みづか
自ら名乗る高姫や

黒姫達の心意氣

はなは
甚だ怪しくなりければ

言依別は神前に

すす
進みて祝詞を奏上し

玉照彦や玉照姫の

うづ
珍の命の手を通ふし

國治立の御前に

こ
請ひのみまつり伺へば

高姫、黒姫兩人の

こころ
心の空は定まらず

又もや玉を呑み込みて

けう
ウラナイ教を恢復し

此世を紊す虞あり

ことよりわけ
言依別は今の間に

金剛不壞の如意寶珠

むむ
紫色の寶玉や

黄金の玉を取出し

ひそ
私かに隠しおくべし』と

いと嚴かに宣り玉ふ。

言依別は意を決し

高姫、黒姫兩人が

生命の綱と朝夕に

頼みて守る神寶を

神の神言に従ひて

何時の間にかは取出し

錦の宮の奥深く

納めおきしと知らずして

松の根元に黒姫は

夜な夜な通ひて玉の番

隠せし場所の何となく

心にかかり黒姫は

ソツと唐櫃を押開けて

中をつくづく眺むれば

金光眩き寶玉は

空しく消えて玉無しの

唐櫃の姿に仰天し

四尾の峰の山麓に

薄き氷の張り詰めし

小池にザンブと飛込みて

生命を棄てむとなしけるが

窺ひ寄つたる從僕の

テーリスタンやカーリンス

バサリと聞えた水音に

コリヤ大變と玉の緒の

生命を的に嚴寒の

空をも厭はず池中に

飛び込み水底かひくぐり
黒姫司を救ひあげ

やうやう館に連れ歸り
生命を助けた黒姫に

無理難題を浴びせられ
困り入つたる折柄に

高姫司の耳に入り
龍國別や鷹依姫の

神の司を始めとし
テリスタンやカーリンス

黒姫五人に打向ひ
黄金の玉の所在をば

どこどこまでも捜し出し
錦の宮に持歸り

其責任を果す迄
再び聖地に歸るな」と

いとも厳しき命令に
涙を呑んで五人連れ

高山彦や黒姫は
大海原に漂へる

一つ島なる龍宮へ
玉の所在を探らむと

出で行く後に鷹依姫の
神の司は龍國別の

神の命やテー、カーの
三人を伴ひ高砂の

テルの港に安着し
南を指して進み行く。

あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ。

黒姫は私かに高山彦を伴ひ、龍宮の一つ島に黄金の玉の所在を探らむと、聖地を後に出行きたることは、既に如意寶珠（酉の巻）に述べた通りである。

又テーリスタンやカーリンスは亞弗利加の筑紫洲へ、玉の所在を探すべく決心して、聖地を出發したるが、途中にてつくづく考ふるに、廣袤數千里の筑紫の島に、一人や二人出かけた所で、雲を掴むよりも便りなき話と俄に心機一轉し、鷹依姫、龍國別の後に従ひ、一行四人、運を天に任して、南米（高砂島）へ玉の所在を探らむと、數百日の間、海上をさまよひ、大小無數の島々を、残る隈なく探索し、漸くにしてテルの港に安着し、夫より一行四人は路を南に取り、昔猿世彦が狹依彦神となりて、三五教を開きたる舊跡、蛸取村の山奥、アリナの瀧の上流、鏡の池の岩窟に巢を構へ、鷹依姫は岩窟の中に深く潜みて姿を隠し、龍國別は岩窟の外に庵を結び、日夜鏡の池の神勅を請うと稱し、玉の所在を居乍らにして探るべく計畫を立てたりける。

其方法はテーリスタンやカーリンスをテルの國や珍の國、ヒルの國、ハルの國までも巡禮姿となつて巡回せしめ、……此度テルの國の鏡の池の岩窟に月照彦神現はれ給ひ、如何なる玉にても鏡の池に献上する者は、富貴を與へ長壽を守り、盜難、風難、水難、火難、劍の難まで免れしめ玉ふ。何人に依らず、玉を所持する人は一日も早く、アリナの瀧の鏡の池に持參せば、福德圓滿、子孫長久の基を開き、遂には天下の霸權を握る神徳を與へらるべし。特に黄金色の玉は、最も大神の喜び給ふ所なり……と兩人は東西南北に手分けして宣傳に廻つた。

比較的質朴なる高砂島の間人は、テー、カーの宣傳を眞に受け、玉らしき物は、先を争うて、遠き山坂を越え、遙々とアリナの瀧の上流、鏡の池に持參し、神徳を蒙らむと參來集ふ者踵を接した。幾百とも知れぬ玉は一年ならずして集まつた。され共何れも珍らしき石の玉や、丸き團子石玉にて鷹依姫や龍國別の尋ね求むる黄金の玉は一つも集まらざりける。

時にヒルの國のアールと云ふ男、先祖代々より、神寶として祕藏したる黄金色の玉を取出し、恭しく柳筥に納め、美はしき御輿を造り、里人に擔がせ乍ら、數

十旒じふりうの旗はたを押立おしたて、法螺貝ほらがひを吹ふき、磬盤けいばんを叩たたき、横笛よこぶえ、縦笛たてぶえ等とうにて、長ながき道だう中ちうを
ねり歩あゆき乍ながら、アリナの瀧たきの月照彦神つきてるひこのかみに獻上けんじやうせむと、夜よを日ひについで長途ちやうとの旅たびを
つづけ、漸やうやく蛸取村たとりむらに安着あんちやくし、茲ここに暫しばし止とどまつて、七日七夜なぬかななよの御禊みそぎをなし、改あらため
て祭服さいふくを着ちやくし、鏡かがみの池いけに獻上けんじやうすることとなりける。

テーリスタン、カーリンスは一ひとわたり、高砂島たかさじまの目星めぼしき地ち點てんを宣傳せんでんし終をり、漸やうや
くアリナの瀧たきに歸かへつて、龍國別たつくにわけ、鷹依姫たかよりひめと共に、黄金こがねの玉たまの集あつまり來きたることを、
指折ゆびをり數かずへて待まちつつありき。

又また鷹依姫たかよりひめは岩窟がんくつの奥深おくふかく身みを忍しのび、竹筒たけづつを口くちに當あて、ド拍子びやうしの抜ぬけた聲こゑにて神しん
示じを傳つたへる生神いきがみ様さまとなり、龍國別たつくにわけは神勅しんちよくを伺うかがふ審神者さにはの職しよくを勤つとめ、國くに人びとをうまく
誤魔化ごまくわし、玉たまの收集しうしふに全ぜん力りよくを盡つくしてゐたり。

今日けふは朝あさから何人たれも來きさうにないので、鷹依姫たかよりひめも氣きを許ゆるし、龍國別たつくにわけ、テーリス
タン、カーリンスと鏡かがみの池いけの傍かたはらの庵いほりに集あつまり、懇談會こんだんくわいを開ひらきゐたり。

鷹依姫たかよりひめ、わしも年としがよつてから聖地せいちを離はなれ、はるばるとこんな遠とほいテルの國くにまで
やつて來きて、窮屈きうくつな岩窟がんくつの中なかに身みをかくし、蟲むしには咬かまれ、蟹かにには脛すねを挟はさまれ、

いろいろと辛抱して、齒の抜けた口を無理に「すぼめ」て、こんな重たい竹筒を吹かされ、丸つきり野師の様な所作をして、玉集めをせなきやならぬと思へば、いくら神界の爲、世界の爲とは言へ、情無うなつてきた。玉は山の如くに集まつたけれども、一つも黄金の玉は出て来ず、團子石に毛の生えた様な、ヤクザ石ばかりで、目的の寶玉は一つも集まらず、……あゝヤツパリ此島には、黄金の玉は来て居らぬと見えまするワイ。わしも何時迄もこんな窮屈な眞似は叶ひませぬから、一つ代つて貰つて、わしは外へ出て働かして貰はう。モ一度宣傳して見たら、集まつて来るかも知れぬ。人間は欲の皮が厚いから、黄金の登り龍、下り龍の現はれた、あのお寶は、有つても容易に手放しするものではない。それには一つ宣傳の方法を替へて、出す様に致さねばなりません。中には随分珍しい玉も集つてゐるが、どうも神政成就のお寶に比べては雲泥の相違だ。ア、すまじきものは宮仕へだ」

と太い息を漏して首を傾け、グニヤリとなる。

龍國別「お母アさま、お歎きは御尤もなれど、これ丈玉の多い高砂島、初まりは

團子石の様な玉計り集まつて居つたが、段々と數は減つて來た代りに、一日々々立派な玉が此通り集まつて來ることを思へば、モウ暫く此處で御辛抱下さいませ。私が中へ這入つて、あなたは外で審神者の役をして貰ふのは易いことですが、何程竹筒を通して物を言つても、龍國別の聲は熱心な信者が能く聞分けるであらうし、又今迄姿を見せた事のない、年寄りのお前さまが審神者となり、此龍國別の姿が見えなくなつたら、それこそ疑の種を播き、九仞の功を一簣に虧く様な事が出來ても詰りませぬから、モウ暫くの所、何程御窮屈でも御辛抱下さいませ。大蛇や猛獸の猛び狂ふ此山國や、大沙漠を渡る事を思へば、何程窮屈でも、穴の中で涼しい目をして、辛抱して下さい方が何程能いか分りませぬ」

鷹依「ア、そんなら、お前の言ふ通り、モウ暫く辛抱致して見ようかなア」

龍國「どうぞ御苦勞ですが、暫く、さうして居つて下さいませ。キット前途有望だと信じますから……。オイ、テーリスタン、お前も永々と御苦勞だつたが、随分宣傳に骨が折れただらうなア。……カーリンス、お前も中々の骨折だつた。お前の往つた方も、テーの行つた方も、餘程よく宣傳が行き渡つたと見えて随分、

珍ウツの國くにや、ヒルの國くに、カルの國くにあたりから、種々いろの玉たまを供そなへに來きたよ。まだ一人ひとりも出でて來こぬのは、ハルの國くにだ。ヒヨツとしたらハルの國くににあるかも知しれない。併しかしあの國くにはブラジル山やまと云いふ大きな山やまがあり、アマゾン河がはと云いふ廣大くわうだいな流ながれがあつたり、大沙漠だいさばくもあるから、何程なんぼ熱心ねつしんな者ものだとして、一寸ちよつと此處ここまでワザワザ玉たまを納をさめに来くるものはなからう、モウ一寸ちよつと辛抱しんぼうしても來こなかつたら、ハルの國くにへ宿替やどがへして、モウ一ひとし芝居打あたうぢやないか

テ一ちよつとさうですな、隨分山ずぶんやまの如ごとく玉たまが集よつて來きましたが、世よの中なかには欲呆よくぼけや、迷信家めいしんかが澤山たくさんあると見みえますわい。アハ、ハ、ハ、ハ

カ一ちよつと身魂相應みたまさうおうの玉たまを持もつて來くると見みえて、隨分ヤクザ玉ずぶんたまばかり集よつたものだ。

高姫玉たかひめたまや黒姫玉くろひめたま、高山玉たかやまだまに杓子しやくしのお玉たま、狸たぬきの鞆丸きんたま、瓢六玉へうろくだま、團子玉だんごたまなどは澤山集たくさんあつ

まつて來きたが、肝腎かんじんの黄金こがねの玉たまはまだ根こつからお出いで遊あそばさぬ。何程なんぼ毎日まいにち、あゝ

惟神御玉幸かむながらみたまさちはひましませ……とか、玉たまちはひませ……とか云いつて拜をがんでも、根こつ

から神様かみさまは肝腎かんじんの御性念玉ごしやうねんだまを集あつめては下くださらず、わしも肝玉きもたまがひしげる様な恐こわい目めにあうたり、鞆丸きんたまが縮ちぢみ上がる様やうな苦勞くらうをして、隨分頭ずぶんあたまの腦味噌なうみそを絞しぼつて見みた

が、「タマ」で目的の黄金玉は集まり来らず、玉々黄色い色がして居ると思へば、土玉で、少しひねくつてをると碎けて了ふ様なフヌケ玉許り、これ丈苦勞艱難しても玉の悪い奴許りより集つて来ぬかと思へば、わしも癩癩玉が破裂しさうだ。本當に遠い山坂や谷川を駆けめぐり、こんな張合のない事では、「たま」らぬぢやありませんか。なア龍國別さま」

龍國「さう氣投げをせずに、モウちつと辛抱して呉れ。チツとは結構なことが出て来るよ。黄金の玉を手に入れるが最後、俺達は聖地へ歸り、高姫の頑固者に頭を下げさせ、アツと云はして、天晴三五教の柱石となり、巾を利かして大神業に参加するのを樂みに、モウ暫く忍耐して、モウ一働き働いて呉れ」

カー「忍耐は幸福の母、鷹依姫は龍國別の母、瑞の御靈は世界の母だ。……母に別れて幼子が、遠き山路を打渉り、艱難して此處まで尋ね来たものを、聞えませぬと取り付いて、涙先立つ恨み聲、チンチリチンぢや」

テー「コリヤコリヤ、そんな氣樂な事所かい。チツと確りと智慧をめぐらし、モウ一活動やらねばならぬ、肝腎要の性念場だぞ」

斯く云ふ折しも、俄に聞ゆる縦笛、横笛、法螺貝、磬盤を叩く音頻りに聞え、
黄金の玉獻上』と云ふ旗幾十となく木の間に見えつ隠れつ、翩翩として谷風に
吹かれ乍ら登つて来る。

鷹依姫は竹筒を右手に握つたまま、慌だしく岩窟内に姿を隠した。龍國別は威
儀を正して鏡の池の前に端坐し、両手を合せて天津祝詞を奏上してゐる。テ、
カ一兩人は行儀よく龍國別の後に平伏して一生懸命に鏡の池を拜み居る。

(大正一一・八・一一 舊六・一九 松村眞澄録)

第二章 懸橋御殿 (八二四)

龍國別、テリスタン、カーリンスの三人は、黄金の玉獻上といふ旗印を、木
の間にチラとすかし見て、胸を躍らせ、俄に心も緊張し、謹嚴振を装うて、祈願
に餘念なきものの如く、素知らぬ顔にて一生懸命に祈つて居る。そこへ御輿を擔

がせ、數多の村人を伴ひ、ヒルの國のテーナの酋長アールは盛装を整へ、細路を漸くにして、アリナの瀧を横にながめ、この岩窟の前に辿り着き、三人の祈願の姿を見て感じ入り、自分もソツと、御輿を傍の美はしき岩の上に据ゑさせ、一生懸命になつて鏡の池に打向ひ、拜跪合掌してゐる。一同は無言の儘、テーナの酋長の背後に堵列し、跪いて鏡の池を隔てて岩窟内を拜みゐる。

岩窟の中より、奴拍子の抜けた聲で、

「月照彦命、此處に在り。黄金の玉を遙々と持參致したる身魂の美はしき信者、一時も早く其處に居る神司に手渡し致せ、汝の名は月照彦神より國玉依別命と名を賜ふ」

酋長のアールはハツと平伏し、

アール「恐れ乍ら、月照彦大神様、私はヒルの國のテーナの里の酋長、アールと申す賤しき神の僕で御座います。此の度神界の御經綸上いろいろの玉を、神様よりお集めになると云ふことを承はり、家の重寶として大切に保護致したる黄金の玉を、女房のアルナ姫と謀り、只今此處に持參致しまして御座います。どうぞ御

調べの上、御受納め下さいませれば、私を始め妻のアルナも恐悦至極に存ずること
とで御座いませう』

岩穴の中より、

『國王依別命、神は時節参りて、聲を人民の前に發する様になりたれ共、吾姿を
現はすことは、神界の規則として相成らざれば、そこに控へ居る龍國別の審神者、
月照彦神が代理として受取らしめむ、左様心得たがよからうぞ』

アル、アルナの夫婦はハツと許りに有難涙をこぼし、
『實に有難き神の御言葉、斯様な嬉しい事は御座いませぬ。……龍國別の神司様、
どうぞ此の寶玉をよく検めて御受取りを願ひ奉ります』

龍國別は、漸くにして重たさうに口を開き、

『其方は噂に高きテーナの郷の酋長であつたか。其方は神界に因縁深き身魂であ
るから、斯の如く結構な御用が勤めあがつたのであるぞよ。有難く思へ。……あ
いや、テー、カーの兩人、酋長アルナの獻上つた黄金の寶玉を早く實検めて、此
方が前に差出せよ』

テー、カー兩人は小聲にて、

「何ぢや、馬鹿々々しい。龍國別の奴、俄に莊重らしい言靈を使ひよつて、まるで俺達を奴扱ひにしやがる。怪しからぬ奴だ。これが果して吾々の捜してゐる黄金の寶玉なれば結構だが、モシヤ鍍金玉でもあつたら、吾々兩人の者は愈馬鹿の上塗りをせなならぬがなア」

と呟き乍ら輿の前に進み寄る。アルナは恭しく輿の戸を開き、玉筥を取り出し、テー、カーの二人の前に差出した。テー、カー兩人は左右より其玉筥を手に取り、頭上高く捧げ、蟹の様になつて、四つの足をそろりそろりと運び出した。餘り頭上の玉筥に心を奪られ、足許に氣が付かず、岩角にガンと躓いた途端に、二人は玉筥と共に、鏡の池にドボンと音立てて落ち込んで了つた。龍國別を始め、酋長夫婦、其他一同は總立ちとなり「アツ」と叫んで、池の面を眺めてゐる。幸ひ玉筥は、二人の落ち込んだ機みに撥られて、岩窟の中に都合よく飛び込みにけり。岩窟内の鷹依姫は吾足許に勢よく飛込んで來た玉筥に心を奪はれ、外に酋長其他の人々の居るのも忘れ、玉筥を引抱へ、ツカツカと岩窟内を走り出で、龍國別

の前に持来り、

「コレコレ龍國別、よく検めて御覽なさい。全くこれは本物に相違ありませんよ」

龍國別「お母アさま、こんな所へ出られちゃ困るぢやありませんか。モウ暫く幸抱して居つて下さらぬと化が現はれますよ」

鷹依姫「モウ現はれたつて良いぢやないか。斯うして此方の手に入つた以上は、誰が何と云つても構はぬぢやないか」

斯くする内テ、カーの兩人は體中、青藻を被つて這ひ上り來り、
「アア、玉のおかげで、ドテライ目に會ひ、肝玉を潰し、面目玉をなくして了つた」

酋長は鷹依姫の姿を見て、神様の御意に叶ひしと見え、大神様は婆の姿と變じ、

此處に生神となつて出現し玉ひしものと深く信じ、有難涙をこぼし、恐る恐る拍手を打ち、

アール「コレはコレは月照彦神様、よくも御神體を現はして、私如き身魂の曇つ

た者の前まへに現あらはれ下くださいました。どうぞ此この玉たまをお納をさめ下くださいますれば、夫婦ふうふの者ものの喜よろこび、里人さとびとの喜よろこびは此上このうへ御座ございませぬ」

鷹依姫たかよりひめはヤツと安心あんしんしたものの如ごとく、俄にはかに莊重さうじゆうな口調くつてうにて、

「其方そのほう、國王くにたまよりわけのみこと依別命いべつめい、神かみは汝なんぢの至誠しせいを満足まんぞくに思おもふぞよ。併しかし乍ながら汝なんぢに言いひ渡わたした

き事ことあれ共ども、まだ身魂みたまの垢取あかとれざれば、四五丁下しごちやうくだつて、アリナの瀧たきに一日一夜いちにちいぢや、

夫婦ふうふ共身魂みたまを淨きよめ、又また従したがひ來きたれる者共ものども、殘のこらず赤裸まつばだかとなつて御襖みそぎをなし、更あらためて

吾前わがまへに登のぼり來きたれ。大切たいせつなる使命しめいを汝なんぢに仰あふせ付つけるぞよ」

アール、アルナの夫婦ふうふを始めはじめ、供人ともびと一同いちどうは、此言葉このことばに、

「ハイ畏かしこまりました」

と恐おそる恐おそる後あとしざりし乍ながら、岩窟がんくつの前まへを退しりぞきアリナの瀧たきに一晝夜いつちうやの御襖みそぎをなすべ

く、降くだつて行ゆく。

蝸ひぐらしの聲こゑは谷間たにまの木々きぎにけたたましく聞きこえて來きた。

鷹依姫たかよりひめは一同いちどうをうまくアリナの瀧たきに向むかはせおき、猫ねこの様やうに喉のどを鳴ならし、玉筥たまばこに

飛付とびつき、中なかを開ひらいて見みれば、金色こんじきさんぜん燦然さんぜんたる黄金こがねの玉たま、されど、黒姫くろひめが保ほく管わんせし玉たま

に比べては、稍小さい感じがした。されどこれも心の故であらうと、無理に得心し、手早く元の如く蓋を閉ぢ、

「サア此玉さへ手に入れば、吾々の願望は成就したのだ。併し乍らテーナの郷の酋長に對し、何か一つの神徳を渡しておかねば濟むまい。何とか良い工夫はある

まいかな」

龍國別「お母アさま、そんなら斯う致しませう。此玉管の中の黄金の玉は錦の此

袋に納め吾々が持歸ることと致し、後へ此處にある澤山の玉の中、最も優れたる

ものに、月照彦神様の御靈をうつし……「テーナの酋長アールを以て國王依別命

と名を賜ひ、アルナを以て玉龍姫命と名を賜ふ。汝はこれより此庵に永住し、月

照彦神の神司となり、普く萬民を救へよ。此汝が獻りし黄金の玉は萬劫未代開く

可からず。萬一此玉管を開く時は神靈忽ち現はれ、汝等夫婦の身に大災厄來り、

高砂島は、地震洪水の厄に遭ひ、海底に沈没するの虞あり、必ず必ず神の言葉を

反く勿れ。月照彦神は此黄金の玉に御靈をうつし、三人の眷屬を引連れ、雲に乗

つて天上に歸るべし……（とスラスラと玉管のぐるりに烏羽玉の實の汁もて書

き記しし……サア斯うしておけば、酋長も結構なお蔭を戴き、御神徳が世界に輝くであらう」

これから此鏡の池にお暇乞の爲に天津祝詞を奏上し、後をよく御願ひ申し、

國玉依別命、玉龍姫命に宏大無邊なる御神徳をお授け下され、遂には高砂島の

生神となつて、人望を一身に集むる様御守護下さいませ」

と一生懸命に祈願し、一行四人は闇に紛れて、雲を霞と、山を越え、夜を日に繼いで、

漸く宇都の國の櫟が原と云ふ平原に辿り着きけり。

アール、アルナの酋長夫婦は月照彦の神示と確信し、一晝夜の御禊を終り、恭

しく鏡の池の前に来て見れば、庵の中は藻抜けの殻、神様の聲もなければ、三人

の男の姿も見えぬ。……ハテ不思議……と庵の中を隈なく捜し見れば、美はしき

石を積み重ね、其上に自分の持来りし玉筥がキチンと載つて居る。よくよく見れ

ば以前の文句が書き記してある。酋長夫婦は送り來りし御輿を鏡の池の向ふ側、

岩窟の入口に安置し、玉筥を再び其中に納め、書き置きの文句を堅く信じ、自分は

國玉依別命、妻は玉龍姫命となり濟まし、御輿の前に朝夕祈願を凝らし、夜は庵

に入りて、夫婦はここを住處とし、普く四方より参り來る人々の爲に福德圓滿、壽命長久、病氣平癒などの祈願を凝らし居たりける。

テ一、カー二人の宣傳は大に功を奏したと見え、日々絡繹として、玉の形したる石塊を携へ、或はいろいろの木の実を持ち來りて神前に供し、國王依別命夫婦の祈願を依頼し、相當の御神徳を蒙つて歸る者、日に月に殖えて來た。遂には餘り多數の参詣者にて、身を容るる所なく、餘り廣からざる鏡の池のあたりは、身動きなならぬ計りの雜鬧を來すこととなり、止むを得ず、數多の信者協議の上、谷から谷へ橋を渡し、宏大なる八尋殿を造り、ここに改めて玉筥を奉齋し、夫婦は神主として神前に仕へ、國、玉、依、龍、別などの人々を幹部とし、三五の神の教を日夜宣傳することとなりぬ。此八尋殿は谷の上を塞いで橋の如く造られたるを以て、懸橋の御殿と稱へられける。

國王依別夫婦は、毎夜丑滿の頃に、神殿に怪しき物音の聞ゆるに不審を起し、十五の月の照り輝く夜、幹部にも知らさず、夫婦只二人、神前に端坐して、怪しき物音の正體を調べむと待構へてゐた。神殿の床下より怪しき煙ポーツと立昇り、

朦朧として蛸の様な禿頭の不細工な一柱の神、腰を【く】の字に曲げて、煙の中より現はれ、輿のぐるりを幾回となく、クルクルと廻つてゐる、其怪しさ、厭らしさ。玉龍姫は肝を潰し、「キヤツ」と悲鳴をあげて其場に倒れた。國玉依別は流石氣丈の男子とて、怪しき影に向ひ、言葉嚴かに、

「吾こそは月照彦神の命を奉じ、御神靈を玉管に納め、朝夕此八尋殿を作りて奉仕する神司なるぞ。汝何者なるか、吾々の許しもなく、神聖なる神殿に夜な夜な現はれ來り、御神寶の邊りに附纏ふ曲者、名を名乗れ、返答次第に依つては容赦は致さぬぞ」

とキツとなつて身構へした。怪しき影は追々濃厚の度を増し、そこに倒れたる玉龍姫の傍に足音も立てず寄添ひ、細き手を伸べて、二三回胸のあたりを撫でさすれば、姫は忽ち正氣づき、兩手を合せて怪物に向ひ、恐れ氣もなく感謝の意を表し居たりける。

國玉依別は合點行かず、默然として怪物の姿を眺めて居た。怪物は涼しき、細き聲にて、

怪物「吾れこそはアリナの瀧の水上、鏡の池の岩窟に三五の教を宣傳し居たる狭
依彦の神の靈體である。吾れ歸幽後は、一人として吾靈魂を祭る者なく、御供一
つ供へ呉るる者もなし。然るに一年以前、三五教の宣傳使鷹依姫、龍國別は二人
の供人を引連れ、鏡の池の岩窟に來り、玉集めをなし、遂に汝が家の重寶黄金の
玉を奪ひ取り歸りたり。吾れは此事を汝に知らさむが爲に夜な夜な出現するもの
なり。其玉管の中は瑪瑙の玉と摺替へおき、黄金の玉を引さらへて、四人の者は
今や宇都の國の櫟が原に出で、草原をあちらとさまよひつつあり。汝は其
玉を取返す所存なきか」
國玉依「何れの神様かと思へば、昔鏡の池の神として有名なる狭依彦様で御座い
ましたか。御親切は有難う御座いますが、何事も因縁づくると諦めて居りますれ
ば、假令黄金の玉が瑪瑙の玉に變ればとて、少しも苦しうは御座いませぬ。月照
彦の御神靈の懸らせ玉ふ以上は、假令團子石の玉にても、私に取つては、そのの
方が何程重寶だか知れませぬ。黄金の玉などには少しも執着はかけませぬ」
狭依彦「實に感じ入つたる其方の心掛け、それでこそ三五教の神の教は天下に擴

まり、萬民を救う事が出来るであらう。狭依彦も汝夫婦が尊き、清き眞心に感じ、これより此神前に幽仕して、汝が神業を助けむ。ゆめゆめ疑ふ事勿れ。』
と又もやパツと立上る煙の中に、怪しき姿を消しにける。これより夫婦は狭依彦の靈を祀るべく鏡の池の傍に宮を造り、朝夕に種々の供物を獻じ、崇敬怠らざりき。月照彦神の靈力と狭依彦の守護と、國魂神の威徳に依つて、懸橋の御殿の奥深く齋き奉れる神壇は日に月に神徳輝き、遂には高砂島全部に國玉依別夫婦の盛名は隈なく喧傳さるるに至りける。

鰯の頭も信心からとやら、黄金の玉は掬り替られ、似ても似つかぬ瑪瑙の玉も神の神靈の力と、信仰の誠に依つて無限絶大なる光輝を放つに至りしを見れば、形體上の寶の、餘り尊重すべき物にあらざるを悟り得らるるなるべし。あゝ惟神靈幸倍坐世。

(大正一一・八・一一 舊六・一九 松村眞澄録)

因に曰ふ。龍國別一行が遙々海洋萬里の浪を渡りて、玉の所在を尋ねむとした

るは、實は鷹依姫の歸神を盲信したるが故なり。歸神に迷信したるもの程、憐れむべきは無かるべし。然り乍ら又一方には、是によりて海外の布教宣傳を爲し得たるは神慮と云ふべき也。

第三章 白楊樹（八二五）

三五教の宣傳使 鷹依姫を始めとし

龍國別やテ、カーの 一行四人は蛸取村の

山奥深く進み入り アリナの瀧の上流に

神代の昔月照彦の 神の命の現れませる

鏡の池の岩窟に 身を潜めつつ黄金の

玉の所在を探らむと 鷹依姫を岩窟の

中に隠して神となし 龍國別は池の邊に

庵を結び朝夕に 天津祝詞を奏上し

審神者の職を勤めつつ テーリスタンやカーリンス

二人の男を西東 北や南の國々へ

言宣れ神と身をやつし アリナの瀧の上流に

月照彦の現はれて 何れの人に限りなく

玉と名のつく物あらば 到りて神に獻ずれば

大三災の風水火 小三災の饑病戰

赦し玉ひて其人に 無限無量の壽を與へ

五穀果物成就し 無限の福德授かると

善い事づくめをふれまはし 欲に目のなき國人は

玉に善く似た圓石や 瑪瑙の玉や【しゃこ】翡翠

珊瑚珠玉を持出して 遠き山野を打渡り

鏡の池の傍に 供へて歸る可笑しさよ

龍國別は^{たつくにわけ}一々に^{いちいち}目を^め光ら^{ひか}して眺^{なが}むれど

一つも碌^{ろく}な奴^{やつ}はない 偶^{たま}黄色^{たまきいろ}の玉^{たま}見^みれば

表面^{へうめん}飾^{かざ}る金^{きん}鍍^{めつき}金^{きん} ガラクタ^{だま}玉^{たま}は山^{やま}の如^{ごと}

積^つみ重^{かさ}なりて數^{かず}多^{おほ}く 日^ひを重^{かさ}ぬれど三五^{あななひ}の

錦^{にしき}の宮^{みや}に納^{をさ}まりし 黄金^{こがね}の玉^{たま}は影^{かげ}もなし

テ、カー二人^{ふたり}はそろそろと 小言^{こごとはつびやく}八百言^いひ竝^{なら}べ

「鏡^{かがみ}の池^{いけ}を後^{あと}にして 何處^{いづこ}の果^{はて}にか宿替^{やどがへ}し

又^{また}更^{あらた}めて一芝居^{ひとしばゐ} 打^うたうぢやないか」と兩人^{りやうにん}に

言^{こと}擧^あげすれば鷹^{たか}依^{より}姫^{ひめ}や 龍國^{たつくにわけ}別^{わけ}は「待^まて暫^{しば}し

モウ一息^{ひといき}の辛抱^{しんぱう}だ 堪^{こら}へ忍^{しの}びは幸福^{かうふく}の

母^{はは}となるぞ」と兩人^{りやうにん}を チヨロまかしつつ待^まつ間^{うち}に

テ、ナ^{さと}の里^{さと}の酋長^{しゅうちやう}が 黄金^{こがね}の玉^{たま}を持^{もち}出^いでて

玉^{たま}の輿^{みこし}に乗^のせ乍^{なが}ら 數多^{あまた}の人^{にん}數^ずを引^ひ連^{きつ}れて

アリナの瀧^{たき}や鏡^{かがみ}池^{いけ} 神^{かみ}の御前^{みまへ}に捧^{ささ}げむと

風かぜに旗はたをば靡なびかせつ 進すすみ來きたるぞ勇いさましき。

虚きよ實じつの程ほどは知しらねども 擬まがふ方かたなき黄わう金こんの

玉たまに喉のどをば鳴ならせつつ テーナの里さとの酋しゅ長ちやうに

國くに玉たま依より別わけと名なを與あたへ 暫しばらくアリのの瀧たきの邊へに

御み禊そぎの業わざを命めいじおき 瑪め瑙なうの玉たまと摩すり替かへて

夜や陰いんに紛まぎれて谷たに川がはを 迦さかのほ 迦さかのほ 迦さかのほ 迦さかのほ

峰みね打うち涉わたり宇う都づの國くに 櫟くぬぎが原はらに四よ人にん連づれ

萱かや生おひ茂しげる大おほ野の原はら やうやう辿たどりつきにけり。

龍たつ國くに別わけ、テーリスタン、カーリンスの三人さんにんは、代かはる代がはる黄こ金がねの玉たまを錦にしきの袋ふくろに納をさ

め、肩かたに擔かついでアリナ山の急きふ坂はんを登のぼり降くだりし乍ながら、汗あせをタラタラ漸やうく茲ここに辿たどり着つ

きぬ。どうしたもののか、此この玉たまは一ひと歩あし々ひと々あし重量じやうりやうを増まし、後うしろから何なに者ものか引ひ張つばる様やうな心こころ

地ちし、餘よ程ほど頭あたまを前まへに傾かたむけて居をらぬと、玉たまの重おもみに引ひきつけられて、仰あふむ向けに轉てん倒だう

する様やうな氣き分ぶんになつた。漸やうくにして生いの命ちカラガラ此こ處こまでやつて來きて、最も早はや大だい丈ぢや

夫と白楊樹の蔭に足を伸ばして一休する事と爲しぬ。

身の丈五尺計りの大蜥蜴は幾百ともなく萱野ヶ原を前後左右に驅巡り、雀の様な熊蜂、虻は汗臭い臭をかいで寄り来り、油蟬の様な金色の糞蠅、咫尺も辨ぜざる程群集し来り、ブンブンと唸りを立てる、其煩ささ。四人は萱の穂を束ねて大麻に代へ、右の手にて虻、蜂、金蠅などを拂ひ乍ら、日の暮れたるに是非なく、玉を抱えて、四人は草の上に横たはり、草臥果てて、昇いて放られても分らぬ迄に熟睡し居たりけり。

折柄吹き来るレコード破りの夜嵐に、萱草はザワザワと音を立て、白楊樹は風を含んで弓の如く、大地を撫で、虻、蜂、蠅などは、何處へか吹き散らされて、一匹も居なくなつて了つた。白楊樹は弓の如く風に吹かれて地を撫でた途端に、四人の體の上に襲ひ来たりぬ。

テーリスタンは寢惚けた儘、玉の袋を首に結びつけ乍ら、白楊樹の枝を、夢現になつて力限りに抱えた。さしもの暴風もピタリと止んで、天に冲する白楊樹は元の如く直立して了つた。よくよく見ればテーリスタンは、白楊樹の梢に、何時

の間にまか上あげられてゐた。『アツ』と驚おどろく途端とたんに足あしふみ外はし、唸うなりを立たてて三人さんにんが寝ねてゐる側そば近く、圖轉倒づでんどうと落らく下かし來きたり、ウンと一ひと聲こゑ目の黒玉くろたまをどつかへ隠かくして了しまつて、白玉計しろたまばかりグルリと剥むき、大だいの字じとなつて、手足てあしをピリピリと震ふるはして居ゐる。玉たまを包つつんだ錦にしきの袋ふくろは、白楊樹はくようじゆの空そらに引ひつかかつて『ブラ』つきゐたり。

三人さんにんは驚おどろいてテーリスタンの側そばに驅寄かけより『水みづよ水みづよ』と叫さけび乍ながら、あたりを見みれ共ども、水溜みづたまりはどこにも無ない。月つきは淡雲たんうんを押分おしわけて、漸やつやく下界げかいに光ひかりを投なげた。あたりを見れば地ちを赤あかく染そめて苺いちじの實みがそこら一面いちめんに熟じゆくしてゐる。龍國たつくにわけ別わかれは手早てはやく二三個にさんこを『むし』り取り、齒はをくひしばつて倒たふれてゐるテーリスタンの口くちを無理むりにこじあけ、苺いちじを潰つぶして、其汁そのしるを口中こうちゆうに入いれた。テーリスタンは漸やつやくにして息いきを吹ふき返かへし、顔かほをしかめて、腰こしのあたりを切しきりに撫なで廻まはしゐる。

カー『おいテー、貴様きさま一體いつたい如何どうしたのだ。こんな所ところでフンのびたり、心細こころほそい事をやつて呉くれな。ヤアそして貴様きさまの首くびにかけて居をつた玉袋たまぶくろは何處どこへやつたのだい』
テー『どこへやつたのか、根こつから覺おほえない。何なんでも俺おれは天狗てんぐにさらはれて、高たかい所ところへあげられた夢ゆめを見たが、ヤツパリ元もとの所ところだつた。大方おほかた夢ゆめの中なかの天狗てんぐが取と

て歸にやがったかも知れやしなないぞ。何と云つても結構な黄金の玉だから、天狗迄が欲しがると見える。小人玉を抱いて罪ありとは此事だなア。あゝ腰が痛い、玉所の騒ぎかい。何とかして呉れぬと、息がつまりさうだ。アイタタ アイタタと顔をしかめて居る。鷹依姫はビツクリして顔色を變へ、鷹依「コレ、テーさま、今迄苦勞艱難して手に入れた黄金の玉を、お前如何したのだ。サア早く返して下さい。あの玉を紛失でもしたら、承知しませぬぞや」

テー「そんな事云つたつて、無い袖はふれぬぢやありませんか。何れどつかにアリナの瀧でせう。甘い事を云つて酋長の家の寶を何々して来たものだから、神罰は靦面、何々がやつて来て何々したのかも知れませぬぜ。お前さまも餘り大きな聲で小言を云ふ資格はありませんまい。假令泥棒に盗られた所で元々ぢやないか。泥棒の上前をはねられたと思へば濟む事だ。あゝこれで改心をして權謀術數的行方は今日限り斷念なされませ。心の玉さへ光れば、黄金の玉の三つや四つ無くなつたつて、物の數でもありません。酋長の奴の性念玉が憑りうつつてると見え、アリナの山を渉る時にも随分後から引張られる様で、重たくて、苦しくて仕

方がなかつた。此廣い高砂島を、あんな重たい物を持つて歩かされようものなら、それこそ吾々は息ついて了ひますワ。黄金の玉を紛失したとてさう悲觀したものでありません。つまり神様から大難を小難に祭りかへて、罪業をとつて頂いたと思へば、こんな結構な事はありません。サアサア皆様、大神様に感謝祈願の祝詞を奏上して下さい」

鷹依姫「これテーさま、何云ふ勝手な事を仰有るのだ。お前もチツとは責任觀念を持つたら如何だい。折角長の海山を越え、苦勞艱難をしてヤツと手に入れた三千世界の御神寶を、ムザムザと紛失しておいて、ようマアそんな勝手な事が云へたものだ。如何しても斯うしても、其玉を再び發見する迄は、テーさま、お前は假令十年でも百年でも、ここを動く事はなりませんぞえ」

テー「あゝ困つたなア。お月様は何程照つても、肝腎の月照彦神様は如何して御座るのか。キツパリとあの玉はどこに隠れて居るとか、誰人が盗つたとか、知らして下さりさうなものだ。ア、鷹依姫さまに「ボヤ」かれる、腰の骨は歪んで痛い。この様な蜥蜴原に脛腰の立たぬ様な目に遭はされて如何なるものか。神

様も餘り聞えませぬワイ、アンアンアン

とソロソロ泣き出した

鷹依「これテ、何程泣いたつて、玉は返つては來ませぬぞえ。チトしつかりし

て、胸に手を當て考へて見なさい。お前はまだ本當に目が醒めぬのだらう

テ「マアさうセチセチ言はずに、チツと計り猶豫を與へて下さい。玉の行方は

何處ぞと、沈思黙考せなくては、短兵急に吐血の起つた様に請求されても、早速

に開いた口がすばまりませぬワイ

鷹依「お前所か、こつちの方から、餘りの事で、阿呆らしさが偉大うて、開いた

口が、それこそすばまりませぬワイナ

カーリンス空を仰ぎ見て、

カー「ヤア、月夜でハツキリは分らぬが、あのポプラの梢に、何だかピカピカと

光つて、ブラ下つて居る物が見えるぢやないか。あれはテツキリ玉の這入つた錦

の袋の様だぞ

龍國別は白楊樹の空を眺めて、

龍國「ヤア如何にも、あれは錦の袋だ。おいテ、お前は御苦勞にも、あの様な高い木の梢へ袋を括りつけ、盗まれぬ様にと氣を利かした迄はよかつたが、足ふみ外し、眞逆様に墜落して腰を打ち、目を眩かして居よつたのだなア。アハ、ハ、ハ。サアこれから御苦勞だが、テ、さまに登つておろして来て貰はうかい。あこ迄括りつけに往た丈のお前だから、木登りはよく得手て居ると見える。サア早う下ろして来てくれ」

テ、天空を仰ぎ見て、

テ「ヤア如何にも不思議だ。何時の間にかあんな所へ、誰が持つて登りよつたのだらう。私は生れ付き、木登りは拙劣だから、到底あんな所へあがれる氣遣はないのだ。大方天狗の奴惡戯しよつたのであらう。あんな所へあがるのは、到底天狗でなくては出来るものではありませんせぬワイ……なア龍國別さま、あなた鎮魂して天狗を呼集め、あの袋を茲へ持つて来る様にして下さいなア」

龍國「お母アさま、如何でせう。合點の往かぬ事ぢやありませんか。テは御存じの通り、身の重たい男で、あの様な所へ、能うあがり相な事はありません。コ

リヤ矢張天狗の惡戯に間違ありませぬよ」

鷹依「此邊には野天狗が澤山に居るから、油斷をする事は出来ませぬ。これは何

とかして、神様に御願申し下ろして頂かねば吾々は何時になつても此處を離れる

事は出来ませぬ。……コレ、カー、お前はチツとばかり身が輕さうだ。神様の爲、

世界の爲の御寶だから、取りにあがつても滅多に無調法はありません。私がこ

れから大神様に一生懸命願をこめるから、お前御苦勞だが、一寸登つて來て呉れ

まいかなア」

カー「さうですな、マア一寸試に登れるか登れぬか、調べて見ませう」

と、一抱もある白楊樹の根元に立寄り、木の幹に一寸手をかけ「キヤツ」と悲鳴

をあげて、其場にカーリンスは打倒れ人事不省に陥りにける。

(大正一一・八・一一 舊六・一九 松村眞澄録)

第四章 野邊の訓戒 (八二六)

白楊樹の下に立寄つたカーリンスは幹に手をかけるや否や「アツ」と叫んで其場に倒れて了つた。テーリスタンは腰をしたたか打つた爲、少しも歩む事は出来ず、元の所に横たはつてゐる。龍國別は驚いて、樹下に立寄り、又もや「アツ」と一聲叫んだ儘、カーリンスと枕を並べて南向けに倒れて了つた。後には鷹依姫と一人、元より氣丈の女とて、少しも騒がず、泰然として天津祝詞を奏上し、天の數歌を歌ひ、二人の恢復を祈つてゐた。

龍國別、カーリンスの兩人は掛合に「ウンウン」と虎の嘯く様な厭らしい聲を出して唸りつづけてゐる。鷹依姫は此聲を聞いて……ア、生命に別條はない、マア大丈夫だ。夜が明けたら何とか工夫がくだらう……位に思つて、切りに祝詞を奏上し、黄金の玉を策略を以て集め、うまくチヨロまかして此處まで來りし其罪を大神に謝罪しつつ、夜の明くるを待つた。

東の空を紅に染めて漸く天津日の神は地平線上に、圓き姿を現はし玉うた。テーリスタンは漸くにして腰の痛みも癒り、稍元氣づき、鷹依姫と共に四邊の苺をむしり、兩人の口に含ませ、一生懸命に鎮魂を施した。二人は漸くにして正氣づき、

起き上つて、

龍國「あゝ大變に恐ろしい事だつた。たうとう閻魔の廳まで引出され、大きな蜥蜴や毒蛇の責苦に遭はされ、黄金の玉を幾十となく背中を負はされ、骨も碎くる計り、其重さと苦さに、體は段々と地の中へ落ち込んで了ひ、何とも云はれぬ責苦に會つて來た。あゝ執着心位恐ろしいものはない。……モウ玉の事は、お母アさま、斷念したら如何でせう」

カー「龍國別さま、お前さまもさうでしたか。私も同じ様な目に遭はされましたよ。そして横の方にウンウンと苦しさに呻く聲が聞えたので、ソツと覗いて見ましたら、恐ろしや恐ろしや、高姫さまと黒姫さまが、如意寶珠や紫の玉に取圍まれ、押へられ、紙の様な薄い體になり、鰈のやうに目が片一方の方へ寄つて了ひ、随分エグイ顔をして、口から黒血を吐き、見られた態ぢや御座いませなんだよ。吾々の靈は生き乍ら地獄へ落ち込んでゐると見えますワイ。……あゝ神様、どうぞ許して下さいませ。キツと今日限り心を改めます」

と合掌し、涙を瀧の如くに流してゐる。

「おいカー、貴様は目を眩かしてそんな夢を見てみたのだよ。夜前から俺は腰が痛いので、横になつた儘、チツとして貴様の倒れたのを見てみたが、別に地獄へ往た様子もなし、只此木の下で龍國別さまと掛合にウンウンと唸つてみたのだ。そんな氣の弱い事を云ふな。そりやキット心の迷ひだ。鬼も蛇も、地獄も極樂も、皆自分の心の船の舵次第で、どないでも轉回するのだ。そんな迷信臭い事を言はずに、チトしつかりして呉れ」

龍國「イヤそれでも夢とは思はれない。又俺達の決して心の迷ひではない。日頃思つてゐる事を見るのなら、夢幻と判断しても良いが、吾々はそれ程悪事だとも思つてゐない。世界の爲、神様の爲、最善の努力をしてゐる考へで、寧ろ吾々のやつた事を誇りと思つてみた位だから、決して幻想でも妄想でもないよ。兔も角吾々は今迄の行方に無理があつたに違ない。神様は一つ間違へば直に懲戒をして氣をつける……と筆先に御示しになつてゐるのだから、ウツカリ疑ふ譯には行かないよ」

カー「龍國別さまの仰有る通りだ。俺やモウ未來が恐ろしくなつて來たワイ」

鷹依「お前達は一丈二尺の禪を締た一人前の堂々たる男ぢやないか。假令如何なる事があらうとも、初一念を貫徹するのが男子の本分だ。妾は此の通り年を老つた女の身だ。けれ共そんな弱い心はチツとも持つて居ない。假令地獄の底に落されて如何なる成敗に遇はされよう共、世界の爲、お道の爲になる事ならば、斷乎として初心を曲げる事は出来ませぬ。それ程夢位が恐ろしいやうな事で、此夢の浮世に如何して暮す事が出来ませうか。大神様はお前達の心を試すために、いろいろと氣をお引き遊ばすのだ。……エ、チヨ口臭い、もう仕方がない。妾は假令此木の上から踏み外して墜落し、頭を割つて國替をせう共、あの玉を取つて來ねば措きませぬ。妾が上から、あの袋を下げおろすから、お前達は下に居つて、ソーツと手を擴げて鄭重に受けるのだよ」

と云ひ乍ら、一抱許りの白楊樹の根元に手をかけた。白楊樹の幹には三尺四尺も丈のある大蜈蚣が一面に巻ついて居る。さうして太き一尺計りの龜甲形の斑文のある蛇、赤い舌をペロペロと出し、目を怒らして、木の周圍に幾十匹とも數限りなく控えて居る。根元から梢まで、蜈蚣と蛇とが空地なく、幹も枝も絡んで居る

其厭らしさ。流石の鷹依姫も之には辟易し、二三間後しざりし乍ら、

「コレコレ龍國別、テーに、カー、如何にもこれは容易に登る事は出来ませぬワ
イ。幸に此通り葍が澤山に生つてゐる。食物に何時まで居つたつて不自由はない
から、あの玉が、風でも吹いて自然に落ちて来るか、蜈蚣や蛇が根負して逃げて
いぬか、どちらなりと埒の付く迄、此處で持久戦をやりませう。……サアサア皆
さま、雨が降つては困るから、今の間にそこらの萱を刈り集めて、草庵を結び、
あの蛇、蜈蚣と根比べを致しませう」

三人は鷹依姫の言に従ひ、俄に木や草を刈り集めて庵を結び、籠城の準備に取
かかった。漸くにして雨蔽の爲の、形ばかりの草庵は出来上つた。四人は夜露を
凌ぎつつ、庵の中にて祝詞を奏上し、一時も早く玉の都合よく吾手に歸り、且又、
蛇、蜈蚣の惡蟲の退散せむ事を晝夜間斷なく祈願して居た。

外面に當つて「ケラケラケラ」と厭らしき笑ひ聲が聞えた。龍國別、テー、カー
の三人は此聲が耳に入るや否や、寒水を頭から幾百石ともなく浴ぶせかけられた
様な感じがし、ビリビリと慄ひ出し、齒をガチガチと鳴らして居る。鷹依姫は平

氣な顔して、

鷹依「コレコレお前達、なぜ斯様な眞青な顔をして怖ぢけてゐるのだ。何が一體
恐いのだい。大方、今の笑ひ聲が恐かつたのだらう。オホ、何と臆病たれ
だなア。ドレドレ妾が一つ外へ出て、何者か知らぬが、言向け和して参りませう
とムクムクと立上がり、萱製の蕙戸を押開けて出て行かうとする。龍國別は驚い
て、鷹依姫の腰をシツカと抱止め、

「モシモシお母アさま、あなたがそんな危険な事をなさらいでも、若い者が三人
も控えて居ります。どうぞお待ち下さいませ」

此時又もや「ケラケラケラ」と厭らしき聲が連發的に聞えて來た。三人の男は
首筋がゾクゾクし出し、又もや齒がガチガチと鳴り出したり。

鷹依「ホ、ホ、化物の奴、ケラケラケラなんて、ナア二惡戯をするのだ。用が
あるのならば、犬の遠吠の様に、遠くから相手にならず、なぜ此處へ這入つて
來ぬか。奴甲斐性なし奴が」

テ「モシモシ鷹依姫さま、そんな事言つて貰うてはたまりませぬ。あんな奴に

這入つて來られて如何になりますか」

と慄ひ聲で半泣きになつてゐる。

鷹依「エーエ、どいつも此奴も弱蟲ばかりだな。今の若い者は口計り達者で、

實地になつたら、此態、それだから、何程畑水練の學問をしたつて駄目だ。實地

に當つて苦勞を致さねば誠は出て來ぬぞよ……と神様が仰有るのだ。サアお前達、

立派な男三人も居つて、外へ出て化物を言向け和す事をようせぬのなら、ようせ

ぬでよいから、妾が獨り出て來て談判をして來る程に、必ず止めては下さるなや」

と又もや立上り、蕙戸を押し開けて出ようとする。龍國別は周章て抱止め、

「コレコレお母アさま、貴女が自らお出ましにならなくても、荒男が三人も居り

ます。どうぞ私に任して下さいませ」

最初の怪しき聲追々と近付き來り、一層厭らし相な音調にて、

「ガツハ、、、ギヒ、、、グフ、、、ゲ、、、ゴホ、、、ギヤ

ハ、、、ギヒ、、、ギユフ、、、ギエ、、、ギヨホ、、、」

と益々烈しくなつて來た。龍國別はテー、カー二人に向ひ、

「おい、ハイ、カー、お前御苦労だが、俺はお母アさまの側に守つて居るから、お前、一つ様子を考へに出て見て呉れぬか」

「ハイ、お易いこつて御座いますが、何分此間天狗に取つて放られ、腰の骨を折つて、思ふ様に足が動けませぬので、どうぞカー一人に仰せ付けて下さいな」

「俺だつて此間轉倒した時に、大腿骨を痛めて居るから、體が思ふ様に動かない。マア仕方がない。此處に暫く籠城して、化物と根比べをしたら如何でせう」

龍國「ア、それもさうだ。……なアお母アさま、ハイ、カーもあの通り、體を痛めて居りますから、一層の事、化物と根比べを此處でする事にしませうか」

鷹依姫は、

「エ、腰拔共だなア」

と云ひ乍ら、吊り戸を押し開け、外に飛び出して了つた。三人は其勇氣に舌を巻き、コワゴワ乍ら外面を、萱壁の隙間から覗いて居る。

鷹依姫は斯う云ふ時には無茶苦茶に肝の太くなる女である。平氣の平左で怪しき聲を尋ねて、あちらこちらと探し廻つた。前かと思へば後に聞え、右かと思へ

ば左に聞へ、一向掴まへ所のないのに劫を煮やし、大音聲をはりあげて、
鷹依「ヤアヤア、何者の妖怪變化ぞ。畏れ多くも國治立大神、木の花姫命、日の
出神、神素盞鳴大神の御神業に仕へまつる三五教の宣傳使鷹依姫其他に對し、無
禮千萬にも、外面より罵詈嘲弄的態度を取るは、心得難き憎き曲者、サア早く正
體を現はせ。天地の道理を説き諭し、汝が修羅の妄執を拂拭し、其靈魂を天國淨
土に助けてやらう。違背に及ばば、三五教の神司鷹依姫、神に代つて、汝を根の
國底の國に、吾言靈の威力を以て追落してやらうぞ。サア如何ぢや、返答を聞か
せ。一二三四五六七八九十百千萬……」
と大音聲に、天の數歌を歌ひ上げた。萱の株を隔てて、少し計り前方に白煙立ち
上り、其の中からボンヤリと現はれた頭の光つた蛸入道、赤黒い細い手をニユツ
と前に出し、招き猫の様な恰好をし乍ら、
「フツフ、、、、其方はバラモン教の神司、轉じてアルプス教の教主となり、再
轉して三五教の宣傳使と變り、高姫に無實の難題を吹きかけられて、遙々と高砂
島まで迂路つきまわり、小人窮して亂をなす譬に洩れず、所在策略をめぐらし、

テーナの里の酋長が家寶と致せる、黄金の玉をウマウマ手に入れたであらうがな

ア

鷹依「大功は細瑾を顧みずと云つて、天下國家の爲ならば、少々位の犠牲は見越しておかねば、何事も成就するものではありません。大魚小池に棲まず、清泉には魚育たず、春の夜の月は朦朧として居るのが却て雅趣がある様なもので、人間として神業に奉仕する上に於て、チツと位過ちがあつた所で、天津祝詞の功力により、科戸の風の朝霧夕霧を吹拂ふ事の如く、罪も穢も、消え失せるは神界の尊き御恵み、何處の枉神か知らぬが、その様なせせこましい小理窟を云つて、吾々を「へこま」さうと思つても、左様な事に尾を巻いたり、旗を巻いたり、鉾を駈めて退却する様なヘドロイ女宣傳使では御座らぬぞや。お前は一體何者だ。大方黄金の玉に執着があつて、折角吾々が手に入れたものを横奪せうと思ひ、あの白楊樹の上迄持つて上つたのだらう。サアもう斯うなる以上は、此鷹依姫が承知致さぬ。サア早く木登りをしてここへ持つて御座れ。お前と云ふ奴は、怪しからぬ悪戯を致す者だ。アハ、ハ、ハ、油斷も隙もあつたものぢやないワイ。オツ

ホ、／＼、／＼

禿化 『此方は、昔の神代に常世の國の常世姫の部下となり、言靈別命、元照彦命などの神將を、縦横無盡に驅惱ましたる猿世彦の勇將であつたが、言靈別命、元照彦命兩人が風を喰つて常世城を逃げ失せたる後を追ひ、スペリオル湖の湖邊まで追ひかけ到り見れば、兩人の姿は雲を霞と北方へ遠く逃げ去つた様子、それ故、此猿世彦は元照彦、美濃彦の間者なる、船頭の湊彦に船を操らせ、寒風吹き荒ぶ湖上を渡る折しも、退引ならぬ湊彦の強談に赤裸となり、とうとう吾肉體は木乃伊になつて了つた。暫くあつて、三五教の神司に言靈を以て助けられ、蘇生へり、茲に身魂は二つに分れ、一方の身魂は猿世彦の肉體を使つて、遂には日の出神の教訓を受け、宣傳使となつて、アリナの瀧の水、鏡の池にて神界の御用を勤める事となつたが、此方はスペリオル湖の湖上に於て、木乃伊となつた苦しき時の思ひが凝つて、今に此高砂島の山中に彷徨ひ、三五教の奴原に對し、恨みを返さねばならぬと、汝等四人アリナの瀧に現はれしを幸ひ、如何にもして、恨を晴らさむと、心は千々に碎いたなれど、何を言うても、鏡の池に月照彦神の神靈守り

あれば、容易に汝等を悩ますの餘地なく、隙を窺ひ、汝の後に引添ひ、錦の袋にブラ下り乍ら、ここまでやつて来た猿世彦の副守護神、怨靈の凝固である程に、モウ斯うなる上は、何程藻掻いても、此櫟ヶ原は惡靈の集合地帯だ。飛んで火に入る夏の蟲、覺悟を致して、一時も早く元へ引き返し、此玉を此猿世彦に渡して歸るがよからう。グズグズ申すと、寢首を引掻き、むごい目にあはしてやるぞよ。ウツフ、フ、フ

鷹依姫は聲を勵まし、

「猿世彦の怨靈とやら、よつく聞け。其方の本守護神は狹依彦神となり、立派に神業に古より奉仕して、黄泉比良坂の戦ひにまで出陣し、拔群の功名を立てたでないか。なぜ其方は左様な怨靈となつて、何時までもまごつきあるか。チツと胸に手を當て、善惡正邪の道理を考へて見たら如何だえ」

禿化「私だとして本守護神が神になつてゐるのに、何時までも斯様な曲神に落ちてゐたい事はないのだ。併し吾々を濟度し助けて呉れる宣傳使が出て來ないので、今に身魂は世に落ち、曲神の群に入つて、日夜艱難辛苦を嘗めてゐるのだ」

鷹依たかより「そんなら此鷹依姫このたかよりひめが有難ありがたき神文しんもんを聞きかしてやるから、これにて綺麗きれいサツパ

リと成佛じやつぷつ致いたし、誠まことの神かみに立歸たちかへれよ〇

と言いひ乍ながら、天津祝詞あまつのりとと神言かみことを二三回にさんくわい、一生懸命いっしやうけんめいに繰返くりかへし唱となへ上げ、

「サア是丈結構これだけけつこうな祝詞のりとを上げた以上いじやうは、最早解脱もはやげだつしたであらう。早く此場このばを立去たちさ

らぬか〇

禿化なほど「何程結構けつこうな神文しんもんを唱となへて呉くれても、お前まへの心こころに執着しふちやくしん心しんと云いふ鬼おにが潜ひそんで居ゐ

る以上いじやうは、其言靈そのことたまが濁り切にごつて居ゐるから、解脱所げだつどころが苦くるしくて苦くるしくて、益々迷ますますまよひ

が深ふかくなる計ばかりだ。黄金こがねの玉たまの事ことは今日限けふかぎりフツツリと思おもひ切きつて善心ぜんしんに立返たちかへつ

てくれ。お前まへの尋たづねる桶伏山をけぶせやまの黄金こがねの玉たまは既すでに既すでに發見はつけんされて、言依別神様ことよりわけのかみさまが或ある

地點ちてんに、人知ひとしれず、神界しんかいの命めいに依よつてお納をさめになつてゐるぞ。最早玉もはやたまの詮議せんぎは無むよ

用うだ。お前達まへたちの心中しんちゆうを憐あはれみ、頓やがて言依別命様ことよりわけのみことさまが、國依別くによりわけを伴ともなひ、お前まへの所在ありかを尋たづ

ねてお越こし遊あそばすから、お前まへはこれより東ひがしを指さして海岸かいがんに出いで、海うみばたを通とほつて、

巴留ハルの國くにのアマゾン河がはの河口かはぐちに出いで、それより、河船かはふねに乗のつて、玉たまの森林しんりんに向むかへ〇

鷹依たかより「如何いかにも、さう承うけたまはらば、どこともなしに妙味めうみのある言葉ことばだ。一つコリヤ

考へる餘地が充分にある。何れ三人の者とトツクリと相談をしておいて、返事を
するから、今晚はこれで歸つて下さい。又明日の晩お目にかかりませう』
禿頭の化物はジユンジユンと怪しき音を立て、濛々と白煙を起し、忽ち其怪し
き姿を隠して了つた。

これより鷹依姫一行は此玉に對する執着心を除去し、櫟ヶ原を東にとり、海岸
に出で、北へ北へと進んで行く。

因に此怪物は決して猿世彦の怨靈では無い。天教山の木花姫が、一行の執着心
を拂ひ、誠の宣傳使に仕立て上げむとの周到なる御計らひなりける。

(大正一一・八・一一 舊六・九 松村眞澄録)

第五章 引懸戻し〔八二七〕

あななひけう
三五教の大教主

ことよりわけ
言依別や國依別の

かみ
神の司の後を追ひ

こころ
心も驕る高姫が

によい
如意の寶珠や紫の

うづ
珍の寶を始めとし

こがね
黄金の玉や麻邇の玉

ことよりわけ
言依別が携へて

たかさごじま
高砂島に渡りしと

ね
寝ても醒めても思ひ詰め

つねひこ
常彦、春彦兩人を

うま
甘くたらしめて供となし

しほ
潮の八百路を打渡り

たかしままる
高島丸に救はれて

あさひ
朝日もテルの港まで

やつや
漸く無事に安着し

あまた
數多の船客押分けて

せんとういち
先頭一の高姫は

くも
雲を霞と細くなり

からだ
體を斜に山路を

いきほひこ
勢込んで進み行く。

つねひこ
常彦、春彦兩人は

高姫司の後を追ひ
グツグツして居て高姫を

見失うなと言ひ乍ら
老木茂る山路を

縫ひつ潜りつ谷川を
數多渡りて暗間山

其山口に追ひ付きぬ。

高姫は暗間山の山口の雑草茂る松原に横たはり、

「サア、モウ此處まで来れば大丈夫だ。よもや常彦、春彦は追ひかけては能う来

まい。何程探すと云つても、此廣い高砂島、滅多に出會す氣遣ひはない。あゝモ

ウ是れで安心だ。海上は船を操らせねばならぬから、どうしても二人の連中が必

要だつたが、あんな頓馬な男が二人も附いて居ると、國人に對し、餘りお里が見

え透いて肝腎の御用が完全に勤めあがらぬ。サア是れから日の出神の神力を現は

し、神變不思議の神術を以て、假令曲津でも構はぬから、金毛九尾さまに御厄介

になつて、一つ不思議を現はし、新しい弟子を澤山に拵へ、そして、勝手を知つ

た國人に、遠近隈なく、喜んで玉捜しを致す様に仕向けさへすれば、餘り苦勞せ

ず共、キツと玉は集まつて來るに違ない。又言依別の所在を見つけて、直様報告致した者は、褒美は望み次第と、一つ、大芝居を始めるのだなア。それに付いては、あの様な間拔けた面した氣の利かぬ、半鐘泥棒の常彦や、蜥蜴面の貧相な春彦を連れて居ると都合が悪い、甘くまいたものだ。あゝ日の出神の生宮は、ヤツパリ變つた智慧を持つて御座るワイ。餘りに智慧が出るので、此高姫も吾と吾が手に感心を致しますワイ。それだから願望成就する迄は、黒姫さまの様に周章てハズバンドを持ちませぬのだ。わしの夫にならうと云ふ人物は、三千世界の伶俐者でない、一寸はお氣に入りませぬからなア」

と得意になつて獨言を喋くり、思はず調子に乗つて、段々聲が大きくなつて來た。常彦、春彦二人はソツと後から走つて來て、灌木の茂みに姿を隠し、高姫の獨言を一口も残らず聞取つて了ひ、互に顔見合して目をまるくし、舌を出し、ニヤリと笑つて居る。高姫は少しも氣が付かず、

「サア是れからが性念場だ。併し此テルの國へ來て、只一人の顔馴染もなし、如何して國人に甘くひつかかつて見ようかなア。始めに引つかかる人間が一番大切

だ。國中でもあの人なら……と持離されてゐる立派な人間を弟子にするのと、常
や春の様なへボ人間を弟子にするのとは、國人の信仰上非常な影響がある。どう
ぞ神様、一つ、立派なテルの國でも一か二と云ふ人間を妾の弟子に授けて下さい
ませ。お願い致します」
と拍手を打ち、天津祝詞を奏上し始めた。日は漸く暗間山の頂きに没し、あたり
は追々と暗くなり來たる。

高姫「あゝモウ日が暮れた。仕方がない。ここで一つ、一夜を明かし、又明日の
思案にせうかなア。ア、それも良からう」

と自問自答し乍ら、ゴロリと横になつた。されど何とはなしに心落ちつかず、甘
く眠られないので、いろいろの瞑想に耽つて居る。

常、春の兩人は俄にウーツと唸り乍ら、ガサガサ ガサガサと音を立て、慌だ
しく森の彼方に向つて姿を隠した。

「なんだ、四つ足かなア。油断のならぬものだ、最前から高姫の獨言を聞いてゐ
やがつたかも知れぬ。假令四つ足にしても靈はヤツパリ神様の分靈だから、あん

な事を聞かれると餘り氣分のよいものだない。あゝ慎むべきは口なりだ。ドレこれから口をつまへて無言の行でも致しませうかい」
と又ゴロンと横になる。少時あつて、高らかに話乍ら、ここを通り過ぎむとする
二人の旅人があつた。

甲「あなたは是れから何處までお出になりますか」

乙「ハイ私はテルの都のカナンと申す男で御座います。一寸暗閑山へ玉が出るとか聞きました、行つて來ましたが、モウ既に誰かが掘出した後でしたよ」

甲「テルの都のカナンさまと云へば、國王様のお側付のカナンさまと違ひますか」

乙「ハイ左様で御座います」

甲「これはこれは、一度お目に掛りたい掛りたいと憧憬で居りましたが、是れは又良い所でお目にかかりました。これと云ふも全く三五の神の御引合せで御座いませう。私はヒルの都のヤツパリ國王の近侍を致して居ります、アンナと云ふ男で御座います」

乙「ア、あなたがあの有名なアンナさまで御座いますか。何とマア奇遇で御座い

ますなア」

と立話しをして居る。高姫は此話を聞き、

「ヤレ良い奴が行つて来よつた。アンナにカナンと云ふ有名な男、同じ供に連れるのでも、偉い達だ。一人と萬人とに係はる拾ひ者だ。萬卒は得易く一將は得難し、何と神様も甘くお繰合せをして下さる事だ。有難う御座います」

と口の奥で感謝し乍ら、暗の中より涼しき若い聲を出して、

高姫「ヤアヤア、アンナ、カナンの兩人、暫く待ちやれよ。天教山に現はれたる日出神の生宮、變性男子の系統、高姫の神司、國治立大神の神勅により、汝等兩人此處を通る事を前知し、此神柱が只一柱、此處に海山を越えて高砂島に渡り、暗間山口に待つて居たぞよ。是れより兩人は高姫が部下となし、宣傳使の職を授ける。有難う思へ」

甲「ハイ誠に以て有難う存じませぬ」

乙「餘り有難うてお臍が茶を沸します」

高姫「コレコレ、アンナ、カナンとやら、日の出神の生宮の申す事、何と心得な

さる
』

甲 『日の出神の生宮もモウ聞き飽きました』

高姫 『ア、さうだろう。お前さまが聞飽く程、生宮の名は此高砂島に響き渡つて

居るだらう』

乙 『日の出神様の御仕組は、何時も御失敗だらけで呑み込んだ玉迄紛失をなされ、

常彦、春彦の家來迄が最前も途中に私に出會ひ、アンナ阿呆らしい事はカナンと

申してゐましたよ。ウフ、、、』

『コレコレ段々と聲の地金が現はれて來た。お前は常、春の兩人ぢやないか。此

日の出神を暗がりで騙さうと思つたつて、……ヘンだまされませんか。人がワザ

とに呆けて居れば良い氣になつて、アンナぢやの、カナンぢやの、何を言うのだ

い。本當に好かぬたらしい。どこどこ迄も悪性男が女子の尻を追ひまはす様に、

よい加減に恥を知りなさらぬか』

常彦 『實の所は常彦、春彦で御座います。お前さまが最前から水臭い獨言を云つ

てゐましたから、私も返報返しに一寸お氣をもませました。誠に濟みませぬ。お

前さまが餘り水臭いから、私には一つの面白い秘密があるのだけれど、魚心あれば水心ありだ。モウ云ひませぬワ。なア春彦、ソレ、高島丸の船中で、言依別さまと國依別さまに出會つて、玉の所在をソツと言つて貰つたから、此島にキツト隠してある。何々に往つて一日も早く掘出し、何々へ持つて行つて手柄をせうかい。高姫さまは随分水臭いことを仰有つて、俺達を邪魔者扱ひなさるから、俺達の方も却て結構だ。其言葉を聞かうと思つてワザワザ隠れて従いて來たのだ。二人で聞いた以上は、なんぼ言譯なさつたつて駄目ですよ。左様なら……」

春彦「常彦、早う逃げる逃げる、又高姫に追ひつかれては險呑だぞ。早く早く」と同じ所を足踏みならして、逃げる眞似してゐる。

高姫「コレコレ二人の御方、一寸待つて下され。今のは嘘だよ。こんな遠い所へ來て一人になつてたまりませうか。一寸待つてお呉れいなア」

春彦「オイ常公、高姫さまが半泣きになつて頼まつしやるから、旅は道連れ世は情だ。玉の所在さへ知らさによいものだから、待つて上げて呉れ」

常彦は側に居乍ら、遠い所に居るやうな聲を出して、

「オイ、そんなら仕方がないなア。待つて上げやうかい」と足音を段々高くし、

常彦「ア、此處だつたか、そんならマア此處でゆつくりと夜明かしをせうかい。

又明日、高姫さま、面白い話を聞かして上げますワ」

高姫「ア、それで安心しました。餘り仲がよすぎると、心易すぎて、互に罪のな

い喧譁をするものだ。オホ、々、々」

と笑ひに紛らす。常彦は暗がり紛れに、寝るにも寝られず、平坦な芝生を幸ひ、

盆踊りの様な恰好で、口から出放題を喋り乍ら踊り始めたり。

常彦「日の出神の生宮と いつも仰有るエライ人

變性男子の御系統 高姫さまに欺かれ

自轉倒島をあとにして 琉球の島迄漕ぎ渡り

槻の大木の洞穴に 這入つて散々からかはれ

言依別の大教主 國依別と一所に

萬里の波濤をうち渡り

高砂島へ七種の

玉を隠しに行かした

高姫さまは如何しても

言依別を引捉へ 取返さねばおかないと

目をつり頬をふくらしして ブウブウ泡を吹き乍ら

フリーン島や臺灣島 左手に眺めて海原を

波押切つて渡る折 思はぬ暗礁に乘上げて

船は忽ちメキメキと 木端微塵に粉碎し

取り付く島も沖の中 尻ひとつからげ波の上

コブラを没する潮水を 遙にかすむテルの國

山を合圖に歩き出す 忽ち吹來る荒風に

山嶽の波寄せ來り アワヤ三人の生命は

水泡と消えむとする所 神の恵の幸はひか

高島丸がやつて來て 吾等三人を救ひ上げ

船長室に導かれ タルチルさまに國所

いろいろ雑多と尋ねられ
高姫さまが頑張つて

日の出神を楯に取り
屁理窟言うたを船長は

逆上してると思ひ詰め
矢庭に手足を縛り上げ

クルリクルリと帆柱に
吊り上げられて高姫は

目を剥き出した可笑しさよ
そこへ國依別神

言依別が現れまして
高島丸の船長に

一言いへば船長は
二つ返事で高姫を

マストの上から吊下し
其儘姿を隠しける

それから種々面白い
高姫さまの御説教

辻褄合はぬ御示しも
却て皆のお慰み

國依別が現はれて
コレコレ常彦、高姫が

デッキの上うへに居をる故ゆゑに
言依別ことよりわけや國依別くによりわけが此船このふねに

乗のつて居ゐるとは云いうてくれな
代かはりにお前まへに肝腎かんじんの

玉たまの所在ありかを知らしてやらう
コレ此このとほ通り美うつくしい

七つの玉と吾が前に 差出し玉うた其時は

如何な俺でもギョツとした 高姫さまが鯨になり

玉々云つて騒ぐのも 決して無理はあるまいと

私も本當に氣が付いた オットドッコイ高姫さまの

御座る前とは知り乍ら ウツカリ口が迂りました

ヤツパリこれは夢ぢやつた 嘘でも本眞でもかまやせぬ

夢にしておきや別状ない ア、夢ぢやつた夢ぢやつた

高姫さまよ春彦よ 必ず俺が麻邇寶珠

其他の玉の所在をば 知つて居るとは思ふなよ

國依別に頼まれた オットドッコイ又違うた

國依別が居つたなら 言依別と一所に

七つの玉を嬉しそに 抱えてニコニコしとるだる

それに相違はあるまいと 思つて寝たらこんな夢

毎晩續けて見たのだよ 夢の浮世と言ひ乍ら

不思議の夢もあるものぢや
高姫さまよ春彦よ

此常彦が申すこと
ゆめゆめ疑ふこと勿れ

あゝ惟神々々
私の毎晩見た夢は

嘘ではあるまい誠ぢやなかる
ホンに分らぬ物語

ドッコイシヨノドッコイシヨ
ウントコドッコイ高姫さま

ヤットコドッコイ春彦さま
ドッコイドッコイ常彦さま

ウントコセーのヤットコセー

と口から出放題、眞偽不判明の歌を唄つて、高姫にからかつて見た。高姫は玉に
關する話ときたら、どんな嘘でも聞耳立て、目を釣り上げ、一言も洩らさじと體
を斜に構へ、此歌もヤツパリ大部分誠の物と信じ切り居たり。

(大正一一・八・一一 舊六・一九 松村眞澄録)

(昭和一〇・六・七 王仁校正)

第六章 玉の行衛（八二八）

高姫は言葉を軟らげ、

「コレコレ常彦さま、ヤツパリお前は私が三五教の宣傳使の中でも、一番氣の利いた立派な方だと思つて連れて來たが、……ヤツパリ此高姫の目は違ひませぬワ
イ。ようマア目敏くも、言依別や、國依別の船に乗つてるのが氣がつかしましたな
ア」

常彦 「蛇の道は蛇ですからなア。どうも言依別や國依別の臭が船に乗つた時から、鼻について仕方がないものですから、一寸考へてみました、いよいよ此奴ア變だと思つてかぎつきました」

春彦 「まるで犬の様な鼻の利く男だなア。蛇の道は蛇でなくて、猪の道は犬ぢやないか。さうして本當に言依別さまや國依別が立派な玉を持つて御座つたのか」
常彦 「貴様が海へ踊つて落込んだ時に、綱を投げて呉れた船客が國依別だつたのだ。つまりお前は國依別さまに生命を助けて貰うたのだよ」

春彦「ア、さうか、それは有難い。一つ御禮を言うぢやつたに、お前が云つて呉れぬものだから、つい御無禮をした。ヤツパリ國依別さまは親切だなア。二つ目には足手纏ひになるの、エ、加減にまいて了はぬと、あんなヒヨツトコは邪魔になるとか仰有る生神もあるなり、世は種々だ。そして立派な玉をお前は拜見したのか」

常彦「天機洩らす可からずだ。大きな聲で云ふない。そこに高姫さまが聞いて御座るぢやないか。高姫さまの御座らぬ所で、トツクリとお前丈に一厘の祕密を知らしてやるワ。オツと了うた、餘り大きな聲でウツカリ喋つて了つた。……モシ高姫さま、今私が何を言つたか聞えましたか。餘りハツキリとは聞えては居やせぬだらうな。聞えたら大變ぢやからなア。ア、桑原々々、慎むべきは言葉なりけりぢや、アハ、ハ、ハ、」

高姫「コレ常彦さま、お前、そんなにイチヤつかすものぢやありませんぞえ。トツトと有體に仰有い。そしたら此高姫は云ふに及ばず、錦の宮の教主となり、お前を總務にして立派な神業に使つて上げます。五六七の世でも出て来て見なさい。

それはそれはあんな者がこんな者になつたと云ふ御仕組ですから、それで神には
叶はぬと仰有るのぢやぞえ[□]
常彦[□]「ハ、ア、さうすると最前アンナ、カナンに化けたのも、強ち徒勞ではあり
ませぬな。私がアンナ、春彦はカナン、私はアンナ者がコンナ者になり、春彦は
立派な人間になつて、高姫さまでも何人でも、到底カナンと云ふ立派な人間にな
ると云ふ前兆ですか、ハツハ、。これと云ふのも國依別さまが御親切に、玉
の所在を決して他言はならぬと固く戒めて仰有つて下さつたのは、本當に有難い。
よく私の魂を悟つて下さつた。士は己を知る者の爲に死すとか云つて、自分の眞
心を見ぬいてくれた人位、有難く思ふものはない。私も男と見込まれて、大事の
祕密の玉の所在を知らされ、實物迄拜見さして頂いたのだから、此首が假令千切
れても、國依別さまが云つてもよいと仰有る迄申されませぬワイ。ア、云はな分
らず、云うてはならず、六かしい仕組であるぞよ……とお筆先に神様が仰有つて
ゐるのは、大方こんな事だらう。お筆先の文句がキタリキタリと出て来て、身に
滲みわたる様で御座いますワイ[□]

高姫「お前は言はねばならぬ人には隠して云はぬなり、言うて悪い人には言はうとするから、國依別さまが厳しく口止めをしたのだよ。よう考へて御覽なさい。私の供になつて來て居るお前に祕密を明かすと云ふ事は、つまり高姫に知らせよと云ふ謎ですよ。此事を詳しく高姫に傳へてくれと云つたら、却て心易う思ひ、忘れて了ふだらうから、言ふな……と云つておけば、大事な事と思ひ、お前が念頭にかけて、コツソリとお前が私に云うだらうと、先の先まで氣をまはし、お前に言うたのだよ。國依別も中々偉いワイ。よう理窟を云ふ男だが、どこともなく香ばしい所のある男だと思つた。……コレコレ常彦、言ひなさい、キット後は私が引受けますから……」

常彦「メツサウな、そんな事言うてなりますかいな。お前さまは私を、甘くたらして云はさうと思ひ、巧言令色の限りを盡して、うまく誘導訊問をなさるが、マア止めておきませうかい。こんな所でお前さまに言はうものなら、あとは尻喰ひ觀音、そこに居るかとも仰有らせないだらう。マア言はずにおけば常彦の御機嫌を損はぬ様に親切に目をかけてくれるに違ひない。言ひさへせなきや、櫻花爛漫

と常彦の身邊に咲き匂ふといふものだ。言うたが最後、明日ありと思ふ心の仇櫻、夜半に嵐の吹かぬものは……と忽ち高姫嵐に吹きおろされ、ザックバラな目に遇はされるに定つてる。花は半開にして、長く梢に咲き匂ふ位な所で止めておきませうかい。イツヒ、ア、こんな愉快な事が又と再び三千世界にあらうかいな。三千世界一度に開く梅の花、開く時節が來たら祕密の倉を開けて見せて上げませう。それも一寸でも私の御機嫌を損ねたが最後駄目ですよ」

高姫「コレ常彦、情ない事を云うておくれな。なんぼ私だつてさう現金な女ぢやありませんぞえ。今の人間は思惑さへ立ちや、後は見向きもせぬのが多いが、苟くも、善一筋の誠生粹の大和魂の根本の性來の、而も日の出神の生宮、變性男子の系統、これ丈何もかも資格の揃うた高姫がそんな人間臭い心を持ち、行ひを致さうものなら、第一神様のお道が潰れるぢやありませんか。變性男子の身魂に對しても、お顔に泥を塗るやうなものなり、日の出神さまに對しても申譯がありません。せぬ。さうだから大丈夫ですよ。先で云ふも今云ふも同じことだ。さう出し惜みをせずと、お前の腹の痛む事ぢやなし、一口、かうだとお前の口に出して呉れた

ら良いぢやないか。サア常彦、ホンにお前は氣の良い人だ。そんなにピンとすねずにチャツと仰有つて下さいナ」

常彦「猫があれ程好きな鼠を生捕にしても中々さうムシヤムシヤと食ひはしますまい。くはへては放り上げ、くはへては放り上げ、追ひかけたり押へたり、何遍も

何遍もイチャつかして、終局には鬪殺にして、楽しんで食ふように、此話もさう直々に申上げると、大事件だから値打がなくなる。マア楽しんで私に従いて来なさい。

其代りに或時期が来たら知らして上げますから、一つ約束をしておかねばなりません。高姫さま、物を教へて貰ふ者が弟子で、教へる者が先生ですなア」

高姫「きまつた事だよ。教へる者が先生だ。さうだからお前達は私の弟子になつて居るぢやないか」

常彦「あゝそれで分りました。其御考へなれば、行く行くは玉の所在を教へて上げませう。其代り今日から私が先生でお前さまは弟子だよ。サア荷物を持つて従

いて来なさい」

高姫「コレ常彦、おまへは何と云ふ事を云ふのだい。天地顛倒も甚しいぢやない

高姫「コレ常彦、おまへは何と云ふ事を云ふのだい。天地顛倒も甚しいぢやない

高姫「コレ常彦、おまへは何と云ふ事を云ふのだい。天地顛倒も甚しいぢやない

高姫「コレ常彦、おまへは何と云ふ事を云ふのだい。天地顛倒も甚しいぢやない

高姫「コレ常彦、おまへは何と云ふ事を云ふのだい。天地顛倒も甚しいぢやない

高姫「コレ常彦、おまへは何と云ふ事を云ふのだい。天地顛倒も甚しいぢやない

か。誰がお前の弟子になる者があるものか。苟も日の出神の生宮ですよ。餘り馬鹿にしなさるな」

常彦「これはこれは失禮な事を申し上げました。そんならどうぞ何もかも教へて下さいませ。私は教へる資格がありませんから、モウ此れ限り何も申上げませぬ。教へて上げやうと云へばお目玉を頂戴するなり、其方が宜しい。モウ此れ限り、夜前あなたの仰有った様に此國の人を弟子にして、半鐘泥棒や蜥蜴面の吾々に離れて活動して下さい。……なア春彦、半鐘泥棒や蜥蜴面が従いて居ると高姫さまのお邪魔になるから、これでお別れせうかい」

春彦「何が何だか、俺やモウサツパリ譯が分らぬ様になつて來たワイ。……オイ常彦、そんな意地の悪い事言はずに、男らしい薩張と高姫さまに申し上げたたら如何だ」

高姫「コレコレ春彦、流石はお前は見上げたものだ。さうなくては宣傳使とは言へませぬワイ。……コレ常彦、言はな言はぬで宜しい。お前の行く所へ従いて行きさへすればキット分るのだから……」

常彦「ソラ分りませう。併し乍ら私は出直して来る共、お前さまの従いてゐる限りは、玉の在る方面へは決して足は向けませぬワ。そしたら如何なさる。オホ、、、」

高姫「エ、氣色の悪い、しぶとい奴だなア。ヨシヨシ今に神界に奏上して、口も何も利けぬ様に金縛りをかけてやるから、それでも宜しいか」

常彦「どうぞ早うかけて下さい。お前さまに玉の所在を言へ言へと云うて迫られるのが、辛うてたまらぬから、物が言へぬようにして下されば、それで私の責任が逃れると云ふものだ。どうぞ早うかけて下さいな。不動の金縛りを……」
と云ひ乍ら、舌を一寸上下の唇の間に挟んで高姫の前に頭をしゃくり、突き出して見せる。

高姫「エ、どうもかうも仕方のない、上げも下ろしもならぬ動物ぢやなア」

常彦「オイ春彦、驅足々々。高姫さまをまくのだよ」

と尻引まくり、一生懸命に地響きさせ乍ら、降り坂を驅出した。高姫は後より一生懸命に二人の姿を見失はじと追っかけて行く。

高姫は高い石に躓きパタリと大地に倒れ、額をたたか打ち、血をタラタラ流し、且つ膝頭を打つて、頭を撫で足を撫で、身を藻掻いてゐる。二人は高姫が必ず追っかけ来るものと信じて、一生懸命に南へ南へと走り行く。

ここを通りかかった四五人の男、高姫の疵を見て氣の毒がり、傍の交り氣のない土を水に溶かし、額と足とに塗りつける。高姫は、

「何方か知りませぬが、ようマア助けて下さいました。これも全く日の出神さまのお神徳で△います。貴方も結構なお神徳を頂きなされたな。高姫と云ふ方は、誠に結構な身魂であるから、此身魂に水一杯でも、茶一滴でも供養した者は、大神様のお喜びによつて、家は代々富貴繁昌、子孫長久、五穀豊饒、病氣平癒、千客萬來の瑞祥が出て参ります。皆さま、結構な御用をさして貰ひなされた。サア、是から、三五教の神様に御禮をなさい。私も一緒に御禮をしてあげます」

甲「何と妙な事を言ふ婆アぢやのう。人に世話になつておいて、反對にお禮をせいで、御禮をして上げるのと、譯が分らぬぢやないか。大方これはキ印かも知れぬぞ。うっかり相手にならうものなら大變だ。イ、加減にして行かうぢやないか」

高姫「コレコレ若い衆、キ印ですよ。三千世界の狂者の大化物の變性男子の系の生神様ぢや」

乙「それ程エライ生神さまが、何で又道に倒れて怪我をなさるのだらう。此點が一寸合點が行かぬぢやないか」

高姫「そこが神様の御仕組だ。縁なき衆生は度し難しと云ふ事がある。日の出神様が、一寸此肉體を道に倒してみせて、ワザとお前等に世話をさせて、手柄をさして、因縁の綱を掛け、結構にして助けてやらうと遊ばすのだ。分りましたかな

ア

乙「根つから分りませぬワイ。……オイ皆の連中、早く玉を御供へに往かうぢやないか。結構の玉を供へたら、結構にしてやらうと云ふ神があるから、早く何々迄急がうぢやないか」

丙「随分澤山にお参りだから、ヤツと玉も種々と集つて居るだらうなア」

乙「ソリやお前、一遍俺も参つて来たが、それはそれは立派な玉が山の如くに神さまの前に積んであつたよ。金剛不壞の如意寶珠に黄金の玉、龍宮の麻邇寶珠の

玉とか云つて、紫、青、白、赤、黄、立派な玉が目醒しい程供へてあつたよ」

高姫「コレコレお前、其玉はどこに供へてあるのだ。一寸云つて下さらぬか」

乙「其玉の所在ですかいな。ソリヤ一寸何々して貰はぬと、何々に何々が納まつ

て居ると云ふ事は云はれませぬなア」

高姫「そんならお金を上げるから仰有つて下さい」

乙「私も實は貧乏で困つてをるのだ。金儲けになる事なら云つてあげようかな。

ここに五人も居るけれど、玉の場所を知つた者は俺丈だから儲け放題だ。一口に

ナンボ金を出しますか」

高姫「一口に一兩づつ上げよう。成る可く二口位に詳しう云つて下さいや」

乙「中々一口や二口には云ひませぬで、一口云うたら一兩づつ引替に致しませう。

それも先錢ですよ」

高姫「サア一兩」

と突き出す。

乙「ア……」

高姫「後を言はぬかいな」

乙「モウ一兩だけ、一口がとこ云つたぢやないか。モ一兩下さい。其次を云うて

上げよう」

高姫「あゝ仕方がない、……それ一兩」

と又突き出す。

乙「リ……」

と云ひ乍ら、又一兩を呉れと手を突き出す。

高姫「何と高い案内料ぢやなア。モチト長く言うてお呉れぬかいな」

乙「元からの約束だ、ア……と云へば一口かかる。リ……といへば又一口ぢやな

いか」

高姫「エ、欲な男ぢや。……それ一兩、今度はチト長く言うて呉れ」

乙「は又一兩懐にねぢ込み、

乙「今度は長く言ひますよ。……ナリー……」

かう云ふ調子に「アリナの瀧の水の上、鏡の池の前に澤山の寶玉が供へてある」

と云ふ事を教へられ、高姫は勢込んでテルの國のアリナの瀧を指して、一生懸命に驅けり行く。

道傍の木蔭に休んで居た常彦、春彦は、高姫の血相變へて行く姿を眺め、

「オイオイ高姫さま、一寸待つて下さいなア」

と呼びかけた。高姫は後を一寸振向き、上下の齒を密着させ、ニユツと口からはし、頤を二三遍しやくつて、

高姫「イ、、、大きに憚りさま。玉の所在は日の出神さまから知らして貰ひまし

た。必ず従いて来て下さるなや」

と一生懸命に走り行く。常彦は、

常彦「本當に玉が此國に隠してあるのかな。こりや一つ高姫さまの後から従いて

行つて、白玉でも黄玉でも、一つ拾はぬと、はるばる出て来た甲斐がないワ。：

「オイ春彦、急げ」

と尻ひつからげ大股にドンドン、髪振り亂し砂煙を立て乍ら、高姫の通つた後を一目散に走り行く。

第七章 牛童丸(八二九)

高姫は長途の旅を思ひ切つて驅け出し、喉は渴き、身體は疲れ、止むを得ず、路傍の樹蔭に身を横たへ、細谷川に喉をうるほし、蔓苺を「むし」つて食ひ、一夜をここに明さむと、小聲になつて、天津祝詞を奏上しゐたり。

常彦、春彦の二人は十丁計り遅れた儘、一生懸命に身體をはすかひに、餘り廣からぬテルの街道を南へ南へと走つて行く。里の童が夕暮に牛を川に入れ、其背に跨つて、横笛を吹き乍ら歸つて行く。常彦は一生懸命に吾前に牛の居ることも氣がつかず、ドスンと牛の尻に頭突を持つて行つた。牛は驚いて飛び上り、背に乗つてゐた童は忽ち地上に顛落し、ムクムク起上り、牛の綱をグツと握り乍ら、童兒「オイ、どこの奴か知らぬが氣をつけぬかい。貴様の目玉は節穴か」

と、小さき童に似ず大膽にも大の男に向つて嘸鳴りつけたる。

常彦「これはこれは誠に日の暮の事と云ひ、チツと氣が急きましたので、牛の尻餅を突きました。どうぞ御勘辨下さりませ」

童兒「コリヤ謝つて事が濟むと思ふか。人を牛々云ふ様な目に合はしやがつて、只一言の斷り位で此場を逃しようとしても、牛叶はぬぞ。オイ、そこに一寸平太れ！」

常彦「ハイ、そんなら平太りますワ。どうぞこれで勘忍して下さい」

童兒「お前計りでは可かぬ。モ一人の蜥蜴のような顔した奴、そいつも坐れ！」

春彦「なんとマア、小つぽけなザマして、大人に向ひ御託をほざく奴だなア。俺は別に突當つたのぢやない。俺迄が謝つてたまるかい」

童兒「お前も同類だ。グツグツ云ふと牛にケシをかけ突殺してやるか。俺は身體は小つこつても、俺の家來の牛は大分に大きいぞ」

常彦「【モ】牛【モ】牛、童兒さま、モウいゝ加減に了見して下さいなア」

童兒「俺の正體を誰ぢやと思つてるか。それを當たら許してやらう」

常彦つねひこ「ハイ、確かにお前まへは牛童丸うしどうまるさまぢや御座ございませぬか。高砂島たかさごじまには、えてしては、牛童丸うしどうまると云いふ神さまかみが現あられて、牛うしに乗のつて横笛よこぶえを吹ふいてゐられると云いふことを聞ききました」

童兒どうじ「牛童丸うしどうまるは何神なにがみの化神けしんか、知しつて居ゐるだらうなア」

常彦つねひこ「ハイ、知しつて居ゐります。御年村みとせむらの百姓ひやくしやう、自稱良じしやうじとらの金神こんじんさま……とは違ちがひま

すか」

童兒どうじ「私わたしは百姓ひやくしやうの神かみだ。大歳おほとしの神かみの化身けしんだよ」

春彦はるひこ「ハアそれで常彦つねひこがあなたの牛うしにぶつかり、背中せなかから童兒どうじを大歳おほとしの神かみさまですか、アハ、。但ただしは小ちつこいザマして、大おほきな人間にんげんをオウドシの神かみさまだらう」

童兒どうじ「お前まへは春彦はるひこと云いふ男をとこだなア、一寸ちよつとここへ来こい。お前まへにやりたい物ものがある」

春彦はるひこ「ハイ有難ありがたう。出だすことなら、舌したを出だすのも、手てを出だすのも嫌いやだが、貰もらふ事ことなら、犬いぬの葬さうれん斂れんでも、牛うしの骨ほねでも頂いたきます」

と子供こどもだと思おもひ、からかひ半分はんぶんに童兒どうじの前まへにすり寄よつた。童兒どうじは横笛よこぶえを逆手さかてに持も

ち、春彦の横面を目蒐けて、牛の背中から、

牛童「大歳の神が横笛を以て、お前の横面を力一杯春彦だよ」

と首がいがむ程叩きつけ、

牛童「モ一つやらうか」

と平然として笑つて居る。

春彦「モウモウ澤山で御座います。随分お前さまは小さい癖に、エライ力だな。」

これ丈の腕があれば、大の男を捉まへて嘲弄するのも無理はないワイ。それだか

ら神さまが何程小さい者でも侮ることはならぬ、どんな結構な方が化けて御座る

か知れぬぞよ……と仰有つたのだ。……オイ常彦、モウいゝ加減にこらへて貰つ

て、行かうぢやないか」

常彦「さうだな。……【モ】牛【モ】牛牛童丸様、そんならこれでお別れ致しま

す」

牛童「待て待て、お前達兩人にモ一つ大きな物をやりたいのだ」

春彦「イヤもう結構で御座います。モウあれで澤山で御座います。此上頂きます

と、笠の臺が飛んで了ひます」

牛童「イヤ心配するな。此牛をお前にやるから、アリナの瀧迄乗って行け。大變に足も草疲れてゐる様だから……。そして高姫はこれから十丁計り南へ行くと、小川がある。其小川を左にとつて十間計りのぼると、そこに高姫が休んで居るから、此牛に乗つて、川をバサバサと上つて行け。左様なら……」

と云ふかと思れば、最早童兒の姿は見えなくなり居たり。

常彦「オイ春彦、どうだ。俺が突當つた計りで、こんな結構な乗物を頂戴したぢやないか。サア是れから二人共此牛の背中に跨つて往かうぢやないか」

春彦「お前は結構だが、俺は横笛でなぐられ、痛くて仕方がないワ」

常彦「ナニ、神の恵の鞭だよ。牛童丸様になぐられたのだから、餘程貴様も光榮だ。これが高姫にでも撲られたのだつたら、それこそ腹が立つてたまらぬけれど、何しろ神様が、春彦モウ別れるのか、「おなぐ」り惜しいと云つて、お撲り遊ばしたのだよ。サア早く乗らう。牛と見し世ぞ今は戀しき……と云つて、今が一番結構かも知れぬぞ。据膳食はぬは男の中ぢやない。サア早く乗つたり乗つたり」

春彦「コシカ峠の彌次、與太の夢の様に又牛に乗つて、牛の奴から小言をきかされるやうな事はあるまいかな」

常彦「心配するな」

と云ひ乍ら、ヒラリと背に跨つた。春彦は牛の綱を引き乍ら、南へ南へと進み、遂に童兒の教へた細谷川を左に取り、川を溯りて、高姫の休んでゐる二三間側まで進み、「オウオウ」……と牛を制し、ヒラリと飛び下り、

春彦「モシモシ牛さま、エライ御苦勞で御座いました。「モウ」どうぞお歸り下

さいませ」

牛「ウン　ウン　ウン　ウー」

と山もはぢける様な聲を出して唸り立てる。高姫はウツラウツラ夢路を辿つてゐたが、此聲に驚いて目を覺まし、巨大の牛の兩側に常彦、春彦二人の立つてゐるを見て、

高姫「お前は常、春の二人ぢやないか。何だ、そんな大きな物を引っぱつて来て……又道中で百姓の寶を何々して來たのだらう。どこ迄も泥棒根性は直らぬと見

えるワイ。さうぢやから此高姫がお前の様な者を連れて歩くと、神徳がおちると云うたのだよ。エ、汚らはしい、トツトと歸つて呉れ。ツユー ツユー ツユー
と唾を吐き出して、二人にかける眞似をする。

常彦「高姫さま、心機一轉もそこまで行けば、徹底したものですなア。モウ私はお前さまになんにも言ひませぬ。玉の所在もお前さまの心を見抜いた上で知らし
てあげたいと思つてゐたが、さう猫の目のやうにクレクレクレと變るお方は險呑
だから、これきり祕密は云ひませぬから、其の積りでめて下さい」

高姫「オイ常、ソラ何を言ふのだい。大それた日の出神の生宮に向つて、言うて
やるの、言うてやらぬのもあるものか。妾が知らぬやうな顔して氣を引いて見れ
ば、エラソウに恩に着せて、序文や總論計りを竝べ、肝腎の中味は水の中で屁を
放いたやうな掴まへ所のないことを云ふのだらう。日の出神様から、玉の所在は
チヤンと聞いたのだ。モウお前さまに用はない、一生頼みませぬ。トツトと妾の
目にかからぬ所へ往つてお呉れ」

常彦「高姫さま、さう啖呵を切るものぢやありませんよ。腐り繩にも亦取得と云

つて、私にでも頼まねばならぬことが、たつた今出て來ますから、餘リエラソウなことは云はぬが宜しからうぜ」

高姫「エ、うるさい」

常彦「そんなら、此牛に乗つて、一口一兩の、ア、リ、ナーへお先へ失禮致しま

すワ。私は途中で牛童丸さまに一伍一什教へられ、お前さまのここに居ることも、

チャンと知らして貰ひ、結構な四足の乗物まで頂戴して來たのだから、一寸も草

疲れはせぬ。モウ十日計りアリナーまでかかるけれど、これで乗つて行けば三日

計りで行ける。……ぢやお先へ、高姫さま……アバヨ」

又もや牛に跨がらうとする。高姫はコリヤ大變と、慌しく起上り、常彦の腰を

グツと引掴み、

高姫「待つたり待つたり常彦、妾が悪かつた。さう腹を立てて下さるな。一寸お

前が如何云ふか知らぬと思つて氣を曳いて見たのだよ」

常彦「又何時もの筆法ですか。其手は食ひませぬワ。……サア春彦、お前も乗

つて呉れ。……高姫さま、お先へ、如意寶珠、其他の御神寶を頂いて歸ります。

アリヨース」

高姫「コレ常公、春公、待てと言つたら、待ちなさつたら如何ぢや、さう高姫を嫌つたものぢやないぜ」

と圓い目をワザと細うし、おチヨボ口を作つて機嫌をとる。月夜でスツカリは分らねど、言葉の云ひ方から、スタイルでそれと肯かれた。

高姫「モウ牛は歸つて貰つたら如何です。却て修業にならぬかも知れませぬで」
常彦「ア、さうだなア。そんなら牛さま、【モウ】歸つて下さい」

牛は常彦の一言に泡の如く其場に消え失せけり。高姫は之れを見て、稍安心の胸を撫で下し、ソロソロ又強いことを言ひかけた。

高姫「何程お前の足が達者でも、私には従いて來られますまい。それだから慢心はなさるなと始終教訓してゐるのだよ」

常彦「又高姫さまは弱味をつけ込んで、そんなことを仰有る。ア、こんな事なら、牛に歸つて貰ふのぢやなかつたに。……モシモシ牛さま、モ一遍こちらへ歸りて

下さい。そして牛童丸の仰有つた様に、アリナの瀧迄連れて行つて下さいな」

と當途もなく叫んだ。呼べど叫べど梨の礫の何の音沙汰もない。

常彦「ア、折角牛さまに助けて貰うたと思へば、明日は又砂つぽこりの道を、親

譲りの交通機關に油でもかけてテクらねばならぬかいな。……牛と見し世ぞ今は

戀しき……と云ふ歌の心が、今は事實となつて來たワイ」

高姫「オツホ、、、、そら御覽、驕る平家は久しからず、……と云つて、何時迄

も柳の下に鱈は居りませぬぞや。お前のやうな人を連れてゆくのは手足纏ひだが

仕方がない。そんならドツと張込んで、お供を許してあげよう。サアゆつくりと

此處で休みなさい」

春彦「そんな事を言つて、俺達がグウグウ休んでる間に、ソツと高姫さまが抜け

出し、先へ行つて、玉をスツカリ取つてしまはつしやるのだなからうかな」

常彦「ウン、まさか、そんなこともなさるまいかい。兔も角私の聞いて居るのは

又外にあるのぢやから、さう心配したものでぢやないワイ」

高姫「お前達はそれだから可かぬと云ふのぢや。心を疑ふといふ事は神界で大變

な罪ですよ。疑を晴らして、綺麗さつぱりと改心なされ、改心が出來ねば御供は

許ゆるしませぬぞや〃

常彦つねひこ「ハイ改心かいしん致しますいたます〃」

高姫たかひめ「春彦はるひこもさうだらうな〃」

春彦はるひこ「尤もつとも左様さやうで御座ございます〃」

斯かく話はなしす所ところへ大杉おほすぎの枝えだの梢しんから何者なにものとも知しれず、

高姫たかひめ々々、常彦つねひこコツコ、春はるヒコツココ〃

と梟鳥ふくろどりのような聲こゑでなき出だした。

高姫たかひめうす氣味きみ悪わるくなり、スゴスゴと座ざを立たちて、元來もとまし道みちへ逃にげ出した。二人ふたりも

薄氣味うすきみ悪わるく高姫たかひめの後あとに従したがひ、テルの街道かいだうへ出でて、三人さんにんは一生いっしやう懸命けんめいに南みなみへ南みなみへと眠ねむ

目めを俄にはかにさまし、トボトボと歩あゆみ行ゆく。

草くさを褥しとねに木株きかぶを枕まくらに芭蕉ばせうの葉はを「むし」つて夜具やぐに代用だいようし乍ながら、七日なぬか計ばかりを経へ

て漸やうやく、猿世彦さるよひこの奇蹟きせきを殘のこした蛸取村たことりむらの海岸かいがんに出でた。此時このとき既にすで日は西山せいざんに没ぼつし、

二日ふつかの月つきは西方せいほうの波なみの上うへ近く浮ういた様やうに見みえてゐる。三人さんにんは月つきに向むかつて合掌がつしやうし、

天津祝詞あまつのりとを奏上そうじやうし、天あまの數歌かずうたをうたひ乍ながら、夜中やちうをも屈くつせず、アリナの瀧たきを目當めあ

にトボトボと進み行く。

(大正一一・八・一一 舊六・一九 松村眞澄録)

(昭和一〇・六・七 王仁校正)

第八章 高姫懺伏(八三〇)

高姫一行は漸くにしてアリナの瀧に着いた。四五人の信者らしき者瀧壺の前に赤裸のまま跪いて何事か一生懸命に祈願してゐる。されど轟々たる瀑布の音に聞き取ることは出来なかつた。高姫一行は身を浄め、それより、瀑布の右側を攀登り、漸くにして鏡の池に着いたのは恰度夜明けであつた。群鴉は前後左右に飛交ひ、『カアカア』と潔く鳴いてゐる。

因に云ふ、朝なく鳥は最も冴えたる聲にて、『カアカア』と鳴く、之を鵲と云ふ、少しく普通の鳥よりは矮小である。夕べに鳴くの之を眞の鳥と云ふ。夕べ

の鳥は鵲に比べては餘程體格も大きく、どこともなしに下品な所があり、鳴聲は「ガアガア」と濁つて居る。又百人一首の歌に……鵲の渡せる橋におく霜の白きを見れば夜ぞ更けにける……とある鵲の橋は大極殿の階段を指したものである。「カ」と云ふ言靈は輝き照る意、ササギは幸ひと云ふ意義である。天津日繼天皇様の御昇降遊ばす、行幸橋と云ふ意味である。又帝陵をみささぎと云ふのは、水幸はふと云ふ意味であつて、神靈の脱出し給ひたる肉體は即ち水である。それ故、崩御して行幸遊ばす所を御陵と云ふのである。鵲の力は火の意義であり御陵のミは水の意義である。今鳴いた鳥は即ち鵲の聲であつた。

鏡の池の傍には狭依彦命の神靈が新しき宮を立てて齋られてあつた。さうして、岩窟の前方左側の方に鏡の池に向つて、龍國別等の住まつてゐた庵が残つてゐる。そこには國、玉の兩人が鏡の池の番を兼ね、狭依彦神社の奉仕にかかつて居た。諸方より献上したる種々の玉石や瑪瑙などの玉は山の如くに積み重ねられてある。少しく上の方には例の懸橋の御殿が新造され、木の香香ばしく、あたりに漂ひるたり。

高姫は鏡の池に向ひ、拍手し乍ら、うづ高くつまれたる種々の玉に早くも目をつけ、如意寶珠、麻邇の寶玉などはなきかと、隼の如き眼を光らせ乍ら眺め入つた。鏡の池は俄に永年の沈黙を破つて、

「ブクブクブク、ウンウンウン」

と唸り出した。國、玉の神司は顔色を變へて、懸橋御殿へ國玉依別の神司の前に報告の爲に走つて行く。池の中より、

「ア、、、綾の聖地をあとにして、玉の所在を尋ねむと、執着心の魔につかれ、ここまで出て来たうろたへ宣傳使。」

イ、、、意久地なしの常彦、春彦を力と致し、海原を渡り、漸うここまでやつて来た意地悪同志の三人連のイカサマ宣傳使。

ウ、、、うろたへ騒いで南洋諸島はまだ愚、高砂島まで、小さき意地と欲とに絡まれて、ド迷ひ来る高姫のデモ宣傳使。

エ、、、遠慮會釋もなく人の門戸を叩き、沓島の鍵を盗み出し、如意寶珠の玉を呑み込み、ウライナイ教を立てて三五教の瑞の御靈に刃向ひたる没分曉漢の宣傳使。

才、大江山の山麓魔窟ケ原に土窟を作り、又庵を結び、庵の火事を起してうろたへ騒いだ肝の小さい、口許り立派なデモ宣傳使。

力、烏の鳴かぬ日があつても、玉に執着心の離れた日のない執念深き、高、黒、二人の宣傳使。

キ、鬼城山の木常姫の再來、金毛九尾の悪狐に憑依された外面如菩薩、内心如夜叉のイカサマ宣傳使。

ク、國依別の偽天狗に誑かされ、三人連にて竹生島迄玉捜しに参り、よい恥を曬して、スゴスゴ聖地へ歸つて来た高、黒、宣傳使。

ケ、見當の取れぬ仕組ぢやと申して、行つまる度に逃げを張るズルイ宣傳使。コ、小面憎い程自我心の強い、困り者の宣傳使。今日限り直日の身魂に立歸

り、我を折らねば、其方の思惑は何時になつても成就致さぬのみか、萬劫末代の恥を曬さねばならぬぞよ

高姫「あゝ、何れの水神さまか知りませぬが、こう見えても私は日の出神の生宮、水神さま位に御意見を受けるやうな高姫とは一寸違ひますワイ。

いゝゝ、意見がましい事を云つて威張らうと思つても、いつかな いつかな其様
なイカサマ宣示はいつになつても、聞きませぬぞや。

うゝゝ、うさんな聲を出して、ウヨウヨと水の中から泡を吹くよりも、天晴れと
正體を現はして言ひなされ。日の出神が審神をして、善か悪かを調べて改心さし
て上げませうぞや。

えゝゝ、得體の知れぬ神の云ふ事は、高姫の耳には這入りませぬぞや。

おゝゝ、鬼でも蛇でも悪魔でも、誠一つの生粹の大和魂で改心させる此高姫でム
いますぞ。餘り見違をして下さるなや。

かゝゝ、かけ構へのないことを、傍から干渉して貰ふと癩癩玉が破裂致しますぞ。
きゝゝ、鬼城山だの、金毛九尾だのと何を證據に、そんな悪口雑言を仰有るので
す。

くゝゝ、苦勞なしのヤクザ神では誠のお仕組は分りませぬぞや。

けゝゝ、氣もない間から世界の事を神、佛事、人民に説いてきかす變性男子の系
統の生宮で御座いますぞ。見當違ひをして下さるな。

こゝゝ、ここまで言うたら、お前も曲津か何か知らねど、チツとは合點がいつた
でせう。今後はこんな馬鹿な眞似はなさらぬが宜しいぞや」

池の中より、

「サ、逆理窟計りこねまはす、探女醜女の宣傳使、サアサア今日よりサツパ
リと了見を直し、月照彦神の命令を奉ずるか、さなくば其方の職名を剥奪せうか」
高姫「さゝゝ、何ぼなつと、勝手に喋つておきなされ。審神の随一と聞えたる此
高姫、指一本さへる者は、神々にも人民にも御座いませぬぞえ」

池の中より、

「シ、澁とい執着心のどこ迄も取れぬ、負けぬ氣の強い女だのう。何程言う
ても、其方の耳は死人も同様だ。叱つても【たら】しても、どうにも斯うにも仕
様のない厄介者だ」

高姫「しゝゝ、知りませぬワイナ。お前こそ【しぶ】といぢやないか。これ丈誠
一筋の神の生宮が分らぬやうなことで、エラソウに知つた顔をなさるな。百八十
一通りの神様の階級の中でも、第三番目の日の出神の生宮で御座いますぞ。お前

さまは百八十段以下の神様だから、こんな池の底に何時までもひつ込んで……へ
ン月照彦なんて、愛想が盡きますワイ。大方運が「つきてる」彦だろ。オ
ホ、、、

池の中より、

「ス、、、すつたもんだと理窟計りこねまはし、そこら中を飛ばはり、法螺をふ
きまはし、玉に現を抜かす、玉拔宣傳使。チツと胸に手を當てて考へたらどうだ
高姫「す、、、好かんたらしい。いい加減に水の中で庇こいたやうな事を云うて
おきなさい。こつちの方から愛想が月照彦だ。何程月がエロウても日の出神の日
に叶ふまい。日は表、月は裏ぢやぞえ。そんな事を云ふのなら、モツト外の没分
曉漢の人民に言つたが宜しい。酸いも甘いも透きとほつた程知りぬいた高姫に向
つて言ふのは、チツと天地が逆さまになつて居る様なものですよ」
常彦「コレコレ高姫さま、餘りぢやありませんか。神様に向つて何と云ふ御無禮
な事を仰有るのです。チツと心得なさい」
高姫「エーお前は常か、こんな所へ口嘴を出すとこぢやない。すつ込んで居なさ

い
』

池いけの中なかより、

『セ、、、先生せんせい顔を致いたして、何時いつもエラソウに申まをして居をるが、牛童丸うしどうまるの牛うしに乗のつて、常彦つねひこ、春彦はるひこがアリナの瀧たきへ先さきへ参まゐると申まをした時ときには、随分ずぶんせつなかつたであらうのう。せんぐりせんぐり屁理窟へりくつを竝ならべて、ようマア良心りやうしんに恥はづかしいとは思おもはぬか。雪隠蟲せつちんむしの高上たかあがり奴め』

高姫たかひめ 『セ、、、精出せいだして、何なんなつと仰有おつしやれ。そんな事聞こときいて居ある様な暇人ひまじんぢや御座ごいませぬワイ。三千世界さんぜんせかいの立替立直たてかへたてなほしの御神業ごしんげふに對たいし、千騎一騎せんきいつきの此場合このばあひ、チツト改心かいしんして、お前まへさまも池いけの底そこにカブリ付ついて居をらずに、私わたしの尻しりへついて、世せか界かいの爲ために活動くわつどうなさつたらどうだ。神かみ、佛事ぶつじ、人民じんみん、餓鬼がき、蟲むしケラまで助たすける神かみだぞえ』

池いけの中なかより、

『ソ、、、そんな事ことは其方そのほうに聞きかいても、よく分わかつて居ある。どこ迄までも改心かいしんを致いたさねば神かみは止やむを得えず、そぐり立たててツツボへ落おとしてやらうか』

高姫「そゝゝ、ソリヤ何を吐すのだ。うるさを恠へて相手になつて居れば、どこ迄も伸し上つて、粗相な事を申す厄雑神、大方池の中に居る神だから、ドン龜か、スツポンがめ、ズ蟹の劫経た奴だろ。其奴が神の眞似して、昔の月照彦さまの芝居をしてをるのだろ。グツグツ申すと此團子石を池の中へ放り込んでやらうか」

池の中より、

「タゝゝ、玉盗みの高姫、又玉を隠されて、玉騒ぎを致す魂抜女、其方の尋ねる玉は自轉倒島の中心地に隠してあるぞえ。其方が改心さへ致せば麻邇の玉の所在が知らして貰へるのだが、まだ中々其方へ教へてやる所へは行かぬワイ。早く魂を研いて改心を致せよ」

高姫「たゝゝ、叩くな叩くな類術を、高天原の神司、誰が何と云つても、日の出神の生宮に楯つかうと思つても駄目だから、お前こそ改心を致し、高姫の申す事を神妙に聞きなされ。玉の所在は自轉倒島の中心にあるなんて、……ヘン知らぬ者の半分も知らぬ癖に、何を云ふのだ。此んな池の中にすつ込んであるスツポン

のお化ばけに、そんな事ことが分わかつて堪たまるものかい□

池いけの中なかより、

「チ、、血筋ちすぢだ系統ひつぽうだと申まをして、それを鼻はなにかけ、威張おぼりちらすものだから、

お山やまの大將たいしやうおれ一人ひとり式しきだ。誰たれ一人ひとりとして其方そのほうの力ちからになる者ものは一人ひとりもあるまいがな。

ツ、、月照つきてる彦神ひこのかみが申まをす事こと、心こころの波なみを静しづめてよつく承うけたまはれ。其方そのほうの心こころの海うみの波なみさ

へ静しづまらば、眞如しんによの月つきは皎々かうかうとして、心こころの空そらに照てりわたり、玉たまの所在ありか位くらゐは一目ひとめに

見え透すき、天晴あつぱれ神界しんかいの御用ごようが出来るできやうになるのだ。

テ、、天狗てんぐの様やうに鼻許はなばかり高たかくして、天狗てんぐの鼻はなの高姫たかひめと皆みなの者ものが譏そしつてゐるが、

氣きがつかぬか。天地てんちの道理だうりをチツとは辨わかまへて見みよ。

ト、、トボケ面づらして遠とほい國くに迄まで玉搜たまさがしにウロツキ廻まはり、何時いつも失敗しつぱい計ばかり致いたして居を

るではないか□

高姫たかひめ「ちちち、近ちかくの者ものより遠とほくから分わかりてくる仕組しくみだ。燈臺とうだい下暗もとくらがりと云いふこ

とを、お前まへさまは井中せいちゆうの蛙かはず……ではない……スツポンだから、世間せけんが分わからぬので、

そんな時代じだい遅おくれのことを云いふのだよ。

つゝ、月竝式のそんな屁理窟を竝べたつて、聞くやうな者は廣い世界に一人もありませんぞえ。

てゝ、テンで物にならぬ天地顛倒のお前の世迷言。

とゝ、トンボリ返りを打たねばならぬことが出て來ますぞや。チト日の出神の御託宣を聞きなさい。途方もない譯の分らぬ、トツボケ神だな

池の中より、

「ナ、男子の系統を楯に取り、何でもかでも無理を押し通し、人に難題を吹かけ、何遍も何遍も人に生命を助けられて、反對に不足を申す難錯者。」

二、西東南北と驅まはり、憎まれ口の限りを盡し、二進も三進もゆかぬ様になつては改心を標榜し、又しても執着心の惡魔に縛られて、惡に逆轉し、

又、糠喜びばかり致して、一度も満足に思惑の立つた事はあるまいがな。

ネ、年が年中、日の出神の生宮を楯に取り、ねぢけ曲つた小理窟を云うて、人を困らす奸佞邪智の其方の行方。

ノ、野天狗に脅かされ、安眠も能うせず、テル街道をスタスタと痛い足を引

ずつてここまで出て来た口の大きい、肝の小さいデモ宣傳使。

ハ、、、早く改心致さぬと、誰も相手がなくなるぞよ。

ヒ、、、日の出神の生宮も、世界の人民がウンザリして居るぞよ。モウそんな黴の生えたコケおどしは使はぬが能からう。

フ、、、古臭った文句を百萬ダラ竝べて新しがつてゐる其方の心根が愛しいワイ。

へ、、、下手に魔誤付くと命がなくなるぞよ。

ホ、、、時鳥喉から血を吐きもつて、國治立命は其方の慢心を朝夕直したいと思

つて御苦勞を遊ばして御座るぞよ。

マ、、、曲津の容物となつて居乍ら、誠の日の出神ぢやと思つて見たり、時には

疑つて見たりし乍ら、どこ迄も日の出神でつつぱらうと致す横着者。

ミ、、、蚯蚓の這うた様な文字を列ねて、長たらしい日の出神の筆先だと申して、

紙食ひ蟲の墨泥棒をいたし、世界の經濟界を紊す身の程知らず奴。

ム、、、昔の昔の去る昔、まだも昔のその昔、ま一つ昔のまだ昔、大先祖の根本

の、誠一つの生粹の大和魂の御種、變性男子の系統、日の出神の生宮とは、能う

も云へたものぢやぞよ。

メ、、、冥土の鬼迄が愛想をつかし、腹を抱へて、其方の脱線振りを笑つてゐるぞよ。

モ、、、百千萬の身魂の借錢を、日日毎日積み重ね、地獄行きの用意許り致してをる其方、今の間に神の申すことを聞いて、心を洗ひ替へ立直さぬと、未來が恐ろしいぞよ。

ヤ、、、ヤツサモツサと朝から晩迄、騒ぎまはり、
イ、、、意久地を立通し、威張り散らし、己一了見で教主の意見も聞かず、可愛相に黒姫や鷹依姫、龍國別、テーリスタン、カーリンスに對し、國外に放逐致した横暴極まる其方の行方。

ユ、、、雪と墨と程違つてゐる瑞の御靈を、酢につけ味噌につけ悪く申し、自分の勢力を植付けようと致す横着者。

エ、、、エライ慢心を致したものぢやのう。

ヨ、、、世の中に吾程エライ者はない様に申して獨り燥いでも、世の中は割とは

廣いぞよ。お前の云ふやうな事は二十世紀の豆人間の没分曉漢の中には、一人や二人は一度や二度は聞いて呉れるであらうが、四五遍聞くと、誰も彼れも内兜をみすかし、愛想をつかして逃げて了うぞよ。

ラ、楽な道へ行きよると道がテンと行き當つて、後戻りを致さねばならぬ變性女子の行方を見よれ、人の苦勞で徳を取らうと致し、樂な方を行きよるから、あの通りだと、自分が後から潰しに廻つておいては、愉快相にふれ歩く、惡垂れ婆の宣傳使。

り、伶俐相な事ばかり申して居るが、テンで理窟にも何にも、お前の云ふ事はなつて居らぬぢやないか。

ル、留守の家へ剛情ばつて押入らうとし、生田の森に玉能姫に劍突をくわされて往生致したへボ宣傳使。

レ、連木で腹を切れと云ふやうな、脅し文句を竝べて信者を引込まうと致しても、そんな事を食ふやうな馬鹿者は此廣い世界に只の一人もありはせぬぞよ。

口、碌でもない眞似をするよりも、一時も早く聖地へ立歸り、改心致して神

妙に神の御用を致すがよからう。

ワ、、、分り切つたる團子理窟を竝べて、人を煙に巻く

中、、、イカサマ宣傳使。そこら中を

ウ、、、ウロつき廻つて、いつも糞をたれ

エ、、、枝の神と知らずに、根本の日の出神ぢやと誤解を致し

ヲ、、、おめも恐れも致さず、世界を股にかけて、法螺吹きまはる、ガラク夕宣

傳使、口の悪い神ぢやと申すであらうが、昔からスツポンに尻を抜かれた様だと

云ふ事があらうがな。其方が池の底のスツポンと認めた此方が、其方が悪事の一

切をスツポ抜いてやりたぞよ。ウ、、、ブルブルブル

高姫「な、、、何でも碌な奴ぢやないと思つて居つたら、とうとう鼈ぢやと白状

致しよつた。

に、、、二人の家來共、此高姫の眼力を見て感心したであらうなア。

ぬ、、、抜かつた面付では到底こんな時に出會したら、到底審神は出來ませぬぞ

え。

ね々々、熱心にお筆先を研究なさいと云ふのは、斯う云ふ時に間に合す爲ぢやぞえ。常公、春公、どうだえ、分つたかなア。

の々々、野天狗の生宮に仕られておつてはサツパリ駄目ですよ。

は々々、早く改心致して、高姫の云ふ通りにしなさいや。

ひ々々、日の出神の生宮に間違ひないぞえ。

ふ々々、不足があるなら、何ぼなつと仰有れ、どんな事でも説き聞かして、得心

さして上げる。

へ々々、返答は如何だえ、常公、春公。

ほ々々、呆け面して何うつそりして居るのだ。池の底のスツポン神がそれ程恐ろ

しいのかい。

ま々々、まさかの時の杖となり、力となるのは誠信仰の力ぢやぞえ。

み々々、身欲信心計り致して居ると、肝腎の時になりて、アフンと致さねばなら

ぬぞえ。

む々々、昔からの根本の因縁を知つた者は、此廣い世界に高姫丈よりないのだから

ら、今日けふからスツパリと心こころを立直たてなほして、絶對ぜつたいに服從ふくじゆうするのだよ。

め々々、めつたに神かみは嘘うそは申まをさぬぞえ。これが違ちがうたら、神かみは此世このよに居をらぬぞえ。

世よの變かはり目め、世界せかいの事ことを人民じんみんに説といてきかさねばならぬから、此高姫このたかひめは昔むかしからの

尊たふとい因縁いんねんがあつて筆先ふでさきを書かかせ、口くちで言いはせ、人民じんみんを改心かいしんさす役やくに、神かみがお使つかひ

遊あそばして御座ござるのだ。しつかり聞きいておきなされや。

め々々、目めから鼻はな迄までつきぬけるやうな、先さきの見みえすく神かみの生宮いきみや、メツ夕まぢに間違がひは

ありませぬぞえ。

も々々、盲碌神まうろくがみを誠まことの神かみと信しんじて盲從まうじゆうして居をると、取返とりかへしのならぬ事ことが出来できます

ぞえ。

や々々、大和魂やまとたましひの生粹きつすゐの身魂みたまの申まをす事ことに一事ひとことでも横槍よこやりを入いれて見みよれ、其場そのばで見み

せしめを致いたすとお筆ふでに現あらはれて居をるぞえ。

ぬ々々、幾いくら云いひ聞きかしても、生れ付うまの魂たまが悪わるいだから、云いひごたへがないけ

れど、云いふは云いはぬにいやまさる。お前まへが可愛相かあいさうだから、チツト計ばかり改心かいしんの爲ために

言いうておくぞえ。

ゆゝゝ、幽靈のやうにあちらへブラブラ、此方へブラブラと能う氣の變る、落つ
かぬ身魂では到底三千世界の御神業の一端に加へて貰ふ事は六かしいから、餘程
腹帶をしつかりしめなされ。

ゑゝゝ、えぐたらしい、高姫の言葉と思はずに、大慈大悲の大神様の救ひの言葉
だと有難く思つて戴きなさい。

よゝゝ、餘程お前は身魂が曇つて居るから、一寸やソツとに研きかけが致さぬの
で、此高姫も骨が折れるぞえ。

らゝゝ、樂の方へ行かうとお前はするから、牛童丸とやらに氣を引かれて、牛に
乗せられたのだよ。

りゝゝ、理窟云ふのは今日限り止めなされや。これ丈、神力を受けた能辨家の高
姫に對しては、何と云うても駄目だからなア。

るゝゝ、累卵の如く危ふくなつた此暗雲の世の中を、萬劫末代潰れぬ松の世に立
直さねばならぬ神界の御用だから、竝や大抵の艱難や苦勞では勤め上りませぬぞ

え。

れゝゝ、蓮華の花はあの汚い泥の中から、パツと一度に開いて、香ばしい香を現はすぢやないか。それに能く似た身魂は誰ぢやと思つて居なさる。

ろゝゝ、論より證據、池の中のスツポン神でもへこました、此高姫さまの事ぢやぞえ。

わゝゝ、吾身良かれの信心許り致して居ると、神の御きかんに叶はぬ事が出来て、ジリジリ舞を致して逆トンボリを打たねばならぬ事が出来るから、早く改心なされよ。

ゐゝゝ、威張りちらして、意地くね悪く、國依別から玉の所在をきかして貰ひ乍ら、いつ迄もイチャイチャと申して、日の出神に報告せぬ様ないけ好かない、奴根性は綺麗サツパリと立直して、これから素直に白状するのだぞえ。

うゝゝ、賣言葉に買言葉と云ふ様に、此高姫が一口お氣に入らぬ事を申せば、すぐに何だかんだと小理窟を申すが、これから其態度をスツクリと改めなされや。ゑゝゝ、偉相に云ふぢやなければ、誰が何と云つても、ヤツパリ日の出神の生宮に楯つく者は、此廣い世界に一人もなからうがな。

を、お前も、今日が善になるか、悪になるかの境目だ。善になりたければ、國依別から聞かして貰った玉の所在をチャツと言ひなされ。澁とう致すと萬劫末代帳面につけておきますぞえ。常彦はこれこれの事を致し、神に叛いた悪人だと、日の出神の筆先に末代書残しますぞや」

常彦「アハ、黙つて聞いて居れば、随分あなたも池の中の神の眞似が上手ですな。とうとう五十音を並べなされた。それ程の類桁を持つて居れば、世界中に阿呆らしうて、一人も楯突く者はありません。ウツフ、……のう春彦、お前も感心しただらうのう」

春彦「イヤもう、ズツトズツト感心しました。ホンに能うまはる口車だなア。……時に高姫さま、これ丈澤山のお玉がつみ上げてあるのに、目的の御寶はないやうですな」

高姫「ここはホンの露店だから、どうで良い物はこんな所に雨曬しにしてあるものか。キツと懸橋御殿の中に隠してあるにきまつてゐる。これから高姫が懸橋御殿へ行つて取調べて来るのだ」

池の中より、

「ブクブクブクブク」

と泡立ち上り、大きな聲で、

「アツハ、、、阿呆らしい、そんな物があつてたまるかい。

イヒ、、、何時までも何時までも執念深い婆アだなア。

ウフ、、、うるさい婆アだ。モウいゝ加減に此處を立退かぬか」

高姫「エー、やかましいワイナ。スツポンはスツポンらしくスツ込んでゐなさい。

オ、、お前達の嘴を容れる所ぢやありませんぞえ」

常彦「モシモシ高姫さま、いゝ加減にしておきなさらぬかいな。神様に怒られた

ら仕方がありませんで」

高姫「怒る勿れと云ふ神界の律法がチヤンとありますワイナ。ここで怒る様な神

なら、それこそ悪神ですよ」

常彦「さうすると、貴女はヤツパリ、悪神ですか」

高姫は目を釣り上げ面をふくらし、

高姫「コレ、常彦、何と云ふ事を仰有る。私がどこが悪神だ。モウ了見しませぬぞえ」

と胸倉をグツと搦む。

常彦「それだから悪神ぢやと云ふのですよ。直に怒るぢやありませんか」

高姫「私がどこに怒りました。チート體を急に動かしたり、聲を高うした丈の事

ぢやありませんか。これでもお前の目から見ると怒ったやうに見えますか」

春彦「アハ、ハ、ハ、」

高姫「コレ春彦、何が可笑しいのだ。チト心得なされ」

春彦「アハ、ハ、ハ、イヒ、ハ、ハ、ウフ、ハ、ハ、ハ、エハ、ハ、ハ、ハ、オホ、ハ、ハ、ハ、怒った

怒った。面白い面白い。恐ろしい御立腹だ」

高姫「コレ春彦、シツカリしなさらぬかいな。池の底のスツポン神の世迷言が傳

染しかけましたよ」

春彦「タ、ハ、ハ、ハ、ハ、高姫さまの世迷言が、チ、ハ、チツと計り傳染致しました、ウ

フ、ハ、ハ、ハ、」

斯かる所へ、國、玉の兩人は國玉依別の神司を守りつつ、此場に現はれた。

國玉依別「お前さまは何處の方か知りませぬが、此鏡の池へお参りになるのなら

ば、一應懸橋御殿に伺つた上の事にして下さらぬと、池の底の神様が、大變に御

立腹遊ばしては困りますから、チト心得て下されや」

高姫「お前は懸橋御殿とやらの神司だと、今仰有つたが、此池の底の神が、それ

程恐ろしいのかい。此奴アお前、偉相に月照彦神だなんて言つて居るが、池の底

の劫を経たスツポンのお化けだよ。いゝ加減に迷信しておきなさい。これから懸

橋御殿へ行つて、天地の道理を、昔の根本から説いて聞かして上げませうぞ。コ

レ御覽なさい。今此石を一つ池の底へぶち込んで見ませうか。キツとスツポンが

浮上つて來ますよ」

國玉依「何んと云ふ亂暴なことを、お前さまは宣傳使であり乍ら言ふのですか。

チツと御無禮ではありませぬか」

高姫「マア論より證據だ。御覽なさい」

と言ひ乍ら、堆く積みあげたる玉の形したる石を右手に握り、ドブんと計り投げ

込んだ。忽ち池の底より烈しき唸り聲、大地は大地震の如く震ひ出し、高姫は眞青な顔になり、ビリビリと慄ひ乍ら、叶はぬ時の神頼みと云った様に、一生懸命に両手を合せ、其場に平太張つて了つた。國王依別を始め、國、玉の從者竝に常彦、春彦は平氣の平左で、此音響を音樂を聞く様な心持で、愉快氣に両手を合し感謝し居たり。高姫は益々慄ひ出し、齒を喰ひ締め、齒の間から赤い血をにじり出し、慄ひ戦き居たりける。

（大正一一・八・一一 舊六・一九 松村眞澄録）

（昭和一〇・六・八 王仁校正）

第九章 俄狂言（八三一）

神が表に現はれて

善と惡とを立別ける

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

唯何事も人の世は

直日に見直し聞直し

過ちあれば宣り直す

三五教の神の道

神の恵の大八洲

彦命の又の御名

月照彦の神靈は

隨時隨所に現はれて

三五教の神司

信徒等は云ふも更

四方の民草悉く

恵の露にうるほひつ

心の雲を吹き拂ひ

晴れ渡りたる大空に

天の御柱つき固め

掃き浄めたる村肝の

心の土に惟神

國の御柱つき固め

千代に八千代に神人の

身魂を永遠に助けむと

現はれますぞ尊けれ。

皇大神の御恵みも

アリナの瀧の上流に

誠を映す鏡池

堅磐常磐の岩窟に

神の御言を蒙りて

夜なきヒルの神の國

テーナの里の酋長の

誠アルヤアルナ姫

桃上彦の昔より

三五教の御教を

今に傳へて奉じたる

尊き血筋の酋長は

家の寶と大切に

親の代より守り居る

黄金の玉を取出し

鏡の池に納めむと

數多の里人引率し

遠き山坂打涉り

心も清き白旗に

玉獻上と書き記し

珍の御輿を新造し

黄金の玉を納めつつ

縦笛横笛吹き鳴らし

天然自然の石の鉦

磬盤法螺貝鳴らし立て

谷を飛び越え川渡り

山鳥の尾のしだり尾の

長々しくもヒルの國

テルの國をば跋渉し

漸く此處に安着し

鷹依姫や龍國別の

神の司の目の前に

恭しくも捧げつつ

誠か嘘か知らね共

鷹依姫の神懸り

仰せの儘を畏みて

正直一途の酋長は

國玉依別、玉龍姫の

神の命と夫婦連

御名を賜はり千丈の

瀧の麓に御楔して

一日一夜を明かしつつ

アリナの瀧を後にして

鏡の池に往て見れば

豈圖らむや鷹依姫の

神の命を始めとし

三人の司は雲と消え

行方も白木の玉筥に

種々様々神の旨

書きしるしたる嬉しさに

アール、アルナの兩人は

草の庵を永久の

住家と定め池の邊に

朝な夕なに神言を

聲高らかに宣りつつも

四方の國より詣で来る

善男善女を三五の

誠の道に導きつ

神の御稜威も日に月に

輝き渡り身を容るる

所なき迄諸人の

姿埋まる谷の底すがたつづ たに そこ 是非なく茲に信徒はぜ ひ ここ まめひと

大峽小峽の木を伐りておほがひこがひ き 山と山とに架け渡しやま やま か わた

八尋の殿を築きあげやひろ との きつ 黄金の玉を奉齋しこがね たま ほうさい

國玉依別、玉龍姫のくにたまよりわけ たまたつひめ 神の司は勇み立ちかみ つかさ いさ た

懸橋御殿に現はれてかけはしごてん あら 教を開く折柄にをしへ ひら をりから

玉に心を奪られたるたま こころ と 三五教の高姫があななひけう たかひめ

自轉倒島を後にしておのころじま あと 太平洋を打渡りたいへいやう うちわた

テルの湊に安着しみなと あんちやく 常彦、春彦伴ひてつねひこ はるひこともな

金剛不壞の如意寶珠こんがうぶゑ によいほつしゆ 其他の玉の所在をばそのた たま ありか

アリナの瀧を目當としたき めあて 現はれ來り村肝のあら きた むらきも

心の善惡映すてふこころ よしあしうつ 鏡の池の前に立ちかがみ いけ まへ た

相も變らぬ減らず口あひ かは へ ぐち 傍若無人に罵ればばうじゃくぶじん ののし

數千年の沈黙をすうせんねん ちんもく 破つて鳴りだす池の面やぶ な いけ おも
ブクブクブクと泡だしてあわ ウンウンウンと唸り聲うな ごゑ

つきてるひこ 月照彦の神靈と 名乗らせ玉ひて五十韻

うづ 珍の言靈竝べつつ 高姫一同を訓戒し

みたま 身魂を救ひ助けむと 計り玉ひし尊さよ

じふしんつよ 自負心強き高姫は 持つて生れた能辨に

まけ 負ず劣らず五十韻 アオウエイよりワヲウエヅ

ただひとこと 只一言も洩らさずに 一々神に口答へ

つきてるひこ 月照彦とは詐りぞ ドン龜、鼈、蟹神と

あたま 頭ごなしにけなしつつ 言葉の銚を常彦や

はるひこ 春彦の上に相轉じ 生宮氣取りで諄々と

だつせん 脱線だらけの託宣を まくし立つれば池中の

こゑ 聲は益々高くなり 大地の震動恐ろしく

さす 流石頑固の高姫も 色青ざめて慥伏し

は 齒をかみしめて黒血をば 吐きつつ爰に平伏し

しだいしだい 次第々々に息の根は 細りて遂に玉の緒の

いのちの糸も細り行く。

あゝ惟神々々

善悪邪正を明かに

心に映す鏡池

底ひも知れぬ神界の

深き心ぞ尊とけれ

あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ。

懸橋御殿の神前に朝な夕なに奉仕する三五教の神司、テーナの里の酋長アール、

アルナの夫婦は、月照彦神より、國玉依別命、玉龍姫命と名を賜ひ、朝な夕なに

眞心を籠めて、教を傳へつつありしが、茲に三五教の高姫が鏡の池に現はれて、

堆く供へ奉れる諸々の玉を持歸らむとするを、國と玉との鏡の池及び狹依彦の宮

に仕へたる神主は驚いて、懸橋御殿に急報し、教主夫婦と諸共に此場に現はれ、

高姫一行に向ひ、來意を尋ぬる折しも、傲慢不遜の高姫は、鏡の池の神靈が威力

に打たれて打倒れ、殆ど人事不省となりければ、國、玉、龍、別などの神司と共

に、常彦、春彦を伴ひ、懸橋御殿に擔ぎ入れ、水よ薬よと介抱をなし、天津祝詞

を奏上し、一二三四五六七八九十の神示の反魂歌を奏上し、漸くにして高姫は正

氣に復り、稍安心の胸を撫で下ろしたり。

因に云ふ。アール、アルナの夫婦は其實、鷹依姫、龍國別の故意を以て、月照彦の神示と偽り、國王依別、玉龍姫の名を與へたれ共、やはり惟神の攝理に依つて神より斯の如く行はしめられたるものにして、決して鷹依姫、龍國別の惡戯にあらず、全く神意に依りて、兩人は夫婦に神名を與へた事と、神界より見れば確かになつて居るのである。

高姫はキヨロキヨロと四邊を見まはし、木の香かをれる新しき殿内に吾身のある事を訝かり、首を切りに振り乍ら、元來の負惜み強き性質とて……ここは何處ぞ……と問ひ尋ぬる事を恥の様に思ひ、荐りに考へ込んで居る。常彦、春彦は高姫の左右に寄り添ひ、

「モシ高姫さま、お氣が付きましたか。餘り貴女は自我を立通しなざるものだから、とうとう池の神様に戒められ、人事不省に陥り、殆ど息の根も絶えむとする所、御親切にも、此御殿の主人、國王依別様、玉龍姫様の御介抱と御祈念に依り、生命を助けてお貰ひなされたのですから、サア早く神様と、お二人に御禮を申し

なさいませ」

高姫「妾がいつ……人事不省などと、汚ららしい、死にかけました。そんな屁泥
い高姫ぢや御座いませぬぞえ。お前は神界の事が分らぬから、日の出神の生宮が、
池の底の神の正體を審神する爲、肉の宮を一寸立出で、幽界探險に往て居つたの
ですよ。それだから、心の盲と云ふのですよ。へん……阿呆らしい。神の生宮は
萬劫末代生き通し、アタ汚ららしい、人事不省に陥つたなどと、お前等と同じよ
うに人間扱ひをして貰ふと、チツと困りますぞえ。コレコレお前は國依別、玉治
別、龍國別と云つたぢやないか。何時の間にやらこんな所へ魁してやつて来て、
世間をごまかさうと思つて、國と玉とが一つになつて國玉依別だとか、玉龍姫だ
のと、そんなカラクリをしたつて駄目です。キツとそんな名前がついてる以上は、
此館に國、玉、龍の宣傳使が潜んでるに違ない。又言依別も隠れて居るだらう。
モウ斯うなつたら百年目だ。サア女の一心岩でも通す。金剛不壞の如意寶珠其他
の神寶を檢めて、自轉倒島の聖地へ持つて歸らねばおきませぬぞえ。コレコレ國
玉依別とやら、お前は國や玉や龍の、蔭から絲を引く操り人形だらう。そんなこ

たア、チヤンと、此高姫の黒い眼で睨んだら一分一厘間違ひはありませぬぞや。

ここに三五教の神館を、お前さま等が寄つて集つて建てたやうに思つて居るが、
國治立命の御指圖で、日の出神が片腕となり、龍宮さまの御手傳ひで出來上つた
のですよ。日の出神の生宮だからチヤンと分つてる。ここの神司はそれが分つて
居ますかな」

常彦「ナント徹底的にどしぶとい婆だなア、これ丈お世話になつておき乍らヨ一
モ ヨ一モ、こんな憎たれ口が叩けたものだ。喃春彦、穴でもあつたらモグリ込

みたいやうな氣がするぢやないか」

春彦「開いた口がすぼまりませぬワイ」

と云つた限り、餘りの事に呆れ果ててポカンとしてゐる。

常彦「イヤもうし、國玉依別御夫婦様、かくの通りの没分曉漢で御座いますから、
自轉倒島の聖地に於ても、皆の者が腫物にさはるやうに取扱つて居るので御座い
ます。吾々だつてこんな腫物に従いて來たい事は御座いませぬが、氣違を一人お
つ放しておきますと、どんな事を致すやら分りませぬ。虎を野に放つやうな危険

で御座いますから、吾々兩人は世界の爲に犠牲となつて、精神病患者看護人の積りで、はるばるとやつて参りました。何れ癪狂院代物ですから、必ず必ず御心にさえて下さいますな。何卒神直日大直日に見直し聞直し下さいまして、高姫の無禮をお赦し下さいませ」

と氣の毒さうに述べ立てる。國玉依別は、

「實にお氣の毒ですなア。決して決して氣にはかけて居りませぬ。あなた方こそ、本當に御苦勞お察し申します」

高姫「コレ常、天教山より現れませる日の出神の生宮を、天教山代物とは何だい。餘り無禮ぢやないか。宣り直しなさい」

常彦「癪狂院に現れませる、鼻高姫命か、天教山に現はれませる木の花姫神のお使、日の出神の生宮様か、但は二世か三代か、男か女か、凡夫の吾々にはテンと判断が付きませぬワイ。アハ、ハ、ハ、」

高姫「ア、さうだらうさうだらう。テンと判断がつかぬと云ふのは道理ぢや。偽らざるお前の告白だ。此日の出神の正體が、お前達に分るやうな事なら、此高姫

も萬里の波を越えて、こんな所迄來は致しませぬわいな。お前のやうな没分曉漢が世界にウヨウヨして居るから、實地の行ひを見せて改心させる爲に神の御用で來て居るのだぞえ。サアこれから肝腎要の言依別の盗み出した寶玉を受取つて歸りませう。お前もここ迄從いて來たのだから、玉のお供位はさしてあげるぞえ。有難く思ひなさい。……コレコレ茲の宮番夫婦、早く玉を渡す手續を一刻も早くしなされや。グツグツしてゐなされると、神界の規則に照し、根の國底の國の成敗に會はさねばなりませんぞえ」

國玉依別は藪から棒の高姫の言葉に何が何やら合點が行かず、

「へー」

と云つたきり、穴のあく程、高姫の顔を打ち見守つて居る。國、玉、龍、別、依の幹部を始め、常彦、春彦迄が高姫の顔をジツと打眺め舌を巻き居たりける。

（大正一一・八・一二 舊六・二〇 松村眞澄録）

（昭和一〇・六・八 王仁校正）

心しんするのが、お主ぬしのお得とく策さくだ。サア、早くはや玉番たまばんさま、素直すなほにお出だしなされ。素直すなほにさへすれば、どう云いふ深いふか罪科つみとがでも、大慈だいじ大悲だいひの神様かみさまがお赦ゆるし下くださいますぞや
國玉くにたま依別よりわけ「これはこれは存ぞんじもよらぬ迷惑めいわくで御座ござる。私わたくしはヒルの國くにテーナの里さとの酋長しゅうちやうアール、アルナと云いふ夫婦ふうふ者もので御座ございまして、祖先そせん代々だいでい三あな五な教ひけうの教をしへを信しんじ、
朝夕あさゆふに神様かみさまのお給仕きふじを致いたして居をる者もので御座ございました。所ところが鏡かがみの池いけに月照彦つきてるひこの神かみさま
が再ふたび現あらはれ玉たまうて、玉たまを獻けんじたき者ものは、一日いちにちも早はやく持來もちきたれよと御宣示ごせんじあらせら
れると聞きき、先祖せんぞ代々だいでいより大たい切せつに保ほ護ご致いたして居をつた黄金こがねの玉たまを獻けんじやう上じやうせむと、鏡かがみの
池いけへ來きて見みれば、龍國たつくに別わけと云いふ審神者さにはさま様さまや、テーリスタン、カーリンスと云いふお
側付そばつき、それに又また月照彦つきてるひこの神かみさまは勿體もつたいない、お婆ばアさまの姿すがたとなり、現あらはれ玉たまうて、
吾々われわれ夫婦ふうふに尊たふとき名なを賜たまはり、それより朝夕あさゆふ神かみのお道みちを宣傳せんでん致いたし、遂つひには信者しんじやの眞まこ
心こころに依よつて、かような立派りっぱな御殿ごてん迄まで出で來あが上り、吾々われわれは朝夕あさゆふに眞心まごころをこめて神前しんぜんに
お仕つかへいたしてをる者もので御座ございます。玉たまと申もうせば鏡かがみの池いけの傍かたはらに積つみ重かさねてあるも
の許ばかり、そして吾々われわれの獻たてまつつた黄金こがねの玉たまは龍國たつくに別わけ様さまがお持歸もちかへりになり、其代そのりに瑪めな
瑙うの玉たまを御神體ごしんたいとし、此この御神ごしん殿でんに祀まつつて御座ございます。金剛こんがう不壞ふゑの如意寶珠にょいぼつしゆとか麻ま

邇にの玉たまとかは、此處こゝに祭まつつてをりませぬ。又私共またわたくしどもは拜をがんだこともありませぬ。もし其玉そのたまをお捜さがしならば、外ほかをお捜さがし下さい。ここには決けつして決けつして左様さやうな玉たまは一個こもありませぬ」

高姫たかひめ「何なに、龍國たつくにわけ別わけが黄金こがねの玉たまを持もつて歸かへつたとは、ソラ何時いつのこつて御座ございますか。そして、テー、カー、の兩人りやうにんが従ついて來きて居をりましたかなア。お前まへの目めに婆ばばアの生神いきがみと見みえたのは、そりやキツと龍國たつくにわけ別わけの母親ははおやで鷹依たかよりひめ姫ひめと云いふ身魂みたまの大變たいへんに悪わるい婆ばばですよ。ヨウお前まへも騙だまされたものだなア。オツホ、々、々、」

國玉くにたま依別よりわけ「鰯いわしの頭あたまも信心しんじんからと申まをしまして、何程なにほどだまされても、神德しんとくさへ立たてば結構けつこうで御座ございます。私わたくしの様な者ものは一通ひととほりや二通ふたとほりで神界しんかいへ入いれて貰もらふことは出来できませぬから、いろいろと神様かみさまが人ひとの手てをかり、口くちをかつて導みちびいて下さくだつたのだと、朝あさ夕ゆふ神様かみさまに感謝かんしゃいたしてをります。併しかし乍ながら鷹依たかよりひめ姫ひめさまは悪人あくにんかは知しりませぬが、こう申まをしてはすみませぬが、お前まへさまに比くらぶれば、幾層いくそう倍ばいと知しれぬ人格じんかくのたかいお婆ばアさまでした。あの人ひとならば、私わたくしは月照彦つきてるひこのかみ神かみだと仰有おつしやつても誰たれ一人ひとり疑うたがふ者ものはありませぬ。お前まへさまは何程なにほど日の出ひのけ神かみの生宮いきみやだと自家じか廣告くわうこくをなさつても、私わたくしのやう

な素人の目より見れば、如何しても金毛九尾の容物とより見えませぬ。すべて縁は合縁奇縁と申しまして、蟲の好く方と蟲の好かぬものと御座います。ア

ハ、ハ、ハ、

と圓滑な辭令を以て、高姫を罵倒して居る。

高姫「ヘン、あなたのお目は偉いものですな。悪魔は光明を忌み、悪人は善人を

嫌ふとやら、世の中はようしたものだ。……お前嫌でも又好く人が、なけりや私

の身が立たため、捨てる神があれば、拾ふ神もある。お氣に入らねばモウ日の出神

は居つてやりませぬぞえ」

國玉「ハイどうぞお願ひで御座います。一時も早く居つてやらぬ様になさつて下

さいませ。御願致します」

高姫「ナニ、お前は變性男子の系統の此高姫を追ひ出さうと云ふのかい。此懸橋

御殿は三五教の神様の物、三五教の大神様は國治立命様、變性男子と現はれて、

世界の御守護を遊ばす、其系統の高姫を追ひ出さうとは、ソリヤ又、何と云ふ心

得違だ。左様な了見では三五教の取次は許すことは出来ませぬ。今日限り系統の

ても、信用を落す譯だと、玉龍姫を伴ひ、

國玉「高姫様、暫く失禮を致します。どうぞユルリと遊ばしませ。御思案が付き

ましたら、一時も早く御退場を御願致します。……常彦さま、春彦さま、あなた

も大抵ぢや御座いますまいが、どうぞそこは宜しき様に御取計らひを願ひます」

と云ひ捨て、逃げる様に、玉龍姫の手を取り、睦じげに別館に立つて行く。

高姫は少しく目の上の瘤の様に迷惑がつてゐた夫婦が別館に姿をかくしたのに、

ヤツと胸を撫でおろし、ソロソロ言葉の連發を始めかけた。

高姫「コレコレ懸橋御殿に御奉公致す皆さま達、是れから誠生粹の大和魂の因縁

を説いて聞かしますから、私の云ふ事が分つたら、此館に隠してある金剛不壞の

如意寶珠を始め、麻邇の寶の所在を綺麗サツパリと、素直に白状しなされや。……

アレ御覽なさい、宮番夫婦は日の出神の御威勢に恐れて、別館へココソコソと逃

げてゐただぢやありませんか」

常彦「モシ高姫さま、自惚するにも程がありますよ。御夫婦の方々は貴女の御威

勢に恐れて逃げられたのぢやありませんか。餘り脱線だらけの事を、ベラベラと際

限もなく、お前さまがまくし立てるので、うるさがつて逃げて行かしたので
すよ。慢心すると嫌はれて居つても、恐れて逃げられた様に見えますかいな。い
かに善意に解する教だと云つても、高姫さまの善意は一寸趣が違ふ。……コレコ
レ皆様方、必ず氣にさへて下さいますな、御存じの通の代物ですから……」

高姫「コレ常、ソラ何を言ふのだ。人民のゴテゴテ云ふ幕ぢやありませんぞや。

世界のことは隅から隅まで、イロハ四十八文字で解決のつく三五教の教ですよ。

此高姫は、人民共の作つた學は知りませぬが、正真正銘の神直々の智慧が、無盡

藏に湧いてくるのだから、皆さま、心を清め身を謹んでお聞きなさい。

いゝゝ一番此世の中で尊い寶は誠と云ふ一つの大和魂ですよ。それさへあれば三

千世界の物事はキタリキタリと何の躊躇もなく、成就致しますぞや」

國「いゝゝ一番尊いお寶が大和魂なら、なぜお前さまは無形の魂を尊重せずに、

高砂島三界まで金剛不壞の如意寶珠を捜しに來たのだい。ヤツパリ形ある寶の方

がお前さまにはお氣に入ると見えますな」

高姫「ろゝゝ碌でもない理窟を云ふものでない。金剛不壞の如意寶珠は、神様の

御寶、大和魂は人間の寶だよ。神と人とを一緒にしてはなりませんぞえ」

國「ろゝゝ論より證據、お前さまは何時も神人合一と云ふことを稱へてゐるぢや

ありませんか。神人合一は神さまと人と一緒になつた事ぢやありませんか」

高姫「はゝゝはしたない人間の知恵を以て、神の申す事をゴテゴテと云ふものぢ

やありませんか。花は櫻木人は武士と云つて、潔うするものだ。女の腐つた様

に何をツベコベと小理窟を云ひなさる。何とか、彼とか云つて、如意の寶珠を渡

そまいとしても駄目ですよ」

國「はゝゝゝ腹がよれるワイ。これ丈脱線されては、安心して汽車に乗る事も

出来ませぬワイ」

高姫「にゝゝ日本の神の道さへ歩いてをれば脱線する氣遣ひはありません。……

走り行く汽車の足許眺むれば、ヤハリ「にほん」の道を行くなり。……日本の道

を大切に守り、外國の教をほかしさへすれば脱線所が一瀉千里の勢で希望の都へ

達しますぞや。外國とは外れた國と書きませうがな。脱線は即ち外れるのだ。分

つたかなア」

國「に、二本の道か四本の道か知らぬが、お前さまの仰有る事は、どうも四本足が云うとる様に聞えますぞや。四本足は所謂四つ足だ。ゴテゴテと「六」でない事を「七」むつかしく、「八」かましう、「九」ちから出任せにこきちらし、「十」りとめもなく、「百」「千」「萬」遍喋り立てる、百舌鳥か雲雀の親方が此頃一匹高砂島へ飛んで来たと言ふ事だ。百舌鳥かと思へば小鳥を取つて食ふ目玉の鋭い鷹ぢやさうな。ワツハ、」

高姫「ほ、吐くな吐くな、深遠無量の神の御經綸がお前たちに分るものか。不言實行だ、ゴテゴテ云はずに、ホ、寶玉を早く渡して、素直に改心なさるが第一の得策ぢやぞえ。お前はここの總取締ぢやないか。お前から改心せねば皆の者が助かりませぬぞや。一人さへ改心したたら外の者は皆一度に改心致す仕組だから、人間界の理窟はやめて、神の生宮の言ふ事に絶対服従しなさい。ゴテゴテと理窟の云ひたい間は、まだ御神徳が充實してゐないのだよ」

國「ほ、放つといて下され、私には立派な國王依別様と云ふお師匠さまが御座います。別にお前さまに下らぬ事を教へて貰ふ必要もなければ、假令寶玉が有つ

たとしても、お前さまに渡す義務がありません。オツホ、

高姫「へ、屁理窟許り、能く垂れる男ぢやな。流石は國依別の仕込み丈あつて、

偉いものだワイ」

國「へ、臍が茶を沸かしますワイ。如何に私の名が國ぢやと云つて、見た事も

ない國依別さまとやらの仕込みぢやなどは、能くも當推量したものだ。私の國

は國依別さまの國ぢやありません。此世の御先祖の國治立命様の國で御座いま

すワイナ。へん……ちつと濟みませぬが、秀妻國と常世國と程國が違ふのだから、

餘り人の事まで「クニ」病んで下さいますな。餘り「クニ」クニ思うと壽命がち

ぢまりますぞえ。早く「クニ」替へをせにやならぬ事がないように「クニ」クニ

も氣をつけておきますぞよ」

高姫「と、とへうもない事を言ひなさるな。國治立命様の國ぢやなんて、慢心

するにも程がある。慢心は大怪我の元ぢやぞえ」

國「と、と途方途徹もない駄法螺を吹く、唐變木、トチ呆けの尻切蜻蛉の捉へ所

のない、團子理窟を囀る、常世姫の身魂の性來を受けた罪人の身魂の宿つた肉の

宮を日の出神の生宮ぢやなんて、とつけもない法螺を吹いてをると、今に化が現はれて、栃麵棒を振り、途方に暮て吠面かわかねばならぬことが出来致しますぞや。

ちゝちつと胸を手を當て考へて御覽。

りゝ理窟許り竝べたつて、神徳のない者に誰が往生するものか。

ぬゝ糠に釘、豆腐に鋸だ。

るゝゝるとして千萬言を連らねても誰も聞き手がありませんぞや。

をゝゝをどし文句を竝べ立てて、我意を立通し、玉を吐き出さそうとしても、お

前さま等の口車に乗る馬鹿はありませぬワイ

高「わゝゝ吾よしの守護神奴、人の言靈を横取して、先言うと云ふ事があるもの

か。今言うたチリ又ルヲ如何して呉れるのだ。譯が分らぬと云うても程があるぢ

やないか、此高姫が言うた後で力一杯、辻褃の合はぬ言譯を致すのならまだしも

だが、人より先へ先へ行かうと致す、其我慢心が所謂四つ足根性ぢやぞえ。本當

に性來の悪い男だなア

國くに「わゝゝ悪わるかるが善よかるが自由じゆうの權けん、放ほつといて下くだされ。

かゝゝ構立かまへだてにはして下くださるなや。

よゝゝ善よからうが悪わるかるが、誠まことの神かみさま様が裁さばいて下くださるぞや。

たゝゝ高たかひめ姫ひめの干渉かんせうする問題もんだいぢやありませんぞ。

れゝゝ禮儀れいぎも作法さほふも知らしずに

そゝゝそそつかしい、人ひとの館やかたへ這入はいつて來きて、挨拶あいさつも碌ろくに致いたさず

つゝゝ月照彦神つきてるひのかみさま様に戒いましめをくひ乍ながら

ねゝゝねぢけ曲まがつた魂たましひは何時いつまでも直なほらず

なゝゝ何なにも分わからぬ癖くせに、三千世界さんぜんせかいの事ことはどんな事ことでも知しつてをるとか、知しつて居を

らぬとか、駄だ法ぼら螺らを吹ふき、

らゝゝ亂脈らんみやくぶり振ぶりと云いつたら、到底たうてい御話おはなしのしかけが出來できませぬ。

むゝゝ六むつかしい面つらをして、人ひとが聞きいても

うゝゝウンザリする様やうな、身勝手みがってな事こと許ばかり竝ならべ立たて

ゐゝゝ意地いぢの悪わるい事こと許ばかりまくし立たて

のゝゝ野天狗、野狐、野狸の囀る様な脱線理窟を喋々と辨じ

おゝゝ恐ろしい執着心を極端に發揮し

くゝゝ國さまに向つて玉の所在を知らせと何程云つても、駄目ですよ。そんな馬鹿な事は

やゝゝ止めておきませうかい。八岐の大蛇の金毛九尾の狐の靈の憑つた、どこや

らのお方には、假令天地がかへる共、此玉許りは渡す事は罷りなりませぬワイ。

まゝゝ誠一つの心の持様で、手に入らぬ玉も手に入る事があり、罷り誠をふみ外

せば、目の前にある玉でも握れぬやうな事が出てくるし、

けゝゝ毛筋の横巾でも、此國さまの御機嫌を損ねたら、立派な玉を上げたいと思

うても、中途でひっこめて了ひますぞ。

ふゝゝふくれ面して威張つてをる間は、高姫さまも駄目ですよ。

こゝゝ是丈道理を解き聞かしても分らぬやうな御方なら、トツトと歸つて下され。

えゝゝ枝の神や末の神の分際として、此御殿に納まつてをる御神寶を、持歸らう

とは身の程知らずと云ふものだ。

て、テンから物にならぬ企みをするより

あ、アツサリと思ひ切つて

さ、サツサと歸つて下さい。

き、気分が悪なつて来た。アハ、ハ、ハ、イヒ、ハ、ハ、ハ、ウフ、ハ、ハ、ハ、エヘ、ハ、ハ、ハ、

オホ、ハ、ハ、ハ

と體を面白くゆすつて、キヨくつて見せる。

高姫「ゆ、言はしておけばベラベラと際限もなく、こけ徳利のよに、口から出

任せに、泥水を吐く醜魂だな。

め、盲の垣覗きと云ふ事はお前の事だ。盲萬人目明一人の世の中だから、日の

出神の様な目明は又と二人、三千世界にないのだから、無理はないけれど、盲な

ら盲らしうして居なさい。盲蛇におぢずと云うて、恐い事知らぬ奴になつたら、

仕方のないものだ。お前さまの様な盲に、手引せられる盲信者こそ氣の毒なもの

だ。今の取次盲聾許り、其又盲が暗雲で、世界の盲の手を引いて、盲めつぽに地

獄の暗へおちて行く……と神様のお筆に出てをりますぞえ。チツとしつかり目を

醒ましなさい。

みゝゝ見えもせぬ節穴の様な團栗目をキヨ口つかしても、足許の溝が分りますまいがな。

しゝゝしぶとい【どうくづ】の身魂程、改心させてやりたいと思つて大慈大悲の神様が御心配をなさる、其お心根がおいとしいわいの、勿體ないわいの。オンオンオン

國「ゑゝゝゑらう御心配遊ばして下さいますな。併し乍ら、泣くの文は止めて下さいませ。

ひゝゝ日の出神の生宮ともあらうものが、餘り見つともよくありませぬぞ。

もゝゝ諸々の邪念を去つて、今日限り此館に納めてある、結構な御神寶に對する執着心を綺麗サツパリと脱却なさいませ。

せゝゝ雪隠で饅頭食うたよな顔をして、人の苦勞で得をとり、自分が發見したやうな顔して聖地へ歸り、威張りちらさうと思つても駄目ですよ。

すゝゝ澄み渡る月照彦神の申す事、能く耳へ入れて、高砂島を一日も早く立去り、

自轉倒島の中心地、冠島沓島に麻邇の寶玉隠しあれば、其方は、鷹依姫、龍國別等と共に其玉を掘出し、錦の宮に持歸り、言依別命の留守番を神妙に致すがよからう。ウンウンウン」

ドスンと飛び上り……

「あゝ何だか随分、喧しう囀つた様ですなア。皆さま、私はどんな事を云ひましたな。覚えて居つて下さいませやらうねエ」

高姫「コレ、國さまとやら、人を盲にしなされるのか。本當の神様が神様でないか、世界一の此審神者が見届けたら間違ひありませんぞえ。そんな嘘の神懸をして、國依別が生田の森で私を騙さうとしたやうな、古い手は食ひませぬぞえ。

ホ、ホ、ホ、若し誰が何と云つても是から家探しして、玉の所在を捜すのだ。……サア常、春、ここが千騎一騎の性念場だ」

と云ひ乍ら、つかつかと神殿目がけて走せ上りけり。

(大正一一・八・一二 舊六・二〇 松村眞澄録)

第三篇 神鬼一轉

第一章 日出姫（八三三）

高姫は矢庭に神前に驅け上り、扉に手をかけた。忽ち頭の光つた脇立の狭依彦神、煙の如く朦朧と現はれ、高姫の首筋をグツと握つて壇上より、蛇を大地に投げつけた様に、ポイと撥ね飛ばした。高姫は暫く蟲の息にてそこに打倒れ、何事か切りに嚙言を言つてゐる。國、玉は驚いて「水ぢや水ぢや」と立騒ぐを、常彦は制し止め、

「モシモシ皆さま、構立をせず、少時放つといて下さいませ。御存じの通御神前の脇に朦朧として御神體が現はれ、こらしめの爲に高姫を取つて投げられたのですから、餘り高姫を構うと、又へらず口を叩き慢心を致しますから、十分改心する所迄放つといてやつて下さいませ。高姫の身の爲ですから……一人前の誠の

宣傳使にしてやらうと思召さば、十分に苦ましておく方が高姫に對する慈悲になります」

と眞心から語り出したるを、一同は常彦の言に従ひ、高姫が自然正氣に復る迄、そこに放任しておき、各自別間に入つて、神徳を戴き、晝飯などを喫し、悠々として世間話に耽つてゐた。暫くすると神殿に於て、高姫の金切聲が聞えて來た。常彦、春彦、國、玉等一同は此聲に驚いて、神殿に駆けつけ見れば、高姫は何とも知れぬ大きな男に、毬つく様に、放り上げられたり、おとされたり、なぶりものに會はされ、悲鳴を上げゐたりける。

常彦、春彦の姿を見るより、大の男は煙の如くに消えて了つた。此大の男と見えしは、鏡の池に現はれました月照彦命の出現であつたとの事なり。

高姫は眞青な顔を乍ら、懸橋の御殿を表に駆け出し、一生懸命にアリナの山を指して登つて行く。常彦、春彦は見失うては大變と、高姫の後を一生懸命に追つかけて行く。國玉依別命の命令によつて、龍、玉の兩人は常彦、春彦の後より、
「オーイ オーイ」と呼ばはり乍ら、アリナの峰を駆け登り行く。

高姫は漸くにして、鷹依姫一行が野宿したる白楊樹の傍まで駆け着いた。何と
はなしに身體非常に重たくなり、疲労を感じ、グタリと横になつて、大蜥蜴の澤
山に爬行して居る草原に横たはり、他愛もなく寝て了つた。
夜半に目を醒まし、そこらあたりをキヨロキヨロと見廻し、
高姫「ハテナア、ここは何處だつたいなア。鏡の池の懸橋御殿の中だと思つてゐ
たのに、そこら中が萱野原、人の子一匹居りはせぬ。アハー、やつぱり鏡の池の
スツポン奴、此野原を、あんな立派な御殿と見せて、騙しよつたのだな。悪神と
云ふものは油断のならぬものだ。禿頭の神が出て来て、取つて放かしたり、大
な男が現はれて、此高姫を毬つくやうにさいなめよつたと思つたが、ヤツパリ騙
されて居たのかなア。昔常世會議の時に、八百八十八柱の立派な國魂神が、泥
田の中で狐に魅まれ、末代の恥をかいたと云ふことだが、ヤツパリ此高砂島も常
世の國の陸つづきだから、居ると見えるワイ。ア、ドレドレ眉毛に唾でも付けて、
しつかり致しませう。……時に常や春の周章者は、どこへ沈没しよつたのか、テ
ンで影も形も見えなくなつて了つた」

と獨語を云つて居る。

俄に大粒の雨パラパラと降り出して来た。満天黒雲に包まれ、次第々々に足許さへ見えなくなつて来た。獅子、虎、狼の吼えたける様な怪しき唸り聲は、暴風の如く耳をつんざく。寂寥刻々に加はり、流石の高姫も茫茫として際限もなき原野の中に只一人投げ出され、足許さへ見えなくなり、心細さに目を塞ぎ、腕を組み、大地に胡坐をかき思案に暮れて居る。

パツと雷光の如き光が現はれたと思ふ途端に、雲突く計りの白髪はくはつの怪物くわいぶつ、耳迄引裂けた口から、血をタラタラと垂らし乍ら、高姫の前にのそりのそりと浮いた様に進み來り、

怪物「アハ、人肉じんにくの温あたたかいのが一度食つて見たいと、常つねがね希望きぼうして居たが、ア、時節じせつは待たねばならぬものだ。少し古ふるうて皺しわがより、肉にくが固かたくなり、骨ほねも餘り軟やわらかくないが、これでもひだるい時にまづい物なし、辛抱しんぱうして食つてやらうかな。イヒ、ウフ、エハ、オホ、甘いぞ甘いぞ」
とニコニコし乍ら、高姫の髻たぶさをグツと握にぎつた。高姫は猫ねこに掴つかまつた鼠ねずみの如やうに、

五體萎縮し、ビリビリと震ひ戦いて居る。此時何處ともなく、嚙曉たる音樂の音が聞えて來た。此聲の耳に入ると共に、高姫は俄に心晴れ晴れしくなり、強力な味方を得たやうな氣分に充された。怪物は高姫の髻を握つた手をパツと放した。目をあけて見れば、容色花の如く、水のしたたる様な黒髪を背後に垂らし、梅の花を片手に持ち、片手に白扇を擴げて持つた女神、嚴然として現はれ、言葉靜かに宣り玉ふやう、

女神「其方は高姫であらうがな。今迄我情我欲の雲に包まれ、少しも反省の念なく、日の出神の生宮を標榜し、隨分大神の御神業に對し妨害を加へ來りし事を悟つて居るか。其方は力一杯神界の御用を努めた積りで、極力神界の妨害を致し、神の依さしの教主言依別命に對し、惡言暴語を以て向ひ奉り、黒姫を頤使して今迄聖地を混亂致した其方の罪、山よりも高く、海よりも深し。さり乍ら、汝今茲にて悔い改めなば、今一度其罪を赦し、身魂研きし上、神界の御用に使うてやらう。高姫、返答は如何であるか」

と宣らせ玉ひ、高姫の顔を熟視し給ふ。高姫は女神のどこともなく身體より發す

る光輝に打たれ、

「ハイハイ、今日限り改心致します。どうぞ今迄の罪はお赦し下さいませ。如何なる事でも、神様の仰せとあらば承まはりませう」

女神「然らば汝に申し付ける事がある。此白楊樹の空に、錦の袋止まりあり、其中には、テーナの里の酋長が鏡の池に獻りたる黄金の寶玉あり。今これを汝の手に相渡す。汝が手より明朝茲に現はれ来る懸橋御殿の神司、玉、龍の兩人に相渡し、持歸らしめよ。金色燦爛たる此玉を眺めて、再び執着心を起す如きことあらば、最早汝は神界の御用には立つ可らず。能く餘が言葉を胸に疊みて忘るるな」

高姫「ハイ、決して決して決して忘れは致しませぬ。今日限り、玉に對する執着心は放棄致します」

女神は白楊樹に向ひ、

「來れ來れ」

と招き玉へば、不思議や、白楊樹は暗の中に輪廓明く現はれ、錦の袋はフワリフワリと女神の前に降り來たりぬ。

女神めがみ「高姫たかひめ、此錦このにしきの袋ふくろの中なかには黄金こがねの如意寶珠にょいほうしゆが包つつまれあり。披見ひけんを許ゆるす。早はやく
撿あらため見みよ」

高姫たかひめは、

「ハイ」

と云いひ乍ながら、袋ふくろの紐ひもを解とき、中なかを覗のぞき見みてハツと計ばかり、其光そのひかりに打うたれ居ゐる。

女神めがみ「どうぞや、其玉そのたまは欲ほしくはないか」

高姫たかひめ「イエもう決けつして、何程なにほど立派りつぱな玉たまでも、形かたちある寶たからには少すこしの未練みれんも御座ございま

せぬ。無形むけいの心こころの玉たまこそ、最もつとも大切たいせつだと御神徳おみかたげをとらして頂いたきました。決けつして決けつ

して今こんご後は、玉たまに對たいして、心こころを惱なやます様やうなことは致いたしませぬ」

女神めがみ「又また後あと戻もどりを致いたさぬ様やうに氣きをつけて置おく。就ついては、汝なんぢこれより常彦つねひこ、春彦はるひこ

と共に此原野このげんやを東ひがしへ涉わたり、種々いろ雑多ざつたの艱難かんなんを嘗なめ、アルの港みなとより海岸線かいがんせんを舟ふねにて

北方ほくほうに渡わたり、ゼムの港みなとに立寄たちより、そこに上陸じやうりくして、神業しんげふを修しうし、再ふたび船ふねに乘のり、

チンの港みなとより再ふたび上陸じやうりくして、アマゾン河がはの口くちに出いで、船ふねにて河かはを遡さかのほり、鷹依たかより姫ひめ、

龍國たつくに別わけの一行いつかうに出會であひ、そこに再ふたび大修業だいしうげふをなし、言依ことより別命わけのみこと、國依くにより別命わけのみことの命めいに

したが、直様自轉倒島に立歸り、沓島、冠島に隠されてある、青、赤、白、黄の麻
邇の珠を取り出し、錦の宮に納めて、生れ赤子の心となり、神業に参加せよ。少し
にても慢神心あらば、最前の如く、鬼神現はれて、汝が身魂に戒めを致すぞよ。
ゆめゆめ疑ふ勿れ。餘れこそは言依別命を守護致す、日の出姫神であるぞよ。今
にちまでそのほうひの出神の生宮と申して居たが、其實は金毛九尾白面の悪狐の靈、汝の
体内に憑りて、三五の神の經綸を妨害致さむと、汝の肉體を使用してゐたのであ
るぞや」

高姫「ハイあなた様から、さう承はりますと、何だか、其様な心持が致して参り
ました。それに間違は御座いますまい」

女神「最早夜明けにも近ければ、妾は天教山に立歸り、日の出神、木花姫神に汝
が改心の次第を申し上げむ。高姫さらば……」

と言ふより早く、五色の雲に乗り、天上高く昇らせ玉うた。高姫はホツと一息し
乍ら、あたりを見れば、夜は既に明け放れ、東の空は麗しき五色の雲霞き、太陽
は地平線を離れて、清き姿を現はし給ふ間際なりけり。

第一二章 悔悟の幕(八三四)

常彦、春彦は後より追つかけ來りし玉、龍の二人と共に、アリナの高山を漸く登り、到底、高姫に追付く可らざるを斷念し、高山の頂きにて息を休め、其夜を明かした。

丑満頃と覺しき時、東の空をフト眺むれば、俄に黒雲起り、満天の星は一つも残らず姿を隠し、追々風は烈しく峰の尾の上を吹き捲り、四人は眠りもならず、其雲を怪しみ眺めつつあつた。忽ち東の天に黒雲の中より、輪廓明かなる白髪の大怪物現はれ來り、地上に向つて降る姿が見えた。四人は「アレヨアレヨ」と指し、眺めてゐた。暫くあつて容色端麗なる女神又もや空中に現はるよと見る間に、見るも恐ろしき金毛九尾白面の惡狐は暗を照らし乍ら、北方常世國の空を目

がけて走り行く。四人は奇異の思ひに打たれ、目も放たず東天を眺めて居た。不思議や空中に錦の袋、あたりを照らし乍らこれ又フワリフワリと櫟が原の上に落下するのを見た。

漸くにして東天五色の雲に色どられ、天津日は悠悠として昇らせ給うた。四人は直に天津祝詞を奏上し終つて、木々の果實を朝飯の代りにむしり喰ひ、宣傳歌を歌ひ乍ら、足に任せて、高姫の所在を探らむと下り行く。

漸くにして日の暮るる頃、櫟ヶ原の高姫が端坐せる白楊樹の下に辿り着いた。高姫は心魂開け、眞如の日月心の空に輝き、天眼通力を得て、四人の後を追ひ來る事を知り、茲に端坐して祝詞を奏上し乍ら、一行を待つてゐたのである。

鏡の池の神靈と 現はれませる月照彦の

神の命の戒めに 天狗の鼻の高姫は

高い鼻をばめしやがれて 忽ち身體震動し

人事不省に陥りつ 懸橋御殿にかきこまれ

國玉依別始めとし

數多の神の司等に

水よ薬よ祝詞よと

手あつき介抱に息を吹き

感謝するかと思ひきや

又もや例の逆理窟

教主夫婦も驚いて

愛想をつかし別館に

早々姿を隠しける

後に高姫傲然と

御殿に近く仕へたる

國、玉、龍の宣傳使

向ふに廻して減らず口

いろは匂へど散りぬるを

四十八文字で世の中の

一切萬事高姫が

解決すると法螺を吹き

金剛不壞の如意寶珠

麻邇の寶を國依別の

教司や玉治別

言依別の教主等が

廣き御殿を拵へて

三千世界の神寶を

隠してゐるに違ない

高姫ここへ来た上は

最早逃れぬ百年目

綺麗サツパリ渡せよと

無理難題を吹きかける

常彦、春彦其外の

御殿に仕ふる司等も

猜疑の深き高姫に

顔見合せて當惑し

一時も早く此場をば

出發つて欲しいと促せば

高姫眼を怒らして

悪言暴語を連發し

遂には清き神殿に

阿修羅王の如驅上り

扉に兩手をかくる折

鏡の池の守護神

狭依の彦が現はれて

高姫司の首筋を

グツと掴んで階段の

眞下にきびしく投げつける

流石の高姫目をまはし

半死半生の有様を

以後の見せしめ捨ておけと

常彦、春彦兩人は

國、玉、依や龍などの

神の司の親切を

暫しとどめて別館に

到りて神酒を頂戴し

世間話に耽る折

御殿に怪しき叫び聲

何事ならむと一同は

驅より見れば此は如何に

大の男は高姫を 手玉に取つてさいなみつ

其儘姿を隠しける 高姫驚き立上り

玄關口に立出でて 手早く草鞋を足にかけ

アリナの山の急坂を 矢を射る如く逃げて行く

高姫やうやう大野原 芒の茂り白楊樹

竝びて立てる櫟ヶ原の 大木の根元に辿り着き

草臥果てて腰おろし 前後も知らず眠入りけり。

高姫夜中に目を醒まし 耳をすませばコハ如何に

獅子狼や虎熊の 幾百千とも限なく

聲を揃へて唸るよな 身の毛もよだつ物凄さ

黒雲四方に塞がりて 足許さへも見えかぬる

暗の帳を押あけて 現はれ出でたる白髪

雲つく許りの大男 耳まで裂けた大口に

血をにじませて進み寄り アハ、ハ、ハと大笑ひ

時節は待たねばならぬもの
生々したる人間の

肉を食ひたい食ひたいと
今迄飢ゑて居た爺

天の恵か有難や
此高姫は年を老り

少しく肉は固けれど
腹の空いたる吾身には

決して不味うはあるまいぞ
あゝ有難や有難や

これから頂戴致しませうと
高姫司の前に寄り

グツと髻を握りしめ
笑うた時の厭らしさ

廿日鼠が大猫に
掴まへられた時のよに

身をビリビリと震はして
戦く折しも嚙喰と

天津御空に音楽の
響き聞えて一道の

光明大地を射照らせば
さも恐ろしき怪物は

煙と消えて美はしき
女神の姿忽然と

笑を湛へて出現し
種々雑多と天地の

眞の道理を高姫に
諭し玉へば頑強な

高姫司も村肝の 心の底より悔悟して
玉に對する執着の 迷ひは爰に速川の
清き流れに落しける あゝ惟神々々
御靈幸はひましませよ。

常彦、春彦外二人は高姫の今迄の如き高慢面に引替へ、極めて温順な顔色となり、行儀よくつつましましやかに、芝生の上に端坐して、小聲に祝詞を奏上し居る姿を眺めて、案に相違し乍ら、
常彦「モシモシ高姫さま、如何で御座いました。貴女のお姿を見失つては大變だと、吾々はお後を、一生懸命に附けて走つて参りましたが、何を言つても、アリの高山……とうとう貴女の御健脚には追ひ付き得ず、峰の尾の上で、とうとう往生致し、一夜を明かして、漸く此處に参りました。ようまあ待つてみて下さいました。ア、これで肩の重荷が下りた様で御座います」
高姫「常彦に春彦、鏡の池のお役人様、嶮しき道を遙々と、能うまあ来て下さい

ました。私もおかげで、長い夢が醒めました。只今の高姫は昨日迄の様な、自我心の強い、猜疑心の深い、高慢坊の高姫では御座いませぬ。スツカリと神様の訓戒を受けて改心を致しましたから、どうぞ御安心をして下さいませ。さうして茲に御座います此錦の袋に這入つて居る黄金の玉は、テーナの里から國玉依別の教主がワザワザ持つて來られた御神寶で御座います。どうぞ玉公、龍公、あなた御苦勞ですが、此お寶を鏡の池の懸橋御殿へお供をしてお歸り遊ばし、國玉依別様に御神殿へ納めて戴いて下さいませ。此お寶は夜前まで白楊樹の梢に引かかつてあつたので御座いますが、天教山の日の出姫神様が御神力に依りて、無事に私の前に降つて來られた、大切な神界の御神寶で御座います。一寸御覽なさいませ。金色燦爛として目の眩き計りの御光がさして居ります。』

とニコニコし乍ら、錦の袋の紐を解き、四人の前に玉を現はして見せた。四人は稀代の神寶に肝を潰し、只茫然として舌を巻き、目を見張り、少時無言の儘感歎を續けてゐる。暫くあつて常彦は口を尖らせ乍ら、

高姫様、貴女は今迄寢ても醒めても、玉々と玉氣違の様に仰有つて御座つたが、

こんな結構な玉が手に入った以上は、さぞ御満足と思ひの外、玉公や龍公にお渡しなさると云ふ其見上げたお心は、私も感心しましたが、心機一轉も餘り早いぢやありませんか』

高姫『イヤ早い所ぢや御座りませぬ。妾の改心が丁度十二年遅れました。それが爲に聖地の方々に對し、いろいろの御迷惑をかけ、神業のお邪魔を致し、大神様に對しても申譯のない御無禮計りを致しました。妾の様な身魂の曇つた神界の邪魔者を、神様はお氣の長い、改心さして使うてやらうと思召して、能うマア茲まで辛抱して下されたと思へば、妾は勿體なうて、お詫の申様も、御禮の致し様も分りませぬ。是から妾は此櫟ヶ原を東へ渡り、いろいろと神様の爲に苦勞を致し、今迄の深い罪を除つて貰ひ、アマゾン川を溯り、鷹依姫様や龍國別様、あわよくば、言依別様にも面會し、今迄の深い罪のお詫を致した上、自轉倒島へ歸り、御神業の一端に奉仕する妾の考へ、……コレ常彦、春彦、お前も妾に從いてこれから先は眞面目に御用を勤め上げて下されや』

常彦涙を流しながら、

常彦「ハイ有難う、能うそこ迄なつて下さいました。今になつて白状致しますが、實の所吾々兩人は空助様の内々の御頼みで、貴女のお供に参り、徹底的に改心をして頂かねばならない使命を受けて来て居つたので御座います。ア、それを承はつて、私も何となく嬉し涙が零れます。……なア春彦、有難いぢやないか」

春彦「ウン有難いなア」

と云つた限り、涙を隠して俯むいて居る。

これより玉、龍の兩人は錦の袋に納めたる黄金の寶玉を高姫の手より受取り、三人に別れを告げて、アリナ山を越え、懸橋の御殿に立歸り、教主夫婦を始め、役員信徒の前にこれを据ゑ、御襖を修し、教主自ら齋主となり、神殿に奉按する事となつた。これより懸橋の御殿の神徳は益々四方に輝き、遂には高砂島の西半部を風靡する事となつた。

又高姫は常彦、春彦と共に、大蜥蜴や蜈蚣、蛇、蜂、虻などの群がれる原野を越え、アルの港を指して進み、それより海岸傳ひに、便船に乗じ、ゼムの港に上陸し、又もヤチンの港よりアマゾン川の河口に出でて、船を溯らせ、玉の森林に

進む事こととなつた。此間このあひだの道中だうちうの記事きじは別項べつかうに述のぶる考かんがへであります。

(大正一一・八・一二 舊六・二〇 松村眞澄録)

第一三章 愛流川あいるがは (八三五)

高姫たかひめは常彦つねひこ、春彦はるひこと共にアルゼンチンの大原野だいげんや、櫟ヶ原くぬぎがはらを東ひがしへ東ひがしへと進すすみ行く。アルの港迄みなとまでは殆どほとん三百七十八里さんびやくしちはちじふりもある。何程なにほどあせつても一ヶ月いっかげつの日數にっすうを費つひやさねば、アルの港みなとへは行ゆかれない。澤山たくさんの蜥蜴とかげのノロノロと這はつてゐる草野原くさのはらを、萱かやの株かぶを右みぎに左ひだりに潛くぐりつつ、天惠てんけいてき的に野邊のべ一面いちめんに赤あかくなつて稔みのつて居ゐる味あぢの良よき苺いちごを食くひ乍ながら、草くさの枕まくらも五いつつ六むつつ重かさねて、稍樹木ややじゆもくの茂しげれる地ち點てん迄まで出でて來きた。

此處ここには相當さうたうに廣ひろい河かはが清きよく流ながれて居ゐた。河かはの岸きしには行儀ぎやうぎよく大王松だいわうまつや、檜かしなどが生はえて居ゐる。河邊かはべには桔梗ききやうの花はな女郎花をみなへしの花はななどが時ときならず咲さき亂みだれてゐた。

丁度内地ちやうどないちの秋あきの草野くさのの如やうであつた。三人さんにんは河かはの邊ほとりに下おり立たち、清泉せいせんに喉のどをうる

ほし、あたりの風景を眺めて、過來し方の蜥蜴や虻、蜂、金蠅のうるさかつたこと、苺の味の美味なりしと、黄紅青白紫其他いろいろの美はしき草花の處狭きまで咲き満ちて、旅情を慰めてくれたことなどを追懐し、神の恩恵の深きを感謝しつつあつた。

其處へのそりのそりと草蓑を着け、編笠を被り、竹の杖をついた七十許りの婆アがやつて来た。三人は……ハテ斯様な所に人が住んで居るのかなア……と不審相に、婆アの顔を眺め入つた。婆アは三人を手招きし乍ら、一二丁上手の小さき草蓑の家に身を隠した。

常彦「モシ高姫さま、あの婆アは何でせうなア。あの松の木の根元の小さな家へ這入つて了ひましたが、吾々三人を嬉し相な顔して手招きして居たぢやありませんか。何でもあの婆アの配偶者が病氣にでも罹つて居るので、吾々を頼みに来たのかも知れませぬよ。何は免もあれ一寸立寄つて見やうではありませぬか」
高姫「あゝあ、玉公、龍公に別れてから、今日が日迄六日の間、人の姿を見たことはなかつたが、今日は珍しい、人間に會ふことが出来ました。免も角あの婆ア

の庵迄往つて見ませう。併し乍ら神様が如何して御試しなさるか分りませぬから、決して腹を立てはなりませんよ」

常彦「ハイ承知致しました。絶対に腹などは立てませぬワ。安心して下さい。：

：なア春彦、お前もさうだろな」

春彦「ウン、私もその通りだ。高姫さま、サア参りませう」

三人は漸くにして婆アの庵に着いた。婆アは嬉しさうに三人を出迎へ、

「これはこれは三五教の宣傳使様、能うこそ斯様な醜い茅屋を御訪ね下さいました。就いては折入つて御頼み申したい事が御座いますのぢや。何と人を一人助け

ると思つて、お聞き下さる譯には参りますまいかなア」

高姫「ハイ妾達の力に叶ふことならば、如何様なことなり共仰有つて下さいませ」

婆「それは早速の御承知、有難う御座います。實の所は宅の爺さまは最早八十の

坂を七つも越え、來年は枳掛の祝ひをせうと思つて、孫や子供が楽しんで居りまし

たが、とうとう今年の春頃から、人の嫌がる病氣に取付き、あの爺は天刑病だか

ら、村には置くことは出来ぬと云つて、此様な一軒家の淋しい川の畔に形ばかり

の家を造り、雨露を凌ぎ乍ら、年の老つた婆アが介抱を致して居ります。いろ
いと百草を集め、薬を拵へて吞ましたり、附けたり致しましたが、病は日に日
に重る計り、體はずるけ、何とも言へぬ臭い匂ひが致し、澤山蠅が止まつて、女
房の妾が見てさへもゾゾ髪が立ちます。併し乍ら、四五日以前から妙な夢を續
けて見ますのぢや。其夢と申すのは、あのアイル河の畔に三五教の宣傳使が現は
れて来るから、其お方を頼んで癒して頂けとの女神さまの夢のお告げ、それが又
毎晩々々同じ夢を、昨夜で五つ夜さも見まするので、此茅屋から翡翠の様に川計
り眺めて待つて居りました。所が神様の仰有つた通り、三人連れで立派な宣傳使
様が御越しになり、川でお休みになつてる其姿を拜んだ時の嬉しさ、思はず熱い
涙がこぼれました。就いては神様の仰せには、此ずるけた病氣でも、三五教の宣
傳使がやつて来て、體の汁や膿を、スツカリ舐めて呉れたならば、其場で全快す
ると仰有いました。誠にかやうな事を御願申すは畏いことと御座いますが、神様
の夢のお告げで御座いますから、お氣に障るか存じませぬが、一寸申上げました
高姫暫く差し俯むいて腕を組み、考へて居たが、

高姫「あゝ宜しい宜しい、どんな膿でも汁でも、御注文通り吸ひ取つて上げませう。龍宮の一つ島で、初稚姫や玉能姫の一行が、癩病患者の膿血を吸うて助けた例でもある。サアお爺さまのお座敷へ案内して下さいませ」

婆「ハイ有難う、案内しませう」

と立あがり、奥の間へ進んで行く。奥の間と云つても只萱草の壁を仕切つた丈で、二間作りの小さき家であつた。常彦、春彦も高姫と共に奥の間に従いて行く。見れば金色の蠅が眞黒にたかつて居る。爺は仰向けに骨と皮とになつて、體一面膿汁を流し、蠅に吸はれた儘、半死半生の態で苦しんで居る。高姫は直に天津祝詞を奏上するや、數多の金蠅は一匹も残らず、ブンブンと唸りを立てて、窓の外へ逃出して了つた。高姫は爺の體に口を當て、胸の邊りから膿血を吸ひ始めた。常彦は足から、春彦は頭から、汚な相にもせず、此爺さまを助けたい一杯に、吾れを忘れて、臭氣紛々たる膿汁を平氣で吸うて居る。

爺は「ウン」と云つて撥ね起來た。見れば不思議や、紫摩黄金の肌を現はしたる妙齡の美人となり、

美人びじん「ヤア高姫たかひめ、汝なんぢの心底しんてい見届みとどけたり。我われこそは天教山てんけつざんに鎮しづまる木この花姫命はなひめのみことの化身けしんなるぞ。いよいよ汝なんぢは是これより天晴あつぱれ神柱かむばしらとして神業しんげふに仕つかふることを得うるであらう。まだまだ幾回いくくわいとなく神かみの試ためしに會あふことあらむ。そこを切きりぬ抜ぬけなば、眞まことの汝なんぢの肉體にくたいは日ひの出神でのかみの生宮いきみやとなりて仕つかふるも難がたき事ことにあらざるべし。必かならず慢心まんしんしてはなりませぬぞ。又常彦またつねひこ、春彦はるひこも三五教あななひけうの教をしへを間違まちがはない様やうに、不言實行ふげんじつかうを第一だいいちとするが宜よろしいぞ。木この花姫はなひめが三人さんにんの爲ために斯かくの如ごとく仕組しぐんだのであるから、必かならず今後こんごとても油斷ゆだんを致いたしてはなりませぬぞや」

高姫たかひめ外ほか二人ふたりは「ハイ」と答こたへて平伏へいふくした。

何處いづこよりもなく、香かんばしき匂におひ薫くんじ來きたり音樂おんがくの響ひびき啾唳しゅうりやうとして冴さえ渡わたり、涼すずしき風かぜは窓まどを通とほして、三人さんにんの面おもてを拂はらふ。

不圖頭ふとかうべをあぐれば、こは如何いかに、茅屋あばらやもなければ、爺婆ぢいばばの姿すがたも女神めがみの姿すがたもなく、依然いぜんとして、河かはの邊ほとりにウツラウツラと晝船ひるふねを漕こいで居ゐた。

高姫たかひめは吐息といきをつき乍ながら、

高姫たかひめ「あゝ今いまのは夢ゆめであつたか、大變たいへんな結構けつこうな御神德おかげを夢ゆめの中なかで頂いただきました。夢ゆめ

なればこそ、あんな事が出来たのだらう。イヤイヤ實際にあの心にならなくてはなりません。あゝ有難い有難い。と切りに獨言を云つて居る。

常彦「高姫さま、私も夢を見ましたよ。随分蟲のよい夢でした。春彦と三人、そ

れはそれは汚い病人の介抱をさせられ、膿血を吸はされましたが、何ともかとも

知れぬ甘露の様な味がして、夢中になつて吸ひ付いて居ると、汚い爺だと思つた

ら、天教山の木の花咲耶姫様、醜の極端から美の極端迄見せて頂きました。……

高姫さま、貴女もさういふ夢でしたか、……春彦、お前の夢は如何だつたい」

春彦「イヤもうチツトも違ひはない。三人が三人乍ら同様の夢を見たに見える。

不思議なこともあるものだなア。あの汚い病人はキツと俺達の心の映像かも知れ

ないよ。あの如うな汚いむさくるしい吾々の身魂を、木の花咲耶姫大神様が、俺

達が病人の膿血を吸うた様に、身魂の汚れを吸ひ取つて下さるに違ひないワ。あゝ

實に畏いことだ。コリヤキツと人のこつちやない、吾々の魂を見せて戴いたのだ

らうよ。なア高姫さま、さうぢや御座いますまいか」

高姫たかひめ「それはさうに間違御座まちがひございませぬワ。神様かみさまから御覽ごらんになつたら、妾わたしの身魂みたまは汚けがれ腐くさり、ズルケかけて居ゐるでせう。あゝ惟かむながらたまちはへませ神靈かみたま幸倍坐世ちへませ。諸々もろもろの罪穢つみけがれを拂はらひ玉たまひ清きよめ玉たまへ」

と一生懸命いっしやうけんめいに俄にはかに合掌がつしやうする。

常彦つねひこ「高姫たかひめさま、貴女あなたは何なんと云いつても、變性男子へんじやうなんしの系統ひつぽうだから、汚けがれたと云いつても、ホンの一寸ちよつとしたものですよ。あの汚けがれやうは吾々われわれの身魂みたまの映寫えいしやに違ちがひありませぬ」

高姫たかひめ「もう變性男子へんじやうなんしの系統ひつぽうなどと言いつて下くださるな。妾わたしのやうな者ものを系統ひつぽうだなぞと申まをさうものなら、それこそ變性男子へんじやうなんし様の御神徳ごしんとくを傷きずつけます。此後このごは決して變性へんじや

男子うなんしの系統ひつぽうなぞとは申まをしませぬから、あなたもどうぞ、其積そのつもりで居をつて下ください」

春彦はるひこ「それでも事實じじつはヤツパリ事實じじつだから仕方しかたがありません。此後このごは決して變性へんじや

高姫たかひめ「系統ひつぽうなら系統ひつぽう丈だけの行おこなひが出来できなくては恥はづかしう御座ございます。妾わたしが天晴あつぱれと改心かいしんが出来でき、誠まことが天てんに通つうじ、大神おほかみさまから、系統ひつぽう丈だけの事ことあつて、何なにから何なにまで行おこなひが違ちがふ、誠まことの鑑かがみぢや……と仰有おつしやつて下くださるまでは、妾わたしは系統所ひつぽうじゆぢやありません。

變性男子様の御徳を傷つける様な者ですから、どうぞ暫く系統呼はり止めて下さいませ」

春彦「變れば變るものですな。毎日日系統々々の連發を御やり遊ばしたが、改心と云ふものは恐ろしいものだなア。そんなら私も是から貴女に對し、態度を變へませう」

高姫「ハイ妾からも變へますから、どうぞ上下なしに、教の道の姉弟として交際つて下さい。今迄のやうに弟子扱をしたり、家來扱は決して致しませぬ」

常彦「私も其積りで交際させて頂きます。併し日の出神の生宮の件は如何なさいましたか」

高姫「モウどうぞそんな事は云うて下さいませぬ。日の出神さま所か、金毛九尾が、妾の肉體に憑いてをつて、あんな事を言はしたり、慢心をさしたのですよ。

櫛ヶ原の白楊樹の下で、スツカリ妾の肉體から正體を現はして脱けて出ました。

それ故、今日の妾は誠の神様の生宮でもなければ、悪神の巢窟でも御座いませぬ。これから、本守護神にしつかりして頂いて、天晴れ神様の御用に立たねばなりま

せぬ
』

常彦 『あゝそれは結構ですな。私がアリナ山の頂きから東の方を眺めて居りましたら、櫛ヶ原から、金毛九尾の悪狐が、黒雲に乗り、常世の國の方を目蒐けて、エライ勢で逃げて行きました。大方あの時に貴女の肉體から退散したのでせう』

高姫 『あゝさうでしたか。恐ろしいものですなア。妾の肉體を離れる時にチラツと姿を見せましたが、それはそれは立派な八疊の間一杯になる様な長い裨褌を着て眞白な顔を致し、又ツと妾の前に立ちましたから、……おのれ金毛九尾の悪狐奴と睨みますと、忽ち金毛九尾となり、尾の先に孔雀の尾の玉のやうな光つた物を澤山につけて天へ舞上り、北の空目蒐けて逃げて行きました。大方其時の事を御覽になつたのでせう。あゝ恐ろしい、ゾツとして來ました。惟神靈幸倍坐世惟神靈幸倍坐世』

常彦 『時に高姫さま、此大河を如何して渡りませうか。橋もなし仕方がないぢやありませんか。翼があれば飛んで行けますが、此廣い深い流川、而も急流と來て居るのだから、泳ぐ譯にも行かず、困つたものですワ。如何しませう』

高姫たかひめ「神様かみさまに御願おねがひするより途みちはありませぬ。これも一つひとつは神様かみさまのお試ためしに會あうと
るのですよ。兔とも角神かくかみを力ちからに誠まことを杖つゑに、渡わたつて見みませう。惟かむながらたま神靈かみながらたま幸倍坐世ちはへませ惟神靈かむながらたま
幸倍坐世ちはへませ」

と高姫たかひめは一生懸命いっしやうけんめいに川かはの面おもに向むかつて祈願きぐわんをこらした。不思議ふしぎや幾丈いくちやうとも分わからぬ大
の鰐わに數多あまた重かさなり來きたり、見みる見みる間うちに鰐橋わにばしを架かけた。三人さんにんは天てんの與あたへと雀躍こをどりし「惟かむな
神靈がらたま幸倍坐世ちはへませ」を一心いっしんに唱となへ乍ながら、鰐わにの背せを踏ふみ越こえ踏ふみ越こえ、漸やうやくにして向むか
の岸きしに達たつした。

常彦つねひこ「あゝ有難ありがたい、おかげで樂らくに渡わたして貰もらうた。斯かうなつて見みると、餘あまり鰐わにさま
の悪わるい事ことも言いへませぬな」

高姫たかひめ「ホ、ホ、ホ、ホ、」

春彦はるひこ「祝部はふりべの神かみさまが、どこやらの海うみを渡わたる時ときに仰有おつしやつたぢやないか。鰐わにが悪わるけ
りや、甘鯛あまだい鱒ますから蟹かにして下ください、ギニシイラねばドブ貝がひなとしなさい……とか何なん
とか云いつて、魚盡うをづくしを唄うたはれたといふ事ことが、靈界れいかい物語ものがたりに書かいてあつただらう」
常彦つねひこ「ソリヤお前まへ違ちがふぢやないか、鰐わにが悪わるけりや……だない、鰐わにに悪わるけりや、甘あま

鯛鱒だいますからと云いふのだ。甘鯛鱒あまだいますとは魚さかなの名なだが、實際じつさいは謝罪あやまりますと云いふことを、

魚さかなに「もち」つたのだよ。アハ、ハ、ハ、」

高姫たかひめ「サア皆みなさま、行きませう」

と先さきに立たつて、青草あをくさの茂しげれる野のを東ひがしへ東ひがしへと進すすんで行く。今迄いままで執着しつちやくしん心に捉とらはれて

居ゐた高姫たかひめの眼めには、森羅しんら万象ばんしやう一切いつさい悪あくに映えいじてみたが、悔悟くわいごの花はなが心こころに開ひらいてから

見みる天地てんち間は、何もかも一切いつさい萬事ばんじ花はなならざるはなく、惠めぐみならざるはなく、風かぜの音おと

も音楽おんがくに聞きえ、蟲むしの音ねも神かみの慈言じげんの如ごとく響ひびき、野邊のべに咲さき亂みだれた花はなの色いろは一層いつそう麗うるは

しく、樂たのしく且かつ有難ありがたく、一切いつさい萬事ばんじ残のこらず自じ分の爲ために現あらはれて呉くれたかの如ごとくに、

嬉うれしく樂たのしく感かんじられた。

三人さんにんは宣傳歌せんでんかを歌うたひ乍ながら、燒やきつくような空そらを、草くさを分わけつつ莓いちごの實みを【むし】

り喰くひ、神かみに感謝かんしやし、殆ど七八里ほとん しちはちり計ばかり、知しらぬ間まに面おも白しろく樂たのしく進すすんで來きた。ハ

タと行詰ゆきつまつた原野げんやの中なかの大湖水だいいこすゐ、人ひとも居をらねば舟ふねもない。又またもや三人さんにんは茲ここで一ひと

思案しあんをせなくてはならなくなつた。紺碧こんへきの水みづを湛たたへた此湖このつづみは幾丈いくぢやうとも計はかり知しられ

ぬ底そこ無なし湖うみの如ごとくに感かんぜられた。

常彦「一つ逃れて又一つとは此事だ。此前は何と云つても、向う岸の見えた河なり、そこへ澤山の鱒さまが現はれて橋を架けて下さつたので、無事に此處まで面白く楽しく旅行を續けて來たが、此奴ア又際限のない大湖水、湖水の周圍を廻つて行くより仕方がありますまい。高姫さま、如何致しませう。此湖を眞直に渡れば餘程近いのですが、さうだと云つて、湖上を渡ることには出來ますまい。急がば廻れと云ふ諺もありますから、廻ることに致しませうか」

高姫「さう致しませう。無理に神様にお願をして最前の様に橋を架けて貰ひ、御眷屬さまに御苦勞をかけてはなりません。自分の事は自分で埒を能うつけぬような事で、到底世を救うと云ふ神聖な御用は勤まりませぬからなア」

春彦「そんなら、右へ行きませうか、左へ行きませうか」

高姫「進左退右と云ふ事がありますから、左へ廻つて行くことに致しませう。警察の交通宣傳だつて、左側通行を喧しく云つて奨励しとるぢやありませんか。サア斯うおいでなさいませ」

と高姫は先に立ち、草野を分けて進んで行く。それより殆ど一里計り前進すると、

天を封じた椰子樹の森があつた。日は漸く暮近くなつた。此處で三人は足を伸ばし、蓑を敷き、ゴロリと横たはつて一夜を明かす事としたりける。

執着心の權化とも

人に言はれた高姫が

轉迷開悟の花開き

天教山の木の花姫の

神の命の隠し御名

日の出姫の訓戒に

心の駒を立直し

誠の道に乗替へて

草野ヶ原を進み行く。

森羅万象悉く

濁り汚れて吾れ一人

天地の中に澄めりとて

鼻高々と誇りたる

高姫司も鼻折れて

見直す世界は天國か

浄土の春と早替り

草木の色も美はしく

風の聲さへ天人の

音楽かとも感ぜられ

草野にすだく蟲の音も

神の慈音となりにけり

高姫常彦春彦は

草鞋脚絆に身をかため
心も急ぐ膝栗毛

アイルの河の岸の邊に
暫し息をば休めつつ

清き流れを打眺め
天地の神の御恵を

讚美しめたる折柄に
見るも汚なき蓑笠に

身を包みたる婆アさまが
忽ち茲に現はれて

三人の前に手を伸ばし
差招きつつ川上の

松の根元に建てられし
醜けき小屋に入りける。

茲に高姫一行は
老婆の後に従ひて

賤が伏屋に来て見れば
老婆は喜び手を合せ

妾が夫は八十の
坂道七つ越えました

人の厭がる天刑の
病に罹り村外れ

淋しき河邊に追ひ出され
老の夫婦の憂苦勞

天教山に現れませる
木の花姫の夢枕

夜毎々々に立ち玉ひ
三五教の宣傳使

日ならず此處に來らむ 汝は彼を呼び寄せて

夫の惱む膿汁を 吸うて貰へば忽ちに

本復するとの神の告げ 誠に濟まぬこと乍ら

老の願を聞いてよと 誠しやかに頼み入る

高姫、常彦、春彦は 何のためらふ事もなく

膿に汚れし老人の 身體全部に口をつけ

天津神たち國津神 憐れ至極な此人を

何卒救ひ玉へよと 心に祈願をこめ乍ら

力限りに吸ひ取れば 豈計らむや惡臭の

鼻さへ落むと思はれし 其膿汁は甘露の

露の如くに香ばしく 麝香の匂ひ馥郁と

實に心地よくなりける。 不思議と頭を擡ぐれば

天刑病と思ひたる 爺は何時しか靈光の

輝き亘る神人と 姿を變じこまごまと

あななひけう
三五教の眞髓を

説き諭しつつ忽然と

けぶり
煙の如く消え玉ふ

たかひめ
高姫、常彦、春彦は

おどろ
ハツと驚き目をさまし

み
見れば以前の川の邊に

ねむ
眠り居たるぞ不思議なれ。

ゆめ
夢の中なる教訓を

わがみ
吾身に省み宣り直し

かみ
アイルの河を如何にして

むか
向うの岸に渡らむと

かみ
神に祈れる折柄に

いの
祈りは天に通じけむ

やひろ
八尋の鰐は幾百とも

かぎ
限りなき迄川の瀬に

からだ
體を竝べて橋作り

みたり
三人をここに安々と

かなた
彼方の岸に渡しける。

てんち
天地の恵に咲出でし

ひやくくわせんくわ
百花千花の香に酔ひつ

あし
足も輕げに七八里

すす
進みて來る前方に

こんぜう
紺青の波を湛へたる

おも
思ひ掛なき大湖水

ここ
茲に三人は立止まり

けふぎ
協議の結果高姫の

さしづ
差圖に従ひ湖畔をば

ひだり
左に取りて一里半

椰子樹の蔭に身を休め

神の恵の有難き

話に一夜を明しける

あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ。

(大正一一・八・一二 舊六・二〇 松村眞澄録)

第一四章 カーリン丸(八三六)

三人は湖水の傍なる椰子樹の森に一夜を明かした。其夜は比較的風強く、湖水の波の音は雷の如く時々ドンドンと響いて来た。此湖水の名を玉の湖と云ふ。東西五十里、南北三十五里位の大湖水であつた。そして此湖水の形は瓢箪を縦に割つて半分を仰向けにしたやうな形をしてゐる。地平線上より新に生れ出で玉ふ眞紅の太陽はニコニコとして舞ひ狂ひ乍ら、刻々に昇天し給ふ。一同は湖水に顔を

洗ひ、口を滌ぎ手を清め、拍手感謝の詞を奏上し、蔓苺を掌に一杯むしり取つて朝飯に代へた。能く能く見れば傍に神の姿した石が立つて居る。扨て不思議と裏面を見れば、軟かき石像の裏に、鷹依姫、龍國別、テーリスタン、カーリンスの一行四人、改心記念の爲に此石像を刻み置く……と刻り附けてあつた。常彦は此文面を讀み上げて高姫に聞かした。高姫は驚いて、高姫「あゝ矢張鷹依姫さまも龍國別さまも、テー、カーも、つまり此荒原を彷徨うて御座つたと見える。ホンにお氣の毒な、あるにあらぬ苦勞をなさつたであらう。此高姫が無慈悲にも、黒姫さまが黄金の玉を紛失したと云つて、鷹依姫さまや、外三人の方にまで難題を云ひつものり、聖地を追ひ出したのは、何と云ふ氣強いことをしたのであらう。今になつて過去を顧みれば、私の犯した罪、人さまの恨みが實に恐ろしくなつて來た。せめては鷹依姫さま一同の苦勞なさつて通られた跡を、斯うして修業に歩かして貰ふのも、私の罪亡ぼし、又因果の循環り循環りて同じ處を迂路つき廻るやうになつたのだらう。諺にも……人を呪はば穴二つ……とやら、情は人の爲ならずとやら、善にもあれ、惡にもあれ、何事も皆吾身に

報うて来るものだ……と口にはいつも立派に人様に向つて、諭しては居たものの、斯うして自分が實地に當つて見ると、尚更神様の教が身に沁々と沁み亘つて、有難いやら恐ろしいやら、何とも申上げやうが御座いませぬ。……あゝ鷹依姫様、龍國別様、テー、カーの兩人さま、高姫のあなた方に加へた殘虐無道の罪、どうぞ許して下さいませ。あなたがこんな遠國へ來て種々雑多と苦勞をなさるのも、皆此高姫に憑依してゐた、金毛九尾の惡狐の爲せし業、どうぞ赦して下さいませ。此石像は、鷹依姫様、龍國別様の心を籠められた記念物、之を見るにつけても、おいとしいやら、お氣の毒やら、お懐かしいような氣が致します。何程重たくても罪亡ぼしの爲に此石像を、鷹依姫様、外御一同と思ひ自轉倒島まで負うて歸り、お宮を建てて、朝夕にお給仕を致し、私の重い罪を赦して戴かねばなりません。』と念じ乍ら、四邊の蔓草を縋つて繩を作り、背中に括りつけ、其上から蓑を被り、持重りのする石像を背中に負うて、たうとうアマゾン河の森林迄歸つて了つたのである。これが家々に、小さき地藏を造り、屋敷の隅に、石を疊み、其上に祀ることとなつた濫觴である。

さて高姫は石像を背に負ひ、エチエチし乍ら草野を分けて湖畔を東へ東へと二人の同行と共に進み行く。

高姫は玉の湖畔を進み乍ら、湖中に澆刺として泳げる、何とも云へぬ美しき五色の、縦筋や横筋の通つた魚を眺め、

高姫「コレコレ、一寸御覧なさい、常彦、不思議な魚が居ります。これが噂に聞いた、玉の湖の錦魚といふのでせう。一名金魚とか云ふさうですが、本當に綺麗

なものぢや御座いませぬか」

常彦「成程、天火水地結と青赤紫白黄、順序能く縦筋がはいつて居りますな。之が所謂縦魚で御座いませう。あゝ此處にも横に又同じ如うな五色の斑の附いた魚

が泳いでゐます。どちらが雄で、どちらが雌でせうかなア」

春彦「定まつた事よ。縦筋の方が雄で、横筋のはいつた方が雌だ。經と緯と夫婦揃うて錦の機を織ると云ふのだから、錦魚と云ふのだ。此鱈を見よ、随分立派な

鱈ぢやないか」

常彦「併し此魚には目が無いぢやないか。此奴アどうも不思議ぢやないか」

春彦はるひこ「此この縦筋たてすぢのはいつた盲魚めくらつをは一名高姫魚いちめいたかひめうをと云いひ、横筋よこすぢのはいつたのは春彦魚はるひこうをと云いふのだ。どちらも盲めくらだから、マタイものだ。それ此この通り逃にげも何なにもせぬぢやないか。併しかし手てに取とると、やつぱりピンピン撥はねよるワ。ヤア其處そこへ本當ほんたうの錦魚にしきうをがやつて來きたぞ。此こいつ奴たてよこア縦横じふもんじ十文字すてきめつぽふかい、素的滅法界すてきめつぽふかい、綺麗きれいな筋すぢがはいつて、ピカピカ光ひかつてゐる。目めも大おほきな目めがあいてゐる。……なア高姫たかひめさま、これを見みても經たてと緯よこと揃そろはねば、變性へんじやうなんし男子ひつぽうの系統ひつぽうばかりでも見みえず、女子によしの行方やりかたばかりでも後先あとさきが見みえぬと云いふ神様かみさまの御教訓ごけうくんですな〆」

高姫たかひめ頻しきりに首くびを振ふり、

高姫たかひめ「ウーン、なんとまア神様かみさまの御經綸ごけいりんと云いふものは恐おそれ入いつたもので御座ございます。これを見みて改心かいしんせねばなりませぬワイ。今迄いままでの三五あななひけう教けうの樣やうに、經緯たてよこの盲同土めくらどうしが盲縞めくらしまを織おつて居をつては、何時いつまで迄までも錦にしきの機はたは織おり上あがりませぬ。夫それに就ついては私わたしが第一だいいち惡わるかつた。經絲たていとはヂツとさへして居をれば良よいのに、緯絲よこいと以上いじやうに藻搔もがくものだから、薩張さつぱりワヤになつて了しまつたのだぢや。あゝ何なにを見みても神様かみさまの教訓けうくん許ばかり、何故なにゆゑ今迄いままでこんな見易みやすい道理だうりが分わからなんだのだらう。ヤツパリ金毛きんまう九尾きうびに眼まなこを眩くらまされ

てゐたのだ」

と長大嘆息をしてゐる。是れより一行は夜を日に繼ぎ、漸くにしてアルの海岸に着いた。幸ひ船はゼムの港に向つて出帆せむとする間際であつた。高姫は慌しく「オーイオーイ」と呼止めた。船頭は今纜を解いて港を少しばかり離れた船を引返し、三人を乗らしめ、折からの南風に帆を孕ませ、ゼムの港を指して波上ゆるやかに迂り行く。

長き海上の退屈紛れに船客の間にあちらこちらと雑談が始まつた。高姫一行は船の片隅に小さくなつて控へてゐる。

甲「去年の事だつたか、此船に乗つてゼムの港へ渡る時の船客の話しに、テルの國のアリナの瀧とやらに大變な玉取神さまが現はれ、彼方からも此方からも、種々雑多の玉をお供へに行つて、いろいろの願事を叶へて貰はうと、欲な連中が引も切らず参拜してゐたさうぢや。さうすると何でもヒルとか夜とか云ふ國の偉いお方が黄金の玉をお供へになつた。玉取神さまはその黄金の玉が氣に入つたと見え、夜さりの間に玉を引つ擔ぎ、何處へ逃げ出し、ウヅの國の櫟ヶ原とかで、折

角持出した玉を、天狗に取上げられ、這々の體でウツの國（アルゼンチン）の大原野を横斷し、アルの港から船に乗つて、アマゾン川の河上まで行つたと云ふ事だ。併し神さまの中にもいろいろあつて、欲な神さまもあればあるものぢやなア。其玉取神さまの大將は、何でも自轉倒島の鷹とか鳶とか鳥の様な名のつく、矢釜しい女神があつて、大切に守つて居つた玉を玉取神が失うたので怒つて叩き出し、其玉を手に入れる迄、歸つて來な……と此廣い世の中に玉の一つ位、何程搜したつて、分りさうなことがないのに、無茶を言うて、いぢり倒したと云ふ話を聞いたが、随分悪い神もあればあるものだなア。屹度其奴には八岐の大蛇やら、金毛九尾の狐が憑いてをつて、そんな無茶なことを言はしたり、さしたりすると云ふ話した。本當に神さまだと云つても、無茶苦茶に信神出來ぬものだ。鷹鳶姫とか玉取姫とか云ふケチな神もある世の中だからなア」

乙「玉取姫位なら屁どろいこつちやが、世間には澤山、嬬取彦や爺取姫が現はれて、随分社會の秩序を紊し、此世の中に惡の種を蒔く神も、此頃は大分に出て來たぞよ。アハ、ハ、ハ、」

と他愛なく笑ふ。高姫は眞赤な顔して小さくなつて、甲乙の談を聞いて居た。

常彦は高姫の耳に口を寄せ、

「高姫さま、どうも世間は廣いやうで狭いものですな。海洋萬里の斯んな所まで、

自轉倒島の出来事が、假令間違ひにもせよ、大體が行渡つて居るとは實に驚きま

したねえ。玉野原の玉の湖の椰子樹の下に、龍國別さまが刻んでおいた四人の石

像、假令何萬年経つたつて、貴女や私達の目にとまる筈がないのに、何百里とも

際限のない野の中に、こんな小つぽけな物が只の一つ、それが斯うして貴女の背

に負はれる様になると云ふも、不思議ぢやありませんか。之を思うと人間も餘程

心得なくてはなりませんア」

高姫「サアそれについて、私は胸も何も引裂けるやうになつて來ました。私が變

性男子様の系統々と云つて、それを鼻にかけ、金毛九尾に誑惑されて、今迄は

一生懸命に嚴の御靈の御徳を落とすこと許りやつて來たかと思へば、如何して此

罪が贖へやうかと、誠に恐ろしく、悲しくなつて來ました」

と涙ぐむ。船客は又もや盛んに喋り出した。

丙「オイお前の云うて居つた鷹鳶姫と云ふのは、ソリヤ高姫の間違ひだらう。そして玉取姫と云ふのは鷹依姫の間違ひだらう。高姫と云ふ奴はなア、徹底的我慢の強い奴で、變性男子とか云ふ立派なお方の腹から生れて、それはそれは意地の悪い頑固者の、利己主義の口達者の、論にも杭にも掛らぬ化物ださうな。そして金剛不壞の如意寶珠とか云ふお寶物を腹に呑んだり、出したり、丸で手品師のやうなことをやる、惡神の容物だと云ふ事だ。噂を聞いて憎らしうなつて來る。どうで遠い自轉倒島の話だから、到底吾々には一代に會ふことは出來まいが、若しも出會うたが最後、世界の爲に俺は素首引抜いてやらうと思つてゐるのだ。何だか高姫の話しが出ると、腹の底からむかついて來て堪らないワ。去年の今頃だつた。高姫に仕へて居つた鷹依姫、其息子の鼻の素的滅法界に高い龍國別、それに一寸人種の變つた、鼻の高い細長い、色の少し白いテーリスタンとかカーリンとか云ふ四人連れが、アリナの瀧の……何でも近所に鏡の池とか云ふ不思議な池があつて、そこに長らく居つた所、俄にどんな事情が知らぬが、居れなくなつて、たうとうアリナ山脈を越えて、ウヅの國の櫟ヶ原を横斷し、アルの港からヒ

ルへ行く途中、誤つて婆アはデツキの上から海中へ陥没し、皆目姿がなくなつて了つた。そこで息子の龍國別が、婆アさまを助けようとドブンと計り飛込んだが、これも亦波に捲かれて行き方知れず、テ、力の二人も續いてドブンとやつたが、此奴もテンで行方が知れなくなつて了つた。彼奴は悪人か何か知らぬが随分親孝行者だ。母親が陥つたのを助けようと思つて、倅の龍國別が飛込んで殉死し、又弟子の二人が助けようと思つたか、殉死の覺悟だつたか知らぬが、共に水泡と消えて了つた。随分此航路では有名な話だ。お前まだ耳にして居らぬのか

乙「成程、親子主従の心中とか云つて、随分有名な話だが、其……何だなア、宣傳の一行のことか、俺や又どつかの親子主従の心中かと思つてゐた。ホンに可哀相なこつたナア」

丙「それと云ふのも元を糺せば、ヤツパリ高姫と云ふ奴が悪いからだ。彼奴が無理難題を云ひかけて、自轉倒島から高砂島（南米）三界迄追ひ出したものだから、たうとうあんなことになつて了つたのだ。四人の宣傳使は可哀相でたまらぬ。俺やモウ其話しを聞いてから、空を翔つてる鷹を見ても癩に障つて堪らぬのだ。人

間にでも鷹と云ふ名の附いてる奴に會うと、其奴が憎らしくなつて来て、擲りつ
けたいやうな氣がするのだよ。赤の他人の俺が、何故鷹依姫や龍國別の、それ丈
鼻屑をせにやならぬかと思うと、不思議でたまらないワ。大方あの陥る時に、ア、
可哀相だと思つて見てゐたものだから、其亡魂でも憑依したのか……。今日は何
だか其タカと云ふ名のついた奴が乗つて居やせぬかなア。何だかむかつてむか
ついで仕方がないのだ」

と目を眞赤にし、齒噛みし、拳を握り、形相凄じく息を喘ませてゐる。

甲「ハ、ハ、ハ、ハ、他人の疝氣を頭痛に病むと云ふのはお前のことだ。そんなこと
はイ、加減にしておけ。何程力んでみた所で、肝腎の本人は海洋萬里の自轉倒島
に居るのだから駄目だよ」

丙「何だか俄に體が震ひ出した。何でも此船に高姫と云ふ奴、乗つてゐるのぢや
あるまいかな。オイ一寸女客の名を、御苦勞だが、一々尋ねて来て呉れぬか」

甲「馬鹿を言ふない、おれが尋ねなくても、船長さまに聞けば、チヤンと帳面に
附けてあるワ」

丙「それもさうだ、そんなら尋ねて見やうかな」

と立上がらうとする。高姫は、丙の袖を控へて、

高姫「モシモシ何處の方かは知りませぬが、鷹依姫、龍國別一行の爲に、能うそ

こ迄一心に思つてやつて下さいませ。定めて四人の者も冥土から喜んで居ること

で御座いませう。あなたは最前から承はれば、四人の海へ落ちたのを見て居なさ

つたさうですが、後に何か残つてゐませなんだか。私があるの憎いと思召す自

轉倒島から来た高姫で御座いますよ。罪の深い私、サアどうぞ貴方の存分にして

下さいませ。さうすれば、四人の者も定めし浮かぶことで御座いませう。今私の

負うて居ります石には、右四人の姿が刻り込んで御座います。かやうなことがあ

らうとて蟲が知らしたのか、チャンと自分から石碑を拵へて残しておいたと見え

ます。あゝ因縁と云ふものは恐ろしいものだ。天網恢々疎にして漏らさず、こん

なことと知つたら、あんな酷いことを云ふのぢやなかつたに」

と云ひ乍ら、背中の石像を前に据ゑ、手を合せ、

高姫「コレコレ四人の御方、どうぞ忪へて下さい。三千世界の御神業に参加せな

くてはならぬ大切な體なれど、私は今此御方に生首を引抜かれて國替を致し、お前さまの側へ行つて、更めてお詫を致します。あゝ惟神靈幸倍坐世。鷹依姫、龍國別、テリスタンにカーリンス、頓生菩提、あゝ惟神靈幸倍坐世。と一生懸命に念じてゐる。丙は高姫の眞心より悔悟した其言葉と舉動とに、今迄張り切つた勢もどこへか抜け、今は却て、高姫崇拜者と心の中で知らず知らずの間にあひだなつてしまつてゐた。

(大正一一・八・一二 舊六・二〇 松村眞澄録)

第一五章 ヨブの入信(八三七)

高姫たかひめの偽いつはらざる告白こくはくに船客せんきやくの一人ひとりは、今迄いままでの憤怒ふんぬの情じやうは何處どこへやら消え失せ、今度こんどは全くまった高姫たかひめに對する同情者どうじやうしやとなつて了つた。丙へいは高姫たかひめに向ひ、
丙へい「私はカーリン島じま(今のフォークランド)のヨブと云ふ者もので御座ございます。去年きよねん

この頃、此カールン丸に乗り、ゼムの港に往來する途中、最前話しました様な、親子主従の溺死を目撃し、夫から何となく憐れを催し、能く探つて見れば、自轉倒島の高姫さまから追ひ出されて、ここまで遙々やつて來た憐れな人だと聞いてから、おのれ高姫見つけ次第素首抜かすにおくものかと、親の仇敵でもあるかの様に、力瘤を入れて憤怒の情に堪へ兼ねてみました、今御本人の高姫さまに出會ひ、聞くと見るとは大變な違ひ、あなたの潔白なる御精神には、此ヨブも感嘆致しました。話と云ふものは兩方聞かねば一方計り聞いては分らぬものです。どうぞ高姫さま、不思議な御縁で此船の中でお目にかかりました。これを機に私を貴女の御弟子にして下さいませぬか。私は兩親もあり、兄も妹も御座いますが、幸ひ部屋住の身で何處まで行つても、神さまの爲なら親兄妹も何も申しませぬ。どうぞ私を何處までもお供をさして下さいませ。又路銀に御困りなら、二年や三年の路銀は丁度ここに携帶致して居りますから、どうぞお供にお願致します。高姫「それは誠に結構な思召しで御座いますが、まだ貴方には執着心がありますから、到底御辛抱は出來ずまい。又御縁がありましたら、其時に御世話になり

ませう。併しどうぞ三五の道の信者におなり下さいませ」

ヨブ「私は素より三五教の信者で御座いますよ。別に教會とか、教典とか又は經

文とか、形式的の道は踏んで居りませぬが、誠の宗教は決して教會や儀式などか

ら生れるものでは御座りませぬ。どうぞ左様な結構なお道を世界に宣傳し、同じ

人間と生れて、一生を暮すならば、世界の人民を助け、喜ばれて此世を過ぎし度

う御座います。どうぞお氣に入りますまいが、貴女のお弟子にして下さいませ」

高姫「一寸御様子を見れば、随分あなたは新しい學問をしてゐるお方のやうだ。

餘程お伶俐な方とみえますから、到底私のやうな無學文盲な昔人間の云ふことは

お氣に入りますまいから……」

ヨブ「誠の道は學問や智慧で分るものではありません。私は貴女の言心行一致の

誠に感心をしたので御座います。今の世の中は口と心と行ひと全然反對な者ばか

り、どうぞ誠の人を見つけて、世界の爲に盡し度いと、寢ても醒めても神様に祈

願を籠めてみました。今日も今日とて大悪人と思ひつめてみた、貴女の言心行一

致の執着心のない信仰心の強いのを實地拜見致しまして、何とも愉快でたまりま

せぬ。貴女の弟子になることが出来ませねば、せめて荷持になりと連れて行つて下さいませ。此宇都の國から巴留の國（現今のブラジル）の海岸は、私は詳しく存じてゐますから、どうぞ道案内旁御供をさして下さる様に御願致します。」

高姫「私一了見では参りませぬ。ここに同行致してをります常彦、春彦の御意見を伺ひまして、其上で御返事を致しませう。……なア常彦、春彦、あなたも今お聞きの通り、此方の仰有ること如何思はれますか。どうぞ御意見を腹藏なく今此處で仰つて下さいませ。」

常彦「それは誠に結構だと思ひます。……なア春彦、お前も賛成だらう。」

春彦「私もズツト賛成です。ヨブさまがここへ加はつて下されば、丁度神様を一靈とし、吾々が四魂となつて、御用を致しますのに、大變な好都合で御座います。」

高姫「あゝ御二人共御同意下さいましたか、それは誠に喜ばしいこつて御座います。……モシモシヨブ様、お聞の通りで御座いますから、どうぞ宜しくお願ひ致します。」

ヨブ「ハイ早速の御聞濟み、これに越したる悦は御座いませぬ。どうぞ末永く御

使ひの程御願致します「

高姫「併し乍らあなた最前路銀を澤山持つてると仰せられましたが、吾々宣傳使は餘り澤山の路銀は必要が御座いませぬ。どうぞ夫を難儀な人に、ゼムの港へ御上陸になつたら分けてお上げ下さい。さうでない誠の御神徳を頂けもせず、本當の御用も勤まりませぬ。身魂の因縁性來で、神様の御用が出来るので御座いませぬから、宣傳使として決してお金なんか必要が御座いませぬ、野に寝たり、山に臥たり、辻堂に寝たり、種々修業致して、世界の人民に安心立命を與へ、天下泰平の祈願を致すのが宣傳使の職責で御座いますから……夫と綾の聖地とか、波斯の國齋苑の館の御普請とかにお獻げ下さるのなら結構で御座いますが、併し其お金は如何して御手にお入れ遊ばしたのですか。まだお年も若いし、お金の儲かる鹽梅も御座いませぬが、大方兩親の財産でも分けてお頂きになつたのでせう「

ヨブ「ハイ、御察しの通り、兩親から各自に財産の分配を受けて居ります。夫だから決して怪しき金でも、盗んだ物でも御座いませぬから、そんならどうか神様の御普請にお使ひ下さいませぬか「

高姫「あなたが汗脂を絞つて苦勞の塊で蓄めたお金なら、神様もお喜びでせうが、親讓りの財産で、自分の手も汚さず、懐にしたお金は苦勞が【しゆん】でゐませぬから、神様にお上げしても御喜びにはなりません。どうぞそれは慈善的に、難儀な人にお與へ下さいませ。世界の人民は皆神様の尊い靈の宿つたお子様で御座いますから、言はば人民同志は兄弟も同様、兄弟を大切にするのは、親神様は大變お喜びで御座いますからなア」

ヨブ「イヤ能く分りました。左様ならば其考へに致します。金錢などは實のところ煩くて堪らないのですが、これが無くては旅も出来ませぬので、せう事なしに重たいものを腹に巻いて歩いて居ります」

船客の一人甲は此話しを聞いて側に寄り來り、

甲「モシモシ ヨブさま、あなたは愈此方のお弟子になる積りですか」

ヨブ「お察しの通りです。どうぞ國へお歸りになつた時には、私の兩親始め兄弟親類、村中の方々に宜しく云つて下さいませ」

甲「ハイ承知致しました。併し乍ら今承はれば、あなたは所持金を一切慈善的に

難儀なんぎなものに施ほすと云いはれましたなア。同じ人ひとを助たすけるのならば、カーリン島たうにも澤山たくさんな難儀なんぎな人民じんみんが居をりますから、國くにを立たつたお土産みやげに島人しまびとの難澁なんじふなものにお與あたへになつては如何どうです」

ヨブ「あゝさう願ねがひませうか」

甲「オイ、ヤコブ、お前まへも一緒いっしょにヨブさまから今いまお金を受取うけとつたら證人しょうにんになつて呉くれ、若もし間違まちがうと困こまるからなア」

ヨブ「タールさまの正直しやうぢきまじやうだう正道しやうぢきまじやうだうのあなた、決けつして間違まちがひはありますまい。最早もはやあなたのお手てに渡わたした以上いじやうは、私わたくしのお金かねではありませんせぬ、あなたの御自由ごじいゆうになさつたらいいのです。別にべつにヤコブさまを、七しちむづかしい、證人しよひにんなんか立たてる必要ひつえうはありますまい。併しかしヤコブさまが同意どういして下くださらば、お二人ふたりに分わけて預あづかつて貰もらひませう」

ヤコブ「どちらなりと、あなたの御意ぎよいに従したがひます」

ヨブは懷ふとこぼより澤山たくさんの小判こばんを取とりだ出し、其一部分そのいちぶぶんは「まさか」の用意よういと後あとに残のこし、九分くぶ迄まで兩人ふたりに托たくし、

ヨブ「どうぞ難澁な人に、お前さまから與へて下さい。決してヨブの金だとは言
つて下さいませぬ。人に施す時は、右の手にて施すのを、左の手にて知れない様に
せよ……との神様の御示しも御座いますから、どうぞ其お積りでお願ひ致します
兩人は感心し乍ら、其金を受取り歸國の後、ヨブの依頼の如く、數多の貧しき
人々に、一文も残らず正直に與へて了つた。
高姫、常彦、春彦もヨブの恬淡無欲なるに感じ入り、大に其行爲を賞揚した。
常彦は立ち上り、歌を謡つてヨブの入信を祝した。

常彦「神が表に現はれて 善と惡とを立別ける

此世を造りし神直日 心も廣き大直日

只何事も人の世は 直日に見直し聞直し

過りあれば宣り直す 三五教の神の道

高姫司が今迄は 正邪の道に踏み迷ひ

我情我欲を立通し 下を虐げ上押へ

變性男子の系統と

日の出神の生宮を

眞向上段に振翳し

三五教の人々を

朝な夕なに威喝して

鳥なき里の蝙蝠と

成りすましたる愚さよ

心の暗はいや深く

黑白も分かぬ黒姫が

黄金の玉を紛失し

心痛むる折柄に

高姫司が嗅ぎつけて

悪鬼のやうな顔色で

小言八百竝べ立て

黒姫さまを始めとし

鷹依姫や龍國別の

教の司やテー、カーの

五人の司を無残にも

綾の聖地を追ひ出し

海洋萬里の龍宮島

高砂島迄追ひ出し

自分も玉を紛失し

再び心の暗雲に

包まれ聖地を後にして

南洋諸島や高砂の

島に又もや渡り來て

金剛不壞の如意寶珠

紫玉や黄金の

珍うづの寶玉ほうぎよく麻邇まにの玉たま

言こと依別よりわけの教主けうしゆ等らが

着服ちやくふくなして海外かいぐわいへ

姿すがたを隠かくし三五あななひの

神かみの元もとなる嚴御魂いづみたま

變性へんじやうなんし男子たてに楯たてをつき

謀叛むほんを企たくむに違ちがひない

こりや斯こうしては居をられぬと

夜叉やしやのやうなる勢いきほひで

靈界あのよ現世このよの瀬戸せとの海うみ

馬關ばくわん海峽かいけつアンボイナ

ニユージランドやオセアニア

高砂島たかさごしまの奥おくまでも

探さぐり探さぐりて鏡池かがみいけ

懸橋かけはし御殿ごてんに侵入しんにふし

又またもうるさい玉騷たまさわぎ

月照彦つきてるひこの化身けしん等に

散々さんざん脂あぶらを絞しぼられて

命いのちからがら逃にげ出いだし

アリナの峰みねを乗のり越こえて

アルゼンチンおほのほらの大野原おほのほら

櫟くぬぎヶ原がはらの眞中まんなかに

ポプラしげの茂しげみを宿やどとなし

一いち夜ちやを明あかす其中そのうちに

木この花姫はなひめの化身けしんなる

日ひの出姫でのひめの深遠しんゑんな

神示しんじを受うけて改心かいしんし

執着しつちやくしん心を拂拭ふつしきし

生れ赤子になりければ

隙を覘つて憑いてみた

金毛九尾の悪狐奴が

みたたまらずに肉體を

後に残して雲に乗り

常世の空に逃げて行く

それから後の高姫は

日の出神の生宮か

木の花姫の再來か

たとへ方なき善良の

忽ち身魂となり變り

昨日の鬼は今日の神

實にも尊き神柱

心の空につき固め

アイルの激しき荒河を

神の造りし鰐の橋

易々渡りて玉の湖の

畔に漸く辿りつき

高姫司を始めとし

常彦、春彦諸共に

椰子樹の森に横たはり

一夜を明かし目を醒まし

あたりキヨロキヨロ見廻せば

鷹依姫や龍國別の

教の司やテ、カーの

四人の姿を刻みたる

石を眺めて拜禮し

悔悟の涙せきあへず

ここに全く改心の
開悟の花は満開し

森羅万象悉く
至善至樂の光景と

變りたるこそ面白き
吾等三人は玉の湖の

錦の魚に教へられ
經と緯との經綸を

隈なく悟りやうやうに
アルの港に来て見れば

折よく船は出帆の
閒際なりしを幸ひに

嬉しく乗りて今此處に
胸凧ぎ渡る海の上

タールや、ヤコブ、ヨブさまの
世間話に花が咲き

聞くとともになしに聞き居れば
鷹依姫や龍國別の

教の司の一行が
大和田中に落ち入りて

みまかり玉ひし物語
吾等の胸に轟きつ

涙を抑へて聞く中に
高姫さまの物語

鷹依姫が一行の
奇禍にあひしも其元を

詳しく探れば高姫が
我情我慢の結果ぞと

聞いて吾等は胸痛め
如何ならむと思ふうち

身魂も清き高姫は
打つて變つて正直に

おのが前非を告白し
捨身の覺悟をなし玉ふ

其雄々しさにヨブさまも
日頃の怒りは氷解し

打つて變つた機嫌顔
不言實行の行動に

感じ玉ひて高姫が
御弟子にならむと請ひ玉ふ

あゝ惟神々々
神の御靈の幸はひて

高姫さまの今日の胸
旭の如く澄みわたり

照り輝くぞ雄々しけれ
高姫さまの改心が

若しや遅れてみたならば
カーリン丸の船中で

ヨブに素首引抜かれ
吾等は悲しき長旅の

何と詮術波の上
泣けど叫べど甲斐もなく

悲しき別れせしならむ
朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも
假令大地は沈むとも

誠まこと一つは身を救すくふ

誠まことの道みちの御教みをしへを

只ただ一筋ひとすぢに是これからは

脇目わきめもふらず進すすみなむ

神かみは吾等われらを守まもります

神かみの御旨みむねに叶かなひなば

如何いかなる事ことか恐おそれむや

茲ここに常彦つねひこ謹つしみて

高姫たかひめさまの御改心ごかいしん

入信にふしんされたヨブさまの

目出度めでたき今日けふの生いく日をば

喜よろこび勇いさみ祝ほぎまつる

あゝ惟かむながら神かむながら々々

御靈幸みたまさちはひましませよ

と歌うたひ終をはり、腰こしを下おろした。高姫たかひめを始はじめ、ヨブ其その他のた船中せんちゆうの人々ひとびとは常彦つねひこが現げん在ざい高姫たかひめを前まへにおき、露骨ろこつに其その經路けいろを語かたりたる公平こうへい無私むしの態たい度どに感嘆かんとんの舌したを卷まくのであつた。

(大正一一・八・一二 舊六・二〇 松村眞澄録)

第一六章 波の響（八三八）

常彦が祝を兼ねたる伴らざる告白歌に勵まされ、ヨブは立上がり、入信の祝歌を歌った。

ヨブ 高天原と定まりし 貴の聖地のエルサレム

國治立大神は 三千世界を救はむと

神の御言を畏みて 教を開き玉ひつつ

天地の律法制定し 世は平安に治まりて

神人和樂の瑞祥を 樂み玉ふも束の間の

隙行く駒の曲神に 天の御柱國柱

轉覆されて葦原の 瑞穂の國の守護權

常世の國に生れたる 曲の頭に渡しつつ

天教山の火坑より 根底の國におりまして

忍びて此世を守ります
其功績ぞ尊けれ

斯かる尊き皇神の
いかで此儘根の國や

底の御國にましまさむ
時節を待つて天教の

再び山に現はれて
野立の彦と名を變じ

埴安彦と現れまして
迷へる四方の人草を

安きに救ひ助けむと
仁慈無限の心より

三五教を建設し
神の司を四方の國

間配り玉ひて川の瀬や
山の尾の上に至る迄

尊き御教を布き玉ふ
あゝ惟神々々

神の心を白波の
天足彦や胞場姫が

罪より現れし醜神の
醜の叫びに化されて

世人の心日に月に
曇り行くこそ忌々しけれ

嚴の御靈の大神は
國武彦と現れまして

四尾の山の神峰に
此世を忍び玉ひつつ

五六七の御世の經綸を
行ひ玉ひ素盞鳴の

神尊の瑞御靈
コーカス山や産土の

齋苑の館に現れまして
八洲の國にわだかまる

八岐の大蛇や醜狐
曲鬼共を言向けて

天地にさやる村雲を
神の伊吹に拂はむと

心を配らせ玉ひつつ
言依別を現はして

自轉倒島の中心地
綾の高天と聞えたる

錦の宮に神司
清き神務を命じつつ

世人を救ひ玉ひけり。
旭日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも
假令大地は沈むとも

高砂島は亡ぶ共
誠の神の御教に

いかでか反きまつらむや
大和田中に浮びたる

カーリン島の神の御子
ヨブは今より高姫が

清き心を諾なひて
假令野の末山の奥

とらほかみ 虎狼や獅子大蛇
いかに 如何なる曲津の棲處をも

おく 臆せず道の爲
こころ 心を盡し身を盡し

すめおほかみ 皇大神や世の中の
あをひとぐさ 青人草の其爲に

つか 仕へまつらむ惟神
かみ 神の恵の幸はひて

みたま ヨブが身魂を研き上げ
たふと 尊き貴の御柱と

よ 依さし玉へよ天津神
くにつかみたち 國津神達八百萬

おんまへ 國魂神の御前に
つつし 謹み敬ひ願ぎまつる

かむながら あゝ惟神々々
みたまさち 御靈幸はひましませよ

と 歌ひ終つて座に着いた。
はるひこ 春彦は又もや歌ひ出したり。

あや 綾の聖地を後にして
へんじやうなんし 變性男子の御系統

たかひめ 高姫さまに従ひて
せとないかい 瀬戸内海を打渡り

なんやうしよたう 南洋諸島を駆けめぐり
にょい 如意の寶珠を探ねつつ

高砂島の手前まで

小舟を操り来る折

隠れた岩に突當り

當惑したるをりもあれ

高島丸に助けられ

漸くテルの港まで

到着するや高姫は

數多の船客かきわけて

先頭一に上陸し

吾等二人をふりまいて

暗間の山の松林

姿を隠し玉ひしが

綾の聖地に現れませる

空助さまに高姫の

監督役を命ぜられ

居乍らのめのめ見失ひ

如何して言譯立つものか

急げ急げと一散に

尻ひつからげ大地をば

ドンドン威喝させ乍ら

暗間の山の麓迄

來りて様子を窺へば

高姫さまの獨言

常彦、春彦兩人の

半鐘泥棒や蜥蜴面

間拔男を伴うて

高砂島の人々に

輕蔑されてはたまらない

何^{なん}とか立^り派^{つぱ}な國^{くに}人^{びと}を
 甘^{うま}く操^{あやつ}り弟^で子^しとなし
 千^{せん}變^{べん}萬^{ばん}化^{くわ}の一^{ひと}芝^{しば}居^ゐ
 打^うつて見^みようと水^{みづ}臭^{くさ}い
 吾^{われ}等^ら二^{ふた}人^{たり}を放^は棄^うして
 甘^{うま}い事^{こと}のみ考^{かん}へる
 其^{その}蔭^{かげ}言^ごを灌^{くわ}木^{んぼく}の
 茂^{しげ}みに隠^{かく}れて聞^きき終^{をは}り
 餘^{あま}りに腹^{はら}の立^たつままに
 ガサガサガサと飛^と出^びせば
 高^{たか}姫^{ひめ}さまの曰^{いは}くには
 油^ゆ斷^{だん}のならぬ世^よの中^{なか}ぢや
 假^{たと}令^へ獸^{もの}といひ乍^{なが}ら
 今^{いま}の祕^ひ密^{みつ}を聞^ききよつた
 神^{かみ}の靈^{みたま}を授^{さづ}かりし
 四^よつ足^{あし}なれば一^{ひと}言^{こと}も
 聞^きかれちや都^つ合^ががチト惡^{わる}い
 天^{てん}に口^{くち}あり壁^{かべ}に耳^{みみ}
 謹^{つつし}むべきは口^{くち}なりと
 後^{こう}悔^{くわい}遊^{あそ}ばす可^を笑^かしさよ
 常^{つね}彦^{ひこ}、春^{はる}彦^{ひこ}兩^{りやう}人^{にん}は
 足^{あし}音^{おと}隠^{かく}して二^に三^{さん}丁^{ちやう}
 山^{やま}の麓^{ふもと}に忍^{しの}び足^{あし}
 それから足^{あし}音^{おと}高^{たか}めつつ
 ヒルの國^こ王^{ぎし}のお側^{そば}役^{やく}
 私^{わたし}はアナンと申^ます者^{もの}
 暗^{くら}間^まの山^{やま}に如^に意^よ寶^い珠^{しゆ}
 隠^{かく}してあると聞^きいた故^{ゆゑ}

私は捜しに行きました

されど遅れた其爲に

後の祭りまつと常彦つねひこが

聲高々こゑたかだかと話はなしする

そこで私はテルの國

國王様のお側役

カナンと申す男をとこぞと

八百長話を始はじむれば

猫が松魚節まつぶし見た如やうに

高姫さまが飛とびついて

もうしもうし旅たびの人ひと

暫しばくお待まちちなされませ

變性男子へんじやうなんしの系統ひつぽうで

日の出神ひのかみの生宮いきみやと

世よに謳うたはれた高姫たかひめぢや

お前まへも中々なかなか偉えらい人ひと

私の話わたしを聞ききなされ

昔むかしの昔むかしの根本こつぽんの

尊たふとき因縁いんねん聞きかさうと

お婆ばアの癖くせに小娘こむすめの

やうな優やさしい作つくり聲こゑ

吹ふ出すようだに思おもへども

ここで笑わらうては一大事いちだいじ

大事だいじの前まへの小事せうじぢやと

脇わきのあたりでキューキューと

笑わらひの神かみをしめつけて

足音あしおと低ひくく高たかくして

遙はるか向むかうから後あと戻もどり

して来たように作りなし どの何方か知らね共

私に向つて何御用 早く聞かして下されと

吾から可笑しい作り聲 流石の高姫嗅ぎつけて

お前はアンナと云ふけれど 半鐘泥棒の常彦だ

カナンと名乗る蜥蜴面 春彦さまにきまつたり

餘り人を馬鹿にすな 聲を尖らし怒り出す

暴風襲來低氣壓 二百十日の風害も

來らむとする其時に 私がアンナと云うたのは

お筆先にもある通り 神の仕組はアンナ者

こんな者になつたかと 世界の人がビツクリし

アフンとさせるお仕組ぢや カナンと云うて名乗つたは

春彦さまの平常は 赤子のやうな人なれど

神が憑つた其時は 誰でもカナン身魂ぢやと

言はして人を大道に 導くお役と逆理窟

一本かましてやつたれば 高姫さまは腹を立て

私等二人を振すてて 又も逃げよとする故に

高島丸の船中で 國依別に面會し

金剛不壞の如意寶珠 其他珍の御寶を

拜見さして貰うたと カマをかけたなら高姫が

玉にかけたたら夢うつつ 忽ち機嫌を直し出し

ホンにお前は偉い人 氣の利く男と思つてみた

さうして如意の寶玉は 國依別が如何したか

知らしてお呉れと云ふ故に 此春彦は知らねども

狐のやうに常彦が 眉毛に唾をつけ乍ら

三千世界の神寶は 高砂島にコツソリと

言依別や國依の 神の司が出て參り

何々々に何々し 絶對秘密ぢや云はれない

國依別のお言葉に お前を男と見込んでの

肝腎要の祕密をば 明かした上は高姫に

決して云ふちやならないぞ 私も常彦宣傳使

言はぬと云つたらどこ迄も 首がとれても云はないと

約束したから如何しても 高姫さまには濟まないが

これ許りは御免だと キ常彦口から出任せに

からかひまはす可笑しさよ とうとう喧譁に花が咲き

常彦私の兩人は 高姫さまを振すてて

今度は二人が逃げ出した 高姫さまは驚いて

吾等二人を引捉へ 玉の所在を白状させ

綾の聖地に持歸り 日の出神の生宮の

天眼通は此通り 皆さまこれから吾々の

言葉に反いちやならないと 法螺吹き立てる御算段

そんな事には乗るものか 三十六計奥の手を

最極端に發揮して 雲を霞と驅け出せば

高姫さまは道の上の

高い小石に躓いて

大地にバタリと打倒れ

額を打破り膝挫き

生血を流してアイタタと

頭を撫でたり膝坊主

押へて顔をしかめゐる

此時四五の若者は

どこともなしに出で来り

高姫さまを介抱して

抱き起して助くれば

いつも變らぬ減らず口

結構なおかげをお前等は

頂きなさつた神様に

御禮なされよ私にも

御禮を仰有れ神の綱

私がかけて上げました

などと又もや世迷言

玉の所在を知ると云ふ

一人の男に騙されて

アと云つては金一兩

りと聞いては金一兩

ナーと云つては金取られ

瀧と云つては二兩取られ

鏡の池と六つの口

又もや六兩はぎ取られ

呑み込み顔で高姫が

吾々二人が路端に

憩ふ所をドシドシと
 肩肱いからし高姫は
 日の出神の御告げにて
 玉の所在を知つた故
 これから獨り行く程に
 間拔男は來るでない
 神の仕組の邪魔になる
 必ず従いて來てくれな
 言葉を殘してドンドンと
 テル國街道を走せて行く
 吾等二人は高姫が
 後を追ひつつ驅出して
 牛のお尻に衝突し
 ヤツサモツサと争ひつ
 牛童丸に横笛で
 首が飛ぶ程横ツ面
 やられた時の其痛さ
 常彦さまが行つた事
 私は傍杖くわされて
 あんなつまらぬ事はない
 牛童丸に牛貰うて
 常彦さまは牛の背
 私は綱を曳き乍ら
 小川を傳うて杉林
 十間許り遡り
 高姫さまが他愛なく
 休んでゐる其前に
 牛引つれて往て見れば

モウモウモウと唸り出す

其大聲に目を醒まし

高姫さまはうるさがり

又も二人を振棄てて

アリナの瀧に只一人

玉を占領せむものと

行かうとしたので吾々は

お前はアリナの瀧の上

鏡の池に行くのだろ

吾等二人は牛に乗り

お前さまより二三日

先にアリナへ到着し

玉を手にして歸ります

左様ならばと立出づる

高姫さまは又しても

猫撫聲と早變はり

コレコレ常公春公へ

私の心を知らぬのか

海山越えてはるばると

こんな所迄やつて来て

お前に別れて如何ならう

一緒に行かうぢやないかいと

相談かけて呉れた故

モウモウモーさん歸んでよと

牛に向つて言靈を

發射致せばアラ不思議

煙となつて消えにける

夫れより三人手を引いて

テルの街道ドシドシと

大西洋を眺めつつ

アリナの瀧のほとりなる

鏡の池に来て見れば

數千年の沈黙を

破りて池はブクブクと

泡を立てたりウンウンと

厭らし聲にて唸り出す

高姫さまは玉どこか

肝腎要の魂抜かれ

焼糞氣味になりました

月照彦神さまと

いろはにほへとちりぬるの

四十八文字の掛合に

奴肝を抜かれて失心し

人事不覺となられける

懸橋御殿の神司

現はれまして高姫を

助け玉へば高姫は

相も變らぬ憎い事

百萬ダラりと竝べ立て

側に控えた吾々も

餘り憎うて横ツ面

擲つてやりたいよに思うた

夫程分らぬ度し太い

高姫さまもどうしてか

櫟ヶ原の眞中で

天教山に現れませる

木の花姫の御化身

日の出姫の訓戒に

心の底から改心し

虎と想うた高姫が

サツパリ猫と早變り

それから段々おとなしく

もの言ひさへも改まり

誠に可愛うなつて來た

玉の湖水の畔にて

椰子樹の森に夜を明かし

鷹依姫や龍國別の

神の司やテー、カーの

姿を刻んだ石地藏

眺めて高姫手を合し

コレコレ四人のお方さま

此高姫が悪かつた

どうぞ勘忍しておくれ

黒姫さまの過ちを

お前さま等に無理云うて

綾の聖地を放り出し

苦勞をかけたは濟みませぬ

罪亡しに今日からは

お前等四人の姿をば

刻んだ重たい此石を

背中を負うて自轉倒の

島迄大事に連れ歸り

祠を建て奉齋し

朝晩お給仕致します

どうぞ許ゆるして下くだされと 心こころの底そこから善ぜん心に

立返たちかへられた健けなげ氣げさよ 餘あんまり早はやい變かはりよで

私わたしも一寸ちよつと疑うたがうた アルの港みなとで船ふねに乘のり

高たか姫ひめさまが偽いつはらぬ 其その告こくはく白はくに感かん歎たんし

ヨブさま迄までが驚おどろいて 高たか姫ひめさまの弟でし子しとなり

入に信ふしんされたお目め出で度たさ あゝ惟かむながら神かむながら々々

神かみの恵めぐみは目まのあたり こんな嬉うれしい事ことはない

高たか姫ひめ様の御ご改かい心しん 入に信ふしんなされたヨブさまの

前ぜん途と益ます々ます健けん全ぜんに 渡わたらせ玉たまひて神しん徳とくを

世せ界かいに照てらし玉たまふ日ひを 指ゆび折をり數かずへ待まちまする

あゝ惟かむながら神かむながら々々 御み靈たま幸さちはひましませよ』

最さい後ごに高たか姫ひめは改かい心しんと入に信ふしんの悦よろこびの歌うたを唄うたひけり。

あゝ惟神々々 尊き神の御恵に

常夜の暗も晴れわたり 眞如の月は村肝の

心の空に輝きて 金毛九尾の曲神に

すぐはれ居たる吾身魂 今は漸く夢醒めて

曲津の神の影もなく 神の賜ひし伊都能賣の

靈の光輝きて 心の悩みも消え失せぬ

旭は照る共曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも 一旦改心した上は

身魂の此世にある限り 天地に誓うて變らまじ

此高姫の改心が 一日遅れて居つたなら

此船中でヨブさまに 命取らるるとこだつた

變性男子の筆先に 何よりかより改心が

一番結構と云うてある 改心すれば其日から

敵もなければ苦勞もない 早く改心なされよと

幾度となく書いてある
あゝ改心か改心か

木の花姫の御言葉で
始めて悟つた改心の

誠の味は此通り
私を仇と狙うたる

カーリン島のヨブさまが
打つて變つて高姫を

師匠と仰いで入信し
無事に此場の治まりし

其原因を尋ねれば
ヤツパリ私の改心ぢや

改心入信一時に
善い事計りが降つて来た

こんな嬉しい事はない
さはさり乍ら海中に

陥り玉ひし四人連
思へば思へばいぢらしい

せめては靈を慰めて
朝な夕なに奉齋し

叮嚀にお給仕致しませう
鷹依姫や御一同

廣き心に見直して
私の罪を赦しませ

あゝ惟神々々
神の御前に愼みて

今日の慶び永久に
感謝しまつり鷹依姫の

のり
つかさ
三人の

めいふくの
たてまつ
冥福祈り奉る

あゝ
かむながらかむながら
惟神々々

みたまさち
御靈幸はひましませよ

か
うた
をは
斯く歌ひ了りて、莞爾として座に着いた。船は三日三夜さ海上を逸走し、漸く

みなと
あちやく
ゼムの港に安着した。高姫一行四人はここに上陸し、ゼムの町を二三里許り隔て

てんしやうざん
だいばくふ
たる天祥山の大瀑布に御襖をなすべく、意氣揚々として、宣傳歌を歌ひ乍ら山深

すす
い
く進み入りにける。あゝ
かむながらたまちはへ
惟神靈幸倍坐世。

(大正一一・八・一二 舊六・二〇 松村眞澄録)

第四篇 海から山へ

第一七章 途上の邂逅（八三九）

高姫一行は、海上波も静かに神徳著しく、漸くにしてゼム港に安着した。此地は船着きの事とて相當に人家も稠密であつた。老若男女は高姫一同の宣傳使姿を見て、物珍らしげに目送し乍ら、口々に囁き合つて居る。

甲「去年の恰度此頃だつた。婆アの宣傳使が一人と、男の宣傳使が三人、尾羽打枯らして、淋しさうな恰好で、宣傳歌とやらを唄ひ、ここを通りよつたが、今年

も又廻つて來よつただないか。併し乍らあの婆アは少し若うなつてるぢやないか。一生懸命宣傳歌を唄つてると、年寄りでもヤツパリ若くなると思えるなア」

乙「馬鹿言ふな。去年通つた宣傳使は、三五教の鷹依姫と云ふ婆アだ。一人は息子で、後二人はあの婆アの従僕といふ事だつたよ。カーリン丸から海中に墮ちて、婆アを始め四人の行方が不明となつて、大搜索をしたものだが、何時の間にか、大きな龜の背中に乗つて四人共ゼムの港に悠々と浮みあがり、大勢をアツと言はした婆アさまに比ぶれば、餘程見劣りがするよ。大方彼奴ア、あの婆アの弟子位

なものだらう。併し妙な事があるものぢやないか。丁度去年の今日ぢやつた。日
と云ひ刻限迄チツとも違はずに、婆ア一人男三人の宣傳使が、此街道を通ると云
ふ事は實に不思議なものだなあ」

甲「それが所謂神の因縁と云ふものだらうかい。何でも婆アのお伴をしてゐたテ
とか、カーとか云ふ男の話では、可哀相に年が老つてから、自轉倒島を追ひ出さ
れ、こんな所迄出て来て、艱難苦勞をしてると云ふ事だ。其又追出した高姫とか
云ふ奴、聞いても憎らしいよな婆アだなア。人の事でも腹が立つ。彼奴は大方其
高姫と云ふ奴ぢやなからうかなア」

乙「さうかも知れぬな。何でも高姫は鷹依姫より十歳計り年が若いと聞いてゐた
から、ヒヨツとして、的さまかも知れぬぞ」

と聞えよがしに、大きな聲で喋つてゐる。高姫はこれを聞くより、二人の男の側
に、ツカツカと進み寄り、

高姫「モシモシ今あなたの御話を耳にしますれば、三五教の鷹依姫さまとやらが、
ここを御通りになつたと仰有いましたが、本當で御座いますか」

乙「本當だとも、本島には三五教の高姫の様な出鱈目を云つたり、都合が悪ければ嘘をつくと云ふ様な者は一人も御座いませぬワイ」

高姫「あゝ左様で御座いますか。有難う御座います。さうして其鷹依姫さまの一行はどちらへ行かれましたか、御存じなれば、御知らせ下さいませぬか」

乙「噂に聞けば天祥山の瀑布で、暫く荒行をし、それから山越しにチンの港へ出て、何でもアマゾン河を溯つて、モールバンドの澤山に棲みしてをる玉の森とかへ行つたとか云ふ話だ」

高姫「あゝ左様で御座いましたか、どうも御邪魔を致しました。……サア皆さま、参りませう」

甲「コレコレ婆アさま、一寸待つた。お前は鷹依姫を追つ放り出した、意地悪婆アの高姫ではあるまいかなア」

乙「オイそんな事を尋ねるに及ばぬぢやないか。意地くねの悪い三五教の高姫とチヤンとあの顔に印が入つてゐるぢやないか。お前も餘程察しの悪い男だなア」

甲「お前の云ふ通りだ。いくら頭腦の悪い俺でも、一見して高姫だと云ふ事は分

つてゐるワイ。……コリヤ高姫一寸待て！貴様に申渡すべき仔細があるのだ」
高姫「御察しの通り、妾は高姫に間違ありませぬ。さうして又お前は鷹依姫様の
事に付いて、エロウ御詳しい様だが、一體あの方とは、如何云ふ御關係があるの
ですか」

甲「有るの無いのつて、鷹依姫さまは俺達の生命の親だ。あの御方が去年天祥山
の瀧へ来て呉れなかつた位なら、俺達二人は今頃は此世の明りを見る所か、白骨
になつて居る所だ。其命の恩人を虐待して、無理難題を申し、この様な所まで追
放しよつた高姫こそ生命の親の仇敵だ。サア高姫、モウ斯うなつた以上は天運の
盡きだ。冥途の旅立をさしてやらう。覺悟せ」
と懐よりピカツと光る物を取り出し、兩方から突いてかからうとする。高姫はヒラ
リと體をかはした。ヨブは二人の眞ん中に大手を擴げ、
ヨブ「マア待つた待つた。これには深い譯があるのだ。俺も今迄此高姫を見付け
次第、生首引抜かによおかぬと、附け狙うて居つたが、事情を聞いて、今は俺も
高姫さまの御弟子となつたのだ。マア待つてくれ。お前はカーリン島のマイルに

ボールぢやないか」

マール「さう云ふお前はヨブさまか、久し振りだつたなア」

ヨブ「チツとお前等兩人、改心が出来たかなア」

マール、ボールの二人は、

「ハイ」

と俄に態度を改め、

兩人「先年は誠に濟まぬ事を致しました。斯う云ふ所でお目に係るのも、ヤツパ

リ天罰が循つて來たのでせう」

ヨブ「イヤ過去つた事は云ふに及ばぬ。高姫さま始め二人の方が居られる前だか

ら、俺は何にも言はぬ。其代りに是から俺が高姫さまの因縁を説いて聞かしてや

るから、しつかり聞いてくれ。今迄の罪はスツカリと帳消しにしてやるから……」

マール「ハイ有難う御座います」

ボール「改心致しまして、御話を聞かして貰ひませう」

ヨブ「最前お前は鷹依姫さまを命の親だと云つたが、そりや又如う云ふ理由だ。

其譯を聞かしてくれ」

マール「實の所はカーリン島では無頼漢と言はれ、悪漢と罵られ、誰一人相手になつてくれる者もなし、餘り面白くないのでお前の家へ夜中に忍び込み、三百兩の金をボツたくり、首尾克く逃ようとす所、お前が外から歸つて來ると門口で出會ひ……ヤアお前はマール、ボールの兩人だないか……と言はれた時の恐ろしさ。コリヤきつと島の規則にてらして、明日は兩人共締め首の刑に遇はねばならぬと、小舟を盗み出し、暗に紛れて夜を日に繼いで、どうやら斯うやら、ゼムの港迄風に吹きつけられ……ヤアこれで一安心だ。併し乍らどうも自分の後から追手が來さうで、恐ろしくてたまらないものだから、コリヤ天祥山の瀧に打たれて、一つ修行をし、神様に罪を赦して戴かうと、それから毎晩瀧にひたつて、修業をやつて居りました。そした所が、何時の間にか、モールバンドがバサリバサリと長い尾をツンと立て乍ら、赤裸で二人が瀧に打たれて居る前へやつて來て、尻をブリブリ振り立てて尾の先の劍にて吾々を打たうと身構して居る。此奴アたまらぬと一生懸命に天地の神様を念じて見たが、中々容易に退却する所か、益々其

尾を振り動か(うご)かし、今(いま)や二人(ふたり)の體(からだ)は尻尾(しつぽ)の劍(つるぎ)に切(き)られて、眞(ま)二つにならむとする所(ところ)、
俄(にはか)に宣傳歌(せんでんか)が聞(き)え出(だ)した。其聲(そのこゑ)を聞(き)くと共(とも)に、モールバンドの奴(やつ)そろそろ尾(を)を縮(ちぢ)めて短(みじ)くし出(だ)した。宣傳歌(せんでんか)の聲(こゑ)は段々(だんだん)と高(たか)くなつて來(く)。モールバンドの怪獸(くわいじゅう)は尾(を)を垂(た)れ、首(くび)を垂(た)れ、バサリバサリと傍(かたはら)の森(しんりん)目(め)が龍國別(たつくにわけ)、テ、カーと云(い)ふ宣傳(せんでん)へやつて來(こ)られたのは三五教(あななひけう)の鷹依姫様(たかよりひめさま)を始(は)め、龍國別(たつくにわけ)、テ、カーと云(い)ふ宣傳(せんでん)使(し)の一行(いっかう)であつた。あの時(とき)に若(も)しも、鷹依姫様(たかよりひめさま)がそこへ來(き)て下(くだ)さなかつたならば、吾々(われわれ)は最早(もはや)此世(このよ)の人(ひと)ではないのだ。そこで俺達(おれたち)は鷹依姫様(たかよりひめ)を命(いのち)の親(おや)と仰(あ)ぎ、直(ただち)に入信(にふしん)してお弟子(でし)となつたのだ。テ、カーと云(い)ふ二人(ふたり)の男(をとこ)から高姫(たかひめ)と鷹依姫(たかよりひめ)さまとの關係(くわんけい)を殘(のこ)らず聞(き)かされ、腹(はら)が立(た)つてたまらなくなり、神様(かみさま)のお指圖(さしづ)に依(よ)つて、今日(けふ)はキツと高姫(たかひめ)がゼムの港(みなと)へ上陸(じやうりく)すると云(い)ふ事を悟(さと)つた故(ゆゑ)、私(わたくし)の命(いのち)を助(たす)けて貰(もら)つた今日(けふ)は記念日(きねんぴ)だ、命(いのち)の親(おや)の敵(かたき)を討(う)つのは今日(けふ)だと、刃物(はもの)を用意(ようい)し、研(と)ぎすまして待つ(ま)つてゐたのだ。そして所神(ところかみ)のお指圖(さしづ)に違(たが)はず、高姫(たかひめ)一行(いっかう)がここへ見(み)えたのだから、如何(どう)しても命(いのち)の親様(おやさま)の御恩(ごおん)に酬(むく)ゆる爲(ため)、高姫(たかひめ)の命(いのち)をとり、仇敵(きつてき)を討(う)つてお上(あ)げ申(まを)さねばならない。……どうぞヨブ様(さま)、私(わたくし)の目的(もくてき)を立(た)てさせて下(くだ)さ

いませ」

ヨブ「お前の命を助けてくれたのはそりや鷹依姫であらう。併し乍ら其鷹依姫を高砂島へ出て来るようにしたのは誰だと思つてゐるか。ここに御座る高姫さまぢやないか、そうすれば直接間接の違こそあれ、高姫さまがお前の命を助けてくれとも同様ぢやないか」

マール「さう聞けばさうですなア」

ボール「如何にもヨブさまの仰有る通り、高姫さまが鷹依姫さまを、無茶を云うて追出さなかつたら、こんな所へお出でになる氣遣はなし、又俺達も助けて貰ふ譯にも行かなかつたのだ。さう思へば餘り高姫さまを悪く思ふ譯には行かぬワイ」

ヨブ「何事もすべて神様の御心から出来て来るのだから、人間の考へで或一部分を掴まへて、善だの悪だの、敵だの味方だのと云ふのは第一間違ぢや。只何事も、人間は、神様の御意思に任すより仕方がないのだよ。高姫様に御無禮を働かうとした、其罪をお詫するがよからう」

マール「コレハコレハ高姫様、誠にエライ取違を致しまして、どうぞ憎い奴ぢや

と思召さずに、神直日大直日に見直し聞直し、お赦し下さいませ。今ヨブさまの御意見によりましてスツカリ改心致しました。貴女こそ鷹依姫様にも優る私等に對しての、生命の御恩人で御座います」

ポール「高姫様、何卒御許しを願ひます。……ヨブさま、どうぞあなた様から、宜しくお執成しを御願致します」

高姫「あゝ皆さま有難う。能うそこ迄鷹依姫様に對し、お心を掛けて下さいませ。

妾は何よりあなた方の其美はしきお心が嬉しう御座います。妾もあなたの御聞の通り随分我情我慢の強い女で御座いました。さうして鷹依姫様其外の方々に對し、實に無殘な仕方を致しましたが、今日では最早スツカリと改心を致しまして、眞心一つで神様の御用をさして頂いて居りますから、どうぞ今後は宜しく、御互に御世話を願ひます」

マール「有難う御座いました。是にて私もヤツと安心致しました」

ポール「高姫さま、ヨブさま、御一同様、どうぞ私の様な愚者、何卒御見捨てなく、今後の御指導を御願申します」

常彦、春彦兩人は奇妙なる因縁の寄合ひに今更の如く感じ入り、呆けたやうな顔をして、此光景をまんじりともせず眺めて居る。

(大正一一・八・一三 舊六・二一 松村眞澄録)

第一八章 天祥山(八四〇)

大海中に浮びたる
カーリン島に名も高き

無頼の悪漢マール、ボールは
島の男女に嫌はれて

詮術もなき悲しさに
夜陰に乗じヨブの家

忍びて寶を掠奪し
暗に紛れて逃出す

天網恢々疎なれ共
洩れぬ例しに洩れずして

逃行く姿を門口で
此家のヨブに見付けられ

お前はマール、ボールかと 聲かけられて恐縮し

茲にグツグツしてゐたら 島の規則に照らされて

明日は必ず締首の 處刑に會ふは知れた事

逃げるに若かずと磯端の 小舟を盗んで兩人が

波立ち騒ぐ海原を 櫓櫂を操り生命懸け

北へ北へと漕いで行く 俄に吹き來る暴風に

小舟は木の葉の散る如く 茲に危き玉の緒の

やつと命を拾ひつつ ゼムの港に漂着し

後振り返り眺むれば 只一時の出來心

犯した罪の恐ろしさ 後より追手のかかるよな

不安の雲に包まれて 天地の神に罪惡の

お詫をなさむと天祥の 山にかかれる大瀑布

ハンドの瀧に身を打たせ 七日七夜の荒行を

勤むる折しも恐ろしや モールバンドの怪獸が

思はずここへのそのそと 現はれ來りて兩人を

尻尾の先の鋭利なる 劍をふり立てふりすぎ

二人に向つて攻め來る 進退茲に谷まりし

マール、ボールは胸を据ゑ 天をば拜し地を拜し

力限りに太祝詞 天の數歌一二三つ

四つ五つ六つ七つ八つ 九つ十百千萬

心を碎いて祈り居る モールバンドは容赦なく

尻尾に力を集中し 二人を打たむとする所へ

俄に聞ゆる宣傳歌 次第次第に近付けば

流石獰猛な怪獸も 次第次第に萎縮して

銚をば戢め尾を縮め 頭をさげてノタノタと

あたりの林に身を隠し 後白雲となりにけり。

マール、ボールの兩人は 九死一生の此場合

助け玉ひし生神は 何神なるぞと近よりて

両手を合せ跪き

涙と共に伺へば

三五教の宣傳使

鷹依姫や龍國別の

神の司を始めとし

テーリスタンやカーリンス

四人の珍の神司

茲に二人は平伏し

救命謝恩の辭を述べて

鷹依姫の弟子となり

此瀧水に身を浸し

朝な夕なに大神を

祈りてここに詣で来る

數多の人を救ひつつ

樂き月日を送りしが

いよいよ今日は玉の緒の

命拾ひし一年目

命の親の恩人を

虐げまつりし高姫を

ここに待受け鷹依姫の

教の司の仇を討ち

萬分一の恩報じ

仕へまつりて天地の

神の御前に赤誠を

現はし呉れむと待ちゐたる

時しもあれや高姫は

常彦、春彦始めとし

ヨブを引きつれ悠々と

天祥山を指さして 進んで来る四人連れ

マール、ボールの兩人は これこそ的切り高姫と

九寸五分をば振翳し 右と左に突きつける

流石の高姫身をかはし 飛鳥の如く飛び退けば

カーリン島のヨブさまは 二人の中に割つて入り

まづまづ待てよ兩人よ お前はマール、ボールの兩人か

如何してお前はここへ来た 様子を聞かせと呼ばはれば

ヨブと聞くより兩人は 驚き周章手をつかへ

心の鬼に責められて あやまり入るぞ健氣なれ

あゝ惟神々々 御靈幸はひましまして

因縁者の寄合で 此街道に神の道

【うまら】に【つばら】に説きあかし 鷹依姫や高姫の

雪より清き胸の内 輝き渡るぞ尊けれ

あゝ惟神々々 御靈幸はひまませよ。

マール、ボールの兩人は、高姫、ヨブの訓戒に依り、釋然として吾考への誤れることを悟り、天祥山のハンドの瀧迄案内者として進み行く事となつた。

茲に一行六人は途々勇ましく宣傳歌を唄ひ乍ら、路傍の大蜥蜴や虻蜂などを脅威しつつ、早くも天祥山の山口に差かかつた。ハンドの瀧迄は、まだ十四五丁の

距離がある。され共ナイガラの瀑布に次いでの名高き大瀧、淙々たる瀧の音は手に取る如く聞えて來た。油蟬や蝸の鳴く聲は、耳を聳せむ許り鳴き立てる。流

石熱國のブラジルの此地域、二三里の間は天祥山より吹き嵐す涼風に、恰も内地の秋の如く、瀧に近づくに従ひ肌寒く、齒さへガチガチと鳴り出して來た。

常彦「随分涼しい所ですなア。高砂島へ渡つて以來、斯様な涼しい目に會うた事は初めてです。此山には種々と恐ろしい猛獸が棲んでゐると云ふことを、船中の

客より聞きました。實に物凄い光景ぢやありませんか」
マール「此山には獅子、山犬、虎、熊などの猛獸が出没致しまして、夜な夜な里

に現はれ來り、年寄りや子供に害を與へますから、吾々は三五教の神様を此瀑布の傍にお祭りいたし、朝夕人民安全の爲に、御祈念をこらして居ります。其御神

德にや此頃は猛獸の影も餘程減つて來ました。二年以前に比ぶれば、二十分の一位より居らなくなりました。そしてモウ一つ恐ろしいモールバンドと云ふ怪獸が時々やつて來ます。其獸は象を十匹も寄せた様な胴體をし、水掻きのある爪の長い四本足で、鰐の様な尻尾の先に鋭利な劍がついてゐて、すべての猛獸を其尾でしばき斃し、食つて居る恐ろしき動物が居ります。此頃は猛獸が少くなつたので、モールバンドも滅多に參りませぬが、若しも彼の目に止まつたが最後、人間だろが、獸だらうが、容赦なく片つぱしから尾で叩き殺し、皆食つて了うと云ふ恐ろしい奴ですから随分氣を付けねばなりません。時々暑くなるとハンドの瀧に横たはつて瀧水を浴び、グウグウと鼾をかいて寢てゐることがあります。私も昨年來四五回見つけました。さういふ時にはソーツと足を忍ばせて近よらない方が得策です。鷹依姫の宣傳使の様に御神徳があれば言靈を以て追ひ散らす事が出來ますが、到底吾々如き神徳のなき者は近寄らぬのが一番ですよ。併し今日は私がある瀧に於いて鷹依姫さまに命を拾つた記念日ですから、これからあの瀧の下で祭典を行ひ、天地の大神様に御禮を申上げねばなりません。幸ひあなた方は

宣傳使せんでんしで居ゐらせられますから、一ひとつ此この祭典さいてんを賑にぎ々にぎしく御手傳おてつたひ下くださいませぬか』
高姫たかひめ『それは何なにより好都合かうつがふです』
と云いひ乍ながら早はやくも瀧たきの側近そばちかく辿たどり着ついた。

大瀑布だいはくふの飛沫ひまつはあたりに散ちつて霧きりの如ごとく濛々もうもうとそこらの樹木じゅもくを包つつんでゐる。互たがひ
の姿すがたさへもハツキリ見みえぬ迄までに深ふかき霧きりが立たちこめて居ゐた。

(大正一一・八・一三 舊六・二一 松村眞澄録)

第十九章 生靈いきりやうの頼たのみ〔八四一〕

名なに負おふ大瀑布だいはくふの前まへに一いつ行かう六人ろくにんは、霧雨きりあめを冒をかして進すすみ寄より、高姫たかひめは背せなの石像いしざうを
おろし、瀧たきの傍かたはらに木この葉はや笹ささで筭はうきを拵こしらへ、掃はき清きよめ、瀧壺たきつぼに曬さらされた小砂利こじやりを各かく
自じに手てにすくひ、其跡そのあとに布しき竝ならべ、石像いしざうを安置あんちして、あたりの木この實みを【むし】
り、之これを供そなへ、且かつ櫛かしはの枝えだを玉串たまぐしとして、一いち々いち供そなへ、天津祝詞あまつのりとを奏上そうじやうし終をはつて、

瀧壺たきつぼに身を躍をどらせ、袂みそぎを修しうした。袂みそぎの業わざも漸やうやく終をはり、再ふたび石像いしざうの前まへに端坐たんざして、幽齋いうさいの修業しうげふに差さしかかつた。

マールの依頼いらいによつて、彼かれを神主かむぬしとなし、美うるはしき小砂こすなの上うへに坐ざせしめ、高姫たかひめは自らみづか審神者さにはの役やくを奉仕ほうしした。

ブラジル國こくに名なも高たかき 雲くもを壓あつしてそそり立たつ

天祥山てんしやうざんより落おちかかる 幾千丈いくせんぢやうの白瀧しらたきに

高姫たかひめ一行いっかう六人ろくにんは 心こころを清きよめ身みを淨きよめ

袂拂みそぎはらへば清涼せいりやうの 空氣くうきはあたりに充みちわたり

常世とこよの春はるの梅うめの花はな 四邊しへんに薰かをる心地こちして

幽齋いうさい修業しうげふを始はじめける 高姫司たかひめつかさを審神者さにはとし

マールを砂庭さにはに端坐たんざさせ いよいよ神人感合しんじんかんがふの

行事げうじに仕つかへ奉まつりける。 マールは身體震動しんたいしんどうし

兩手りやうてを組くんだ其儘そのままに 右みぎに左ひだりに振ふりまはし

両手りやうてを上げあ下げさなしなが乍なら　　ウウンウンウンウと唸うなり出だす

獅子し狼おほかみか野の天てん狗くか　　金きん毛まう九きう尾びか曲まが鬼おにか

但ただしは野のぎつね狐の野だぬき狸ぎか　　姿しせい勢いの悪わるい神かむ憑がり

此こ奴いつはチツと怪あやしいと　　團どん栗ぐり眼まなこを剥むき乍なら

齒はなみ竝なるの悪わるい口くちあけて　　高たか姫ひめさまがする審さ神に

マールの體からだは中ちう天てんに　　高たかくあがりて落おち來きたる

此この有あり様さまに常つね彦ひこは　　これこその切てきり曲まが神かみの

憑ひよ依ういしたるに違ちがひない　　言こと向むけ和やはし神しん界かいの

誠まことの道みちを諭さとさむと　　高たか姫ひめ司つかさの側そばに立たち

雙もろ手てを組くんで鎮ちん魂こんの　　姿しせい勢いを執とりつつ神かむ主ぬしの

體からだに向むかつて靈れいかける　　漸よう漸ようマールは鎮ちん靜せいし

汗あせをタラタラ流ながしつつ　　口くちをへの字じに相あひ結むすび

口くちを切きらむと焦あせれ共ども　　容よう易いに出いでぬ言こと靈たまに

ワアワアワア私わたくしは　　アゝ、ゝ三あ五なの

神かみの教をしへの宣傳使せんてんし

夕たか々々、鷹依よりの

姫ひめの命みことや夕夕夕

龍國たつくに別わけやテ、

テーリスタンやカ、カールインスの一行いっかうと

ク、ク、黒姫くろひめが黄金こがねの玉たまを紛失ふんしつし

夕、夕、高姫たかひめにメ、メ、目を剥むかれ

ス、ス、住み慣なれし綾あやの聖地せいちを後あとにして

大海原おほうなばらを打渡うちわたり玉たまの在處ありかを探さぐらむと

ク、ク、黒姫くろひめや高山彦たかやまひこの夫婦ふうふ連れ

ワ、ワ、和田中わだなかの龍宮島りうぐうじまに行ゆかしゃつた

鷹依たかより姫ひめは三人さんにんの神かみの司つかさと諸もろとも共に

夕、夕、高砂たかさこの秘密ひみつの島しまに打渡うちわたり

黄金こがねの玉たまを探さぐらむとテルの街道かいだうを南進なんしんし

ア、ア、足痛あしいため漸やうやく茲ここにターターター

蛸取村たことりむらに安着あんちやくし昔むかしの昔むかしの其昔そのむかし

日の出神に從ひて

あななひけう
三五敎の御敎を

開き玉ひしサ、

さより
狹依の彦の舊蹟地

アリナの瀧に身を打たれ

かがみ
鏡の池の傍に

庵を結びタ、

たかよりひめ
鷹依姫は岩窟に

タ、タ、竹筒を

たつさ
携へ乍ら忍び入り

月照彦と瞞着し

タ、タ、竹筒を

ハ、ハ、齒の脱けた

くち
口に喰はへてフーフーと

竹筒通して作り聲

つきてるひこのおほかみ
月照彦大神が

再び茲に現はれて

たかさこしま
高砂島の人々よ

福德壽命が欲しければ

たま
玉を供へに来るがよい

必ず廣き神徳を

わた
渡してやらうとテー、カーの

言觸れ神を遣はして

あさひ
旭もテルヤヒルの國

花咲き匂ふハルの國

いで行く足もカルの國

宇都の國まで跋渉し

かがみ
鏡の池にダ、

大事だいじの玉たまを供そなへたら キツと御お神か徳げが有あるぞやと

あちらこちらと宣せん傳でんし 其その效かう空むなしからずして

數多あまたの玉たまは集より來きたり 眼まなこ光ひからし一いち々いちに

尋たづねまはれど肝かん腎じんの 黄こが金ねの玉たまは現あらはれぬ

コ、コ、こんな事こと 何いつ時まで迄までやつて居をつたとて

肝かん腎じん要かなめの黄わう金こんの 珍うづの神しん寶ぼうはデ、

出でて來こないとテ、カガ ブツブツ小こ言ごとを稱となへ出だす

龍たつ國くに別にの神かむつ司かさ 二ふ人たりを宥なだめて待まて暫しばし

これ丈だけ澤たく山さんいろいろの 玉たまがやうやう寄よつて來くる

肝かん腎じん要かなめの瑞ずゐ寶ほうは キツと一いち番ばん後あと押おさへ

モウ暫しばくの辛しん抱ぼうと 宥なだめすかしつ待まつ間うちに

木この間まにひらめく白しろ旗はたに オ、コ、コ、黄わう金こんの

玉たま獻けん上じやうと記しるしつ 大おほ勢ぜいの人数にんずに送おくられて

御み輿こしをかつぎ登のぼり來くる 之これを眺ながめた夕ゆふ、

鷹依姫は雀躍し
岩窟内に忍び込み

様子如何にと窺へば
テーナの里の酋長が

玉の御輿をかつぎ込み
池の畔の石の上に

安置し乍ら夕々々
龍國別に打向ひ

私が宅の重寶で
先祖代々傳はりし

黄金の玉を神様に
獻らむと夫婦連れ

はるばる詣でマ々々
参りました力々々

神主様よ一時も
早く検め寶玉を

受取り神にオ々々
御供へなさつて下されと

聞いたる時の嬉しさよ
テー、カー二人は寶玉を

入れたる筈を手に捧げ
餘りの事の嬉しさに

心は空に足許は
眞暗がりの岩角に

躓き倒れてドンブリと
鏡の池に墜落し

ソ々々、其機み
タ々々、玉筥は

鷹依姫たかよりひめが隠かくれたる
岩窟内がんくつないの足許あしもとに

折をりよく飛とんで來きた故ゆゑに
月照彦神つきてるひのかみさまに

化ばけてゐたのを胸忘どうわすれ
思おもはず外そとに飛とび出だせば

龍國別たつくにわけは肝潰きもつぶし
コレコレまうしお母かアさま

今いま出でられては仕様しやうがない
サツパリ化ばけが現あらはれる

肝腎要かんじんかなめの性念場しやうねんば
へへへ、拙劣へたなこと

してお呉くれたと口くちの中なか
囁ささやく胸むねの苦くるしさよ

正直しやうじき一途いちずの酋長しうぢやうは
幸さいはひ夕ゆふ々々、鷹依たかよりの

姫ひめの姿すがたを生神いきがみと
一いちも二にもなく信賴しんらいし

玉たまを渡わたして呉くれた故ゆゑ
力ちから々々、神様かみさまに

對たいして誠まことに濟すまないが
生神様いきがみさまの氣取きとりにて

酋長夫婦しうぢやうふうふうに打向うちむかひ
お前まへの身魂みたまは清きよけれど

モ少すこし垢あかが殘のこつてる
一日いちにち一夜いちや瀧水たきみづに
さうしておいて酋長しうぢやうが

體からだを淨きよめて來くるがよい

アリナの瀧へ往た後で

瑪瑙の玉を取り出し

黄金の玉とすりかへて

悪い事とは知り乍ら

三千世界の人々を

助ける爲の御神寶

夕々々大功は

小々々々小瑾を

顧みずと云ふ事も

あるではないかと一行が

黄金の玉を引掴み

錦の袋に納めつつ

アリナの峰を打渡り

アルゼンチンの大原野

ポプラ繁れる木の蔭に

一夜を明かし待つ中に

レコード破りの風が吹き

テーリスタンも寶玉も

中空高く舞ひ上り

玉は梢にブラ下がり

テーリスタンは逆様に

唸りを立てて落來り

人事不省の爲態

カ々々々カーリンス

龍國別も木の下に

進み寄るよと見る中に

ウンと一聲顛倒し

人事不省となりにける

鷹依姫は唯一人 三人の男の介抱を

致せば漸く息を吹く 草の庵を結びつつ

ポプラの幹を包みたる 蜈蚣や蛇の厭らしき

影消ゆる迄根比べ 自然に玉の落つる迄

待つて居るかと言ひ乍ら 草の庵に立入りて

一夜を明かす折柄に ケラケラケラと笑ひ聲

妖怪變化と驚いて 三人の男は泡を吹き

慄ひ居るこそ可笑しけれ 鷹依姫は立出でて

怪しき聲に打向ひ 談判すれば此は如何に

尊き神の現はれて 執着心をサ、

サツパリ放かせと諭さるる 鷹依姫も我を折つて

生れ赤兒と成り變り 罪亡ぼしに四方の國

誠の道を開かむと 櫟ヶ原の草を分け

苺に喉をうるほせつ 玉の湖水の傍に

繁れる椰子樹の雨宿り

神に任せし此體

何時か如何なる災の

迫り来るやも計られず

記念の爲に一行の

姿を刻みおかうかと

龍國別が心をば

こめて作りし石の像

後に残してアル湊

四人は此處に船に乗り

北へ北へと進む折

吾れは誤り海中に

陥り水底フゝゝゝ

深く沈みてありけるが

龍國別は吾母の

危難を救ひ助けむと

身を躍らして飛込みぬ

續いてテ、カー兩人も

吾等親子を助けむと

飛込みたるぞ健氣なれ

大道別の分靈

琴平別の龜の背に

四人は無事に助けられ

波に泛びてやうやうに

ゼムの湊に送られて

茲に四人は天祥の

山にかかれる大瀧に

心の垢を淨めむと

進みよる折マール、ボール 二人の男が怪獣に

悩まされむとする所 天津祝詞を奏上し

危き所を救ひやり それより山河傳ひつつ

チンの湊に安着し 船を造りて眞帆をあげ

アマゾン川を溯り 廣袤千里の玉の森

モールバンドを言靈の 力に言向け和さむと

四人はやうやう森の中 探り探りて奥深く

今は迷ひの最中ぞ 夕々々、高姫よ

一時も早く玉の森 現はれまして吾々が

コ々々、此度の 神業を助け玉へかし

あゝ惟神々々 神の御靈の幸はひて

マールの身魂に神懸り 鷹依姫の生靈

ここに現はれ願ぎまつる ウンウンウンと飛びあがり

跳ねまはりつつ元の如く マールは正氣に復しけり。

これより高姫はマール、ボールに暇を告げ、天祥山の麓を巡り、夜を日に繼いでチンの湊に出で、それより船を求めて鷹依姫の迷ひ苦む玉の森に四人を救ひ出すべく進み行く。惟神靈幸倍坐世。

(大正一一・八・一三 舊六・二一 松村眞澄録)

第二〇章 道すがら(八四二)

大き正しき聖の世 十一年の夏の末

八月三日に聖地をば 【出口】の【王仁】や【松村】氏

(出口王仁・松

村眞澄)

【佐賀】の【伊佐男】の三人は

嚴と瑞との機を織る

(佐賀伊佐男)

伊豆の靈の【杉山】氏

一行四人と諸共に

(杉山當一)

夕日を浴びて汽車の窓

本宮山や小雲川

左右に眺めて上り行く

【山家】の驛や【和知】の驛

(和知)

神の仕組を細【胡麻】と

説き明かしつつ木の花の

(胡麻)

一度に開く此仕組

花の【園部】や小麥山

(園部)

いつしか【八木】の關越えて

萬世祝ふ【龜岡】の

(八木・龜岡)

瑞祥會の役員に

見送られつつ谷間の

岩石穿つトンネルを

七八つ越えて嵐山

(嵐山)

【花園】、【二條】、

【丹波口】

【京都】の驛に着きにける。

(花園・

二條・丹波口)

急行列車に身を任せ

神の恵に【逢坂】の

(逢坂)

關路をわたる夜の内

人も【大津】の夏の旅

(大津)

【琵琶】の湖水を眺めつつ

いづの御靈の現はれし

(琵琶)

由緒の深き【彦根】城

【米原】驛を乗越えて

(米原)

昇降客も【大垣】や 岐阜々々つまる汽車の中 (大垣・岐阜)
【名古屋】 【豊橋】 【濱松】と 濱邊の驛に停車しつ (名古屋・豊橋・

濱松)

わたちの音も【静岡】の 數多の信者に迎へられ
【沼津】の驛に着きにける。 伊豆の身魂の人々に (沼津)

自動車持ちて迎へられ 軌を連ねて桃源の
里の名を負ふ【桃】の【郷】 眺めも清き【江】の【浦】や (桃源・江

浦)

【口野】の村の【天皇山】 齋きまつれる皇神の (口野・天皇山)

祠に一同参拜し 天津祝詞を宣り終へて

社前の雑草抜き取りつ 遙に霞む富士の山

清き眺めを賞め乍ら 鰐の島をば前に見て

再び車の客となり 【北條】、【南條】 東の間に (北條・南條)

矢を射る如く【田京】村 心地も【吉田】の造酒店 (田京・吉田)

【杉原】方にと安着し 茲に車を乗捨てて (杉原)

汗を入れつつ半日の 樂しき休養取り乍ら

再び車の人となり 迎ひの數も「大仁」や (大仁)

【横瀨】に【立野】黒い影 鮎かけ人も【大平】 (横瀨・立野・大平)

針にかかるを【松ヶ瀨】や 神の【出口】の里越えて (松ヶ瀨・出口)

梅はなけれど【月】が【瀨】の 空に輝く十一夜

【門野ヶ原】を乗越えて 待ちに待ちたる【湯ヶ島】の (門野ヶ原・湯ヶ島)

ヶ島)

【安藤】旅館温泉場 狩野の激流音高く (安藤唯夫)

【谷口清】く涼風【満】ち 夏を忘るる計り也 (谷口清水)

ア、惟神々々 御靈幸はひましまして

温泉の【伊佐男】に身を淨め 明くれば舊の十二日

【杉原】氏より送られし 安樂椅子に横はり

奇き神代の物語 いよいよ二十八の巻

言靈車乗り出せば 萬年筆を携へて

手具脛引いて【松村】氏 心【眞澄】のすがすがと

一々茲に書きとめる 神代を【松村】、【杉山】氏

三千世界を【當一】の 珍の神風【福井】氏 (福井精平)

我【精】魂も【平】かに 筆の【林】の影うつす (林波)

硯の海も【波】【靜】か 【青木】が原に現れませる

嚴の御靈の大御神 【久二】常立の御教を (青木久二)

【淺】な夕なに【田】づねつつ 清く【正】しく澄み昇る (淺田正英)

日の出神や木の花の 珍の【英】芳ばしく

詔る言靈も漸くに 【安藤】の胸を撫で降し

【唯夫】も白く語り出す 臺灣島の物語

日月潭の靈境も 早【杉原】や小松原

花【佐久】野邊を後にして 教を照らす瑞月が (杉原佐久)

三五教の宣傳使 高姫、黒姫春彦が

高島丸たかしままるに助けられ
テルの港みなとに上陸じやうりくし

鏡かがみの池いけに立寄りたちよりて
月照彦大神つきてるひこのおほかみに

百ももの戒いましめ與あたへられ
生命いのちカラガラ アリナ山さん

櫟くぬぎヶ原がはらに立向たちむかひ
天教山てんけうざんの御神靈ごしんれい

日ひの出での姫ひめの計はからひに
心こころの暗やみも晴はれ渡わたり

開悟かいごの花はなにみたされて
アルゼンチンきよくとうの極東きよくとうの

アルの港みなとに到着たつちやくし
カーリン丸まるに身みを托たくし

やうやうゼムみなとの港みなとまで
高姫たかひめ一行いっかうヨブ一人ひとり

天祥山てんしやうざんに詣まうでむと
ゼムの街道かいだう辿たどる折をり

マール、ボールりやうにんの兩人りやうにんに
茲ここに端はしなく巡めぐり會あひ

鷹依たかよりひめ姫ひめや龍國たつくにわけ別のをしへつかさ
教司せうそくの消息せうそくを

探さぐりてここを出立しゅつたつし
山やまを乗越のりこえ川渡かはわたり

日數ひかずを重かさねてブラジルの
チンみなとの港みなとに安着あんちやくし

又またもや船ふねに帆ほをあげて
アマゾン河がはを溯さかのほり

モールバンドの巢ぐひたる 玉の森林指して行く

高姫冒険物語 八岐の大蛇も影隠し

世は太【平】の【松】の御代 惠の風も【福三郎】 (平松福三郎)

壬戌の秋の野邊 豊に稔り【米倉】に (米倉嘉兵衛)

道治まりし聖の世 今から【嘉】言ぎ奉り

神の【兵】士に【衛】られて 二十九卷の物語

ここにいよいよ述べ終る 豊葦原の【中】津國 (中村純也)

さやる【村】雲晴れわたり 空も【純也】の信徒が

東の國より遙々と 訪ね來れる雄々しさよ

あゝ惟神々々 神の御靈を蒙ぶりて

心も清き神人や 信徒等に守られて

靈物語述べ終る。

(大正一一・八・一三 舊六・二一 松村眞澄録)

